

滋賀県における高齢の聴覚障害者のニーズ調査 報告書



2021(令和3)年7月

社会福祉法人 滋賀県聴覚障害者福祉協会

目 次

はじめに	1
------------	---

第 I 章 調査の目的と概要

1 調査の目的	4
2 調査の概要	4
(1) 調査の内容	4
(2) 調査方法	5
(3) 調査の期間	5
(4) 調査票の集計・分析	5
(5) 調査委員会の設置	5
(6) 主な実施日程	6
(7) 助成団体	6

第 II 章 滋賀県における高齢の聴覚障害者のニーズ調査

1 ご自身のこと	8
問1 居住地（福祉圏域）	8
問2 居住期間	8
問3 年齢	9
問4 性別	9
【参考】性別による一人暮らしと年齢ごとの人数	9
問5 家族構成	10
問6 家族との会話方法	10
【参考】家族コミュニケーション（ろう者と難聴者別）	11
問7 生活するための収入（多いもの）	12
問7-1 現在の収入	12
問8 収入源	13
問9 年収	13
【参考】年収（ろう者と難聴者別）	13
問10 生活の余裕	14
【参考】生活の余裕（ろう者と難聴者別）	14

問11	学歴	14
問12	居住形態	15
問13	聴覚障害になった年齢	15
問14	身体障害者等級	16
問15	聴覚以外の障害	16
問16	日中の過ごし方	17
	【参考】年代別の日中の過ごし方	17
問17	一人で出かけることができるか	18
	【参考】居住地別の外出度	18
問18	日常の買い物に行く方法	19
	【参考】地域別の買い物の手段	19
問19	日常のコミュニケーション手段	20
問20	補装具や日常生活用具などの福祉機器や情報機器	20
問21	健康状態	21
	【参考】年代別の健康状態	21
問22	通院しているか	22
問22-1	通院頻度	22
	【参考】通院する人の年代別状況	23
問22-2	通院方法	23
問23	病気の時の困りごと	24
2	障害と暮らし ～生活と介助～	25
問24	今の生活に誰かの助け（介護や介助）が必要か	25
	【参考】介護・介助が必要と回答した人の介護サービスの利用の状況は	25
問25	だれかの助け（介護・介助）が必要な理由	26
3	障害と暮らし ～介護サービス～	27
問26	介護保険や介護サービスを知っているか	27
	【参考】一人暮らしまたは二人暮らしの人の介護サービス利用状況	27
	【参考】「介護・介助が必要」と回答した人の介護サービスの利用は？	28
	【参考】介護サービスを「知らない」と回答した人の通院状況	28
問27	要介護度	29
問27-1	利用している介護サービス	30
問28	介護・介助をしてきている人	31
問29	介護・介助を必要ないとする理由は	32
	【参考】介護を受ける必要がない（自立している）と回答した人の年代別状況	32

問30	将来、介助や介護が必要になったときに生活したい場所	33
	【参考】一人または二人暮らしの人の希望は	33
	【参考】現在の家に住み続けたい人と聴覚障害者向けの老人ホームに 入りたい人の年代別状況	34
	【参考】現在の家に住み続けたい人と聴覚障害者向けの老人施設に 入りたい人の地域別状況	34
問31	県外の聴覚障害者向け老人ホームを知っている	35
問32	滋賀県聴覚障害者福祉協会の事業	35
4	情報と社会参加	36
問33	情報を知る方法	36
問33-1	会話やおしゃべりの相手	36
	【参考】年齢層	37
問34	スマホやパソコンを使う	37
	【参考】年齢層	37
問34-1	スマホやパソコンの使い方	38
	【参考】年齢層	38
問35	活動について	39
問36	活動に参加していない理由	39
問37	近所の人との付き合い	40
問38	相談相手	40
問39	今後、あなたや聴覚障害の仲間が安心して暮らすために 滋賀県内で必要と思うことがあれば	42
5	自由回答	
問40	日常生活で困っていることや心配なこと、希望など	
	○ 施設機能について	43
	○ 仲間づくりについて	44
	○ 生活について	44
	○ 要望活動について	45
	○ コミュニケーションについて	45
	○ 交通手段について	46
	○ 情報・通信について	46
	○ 緊急時の対応について	47
	○ 街づくりについて	48
	○ アンケート調査について	48
	○ その他	48

第Ⅲ章 まとめと提言

高齢聴覚障害者の生活を通じて考える

「日常のくらしの質」の向上と「安心してくらせる街づくり」

1	調査の目的と視点 ～ 「孤独」 を超えて 「共生社会」 を	50
	(1) 高齢聴覚障害と 「孤独」 の問題	50
	(2) 支援の現状	51
2	調査結果から見えてきたこと	52
	(1) 基本属性	52
	(2) 暮らしの状況と持ち家	52
	(3) 健康状況	52
	(4) 社会参加	53
3	聴覚障害者と施設 ～ 「施設入所」 で本当に良いのか	53
	(1) どのような施設に入りたいのか	53
	(2) 自分たちが望む 「友だちができる」 デイセンター	54
4	高齢難聴者の 「ユニバーサルな課題」 と 「固有の課題」	54
	(1) 「生きる意欲」 を引き出す福祉	54
	(2) 要望・要求から 「自主的活動」 へ	55
5	コミュニケーションの確保	56
	(1) ソーシャル・コミュニケーション (=社交)	56
	(2) 交通 (移動・買い物)	56
	(3) 情報・通信 (FAX・筆談)	57
	(4) 人工内耳	57
6	緊急災害時への対応	58
7	提言：高齢聴覚障害者の生活を通じて考える 「安心して暮らせる街づくり」 に向けて	59

巻末資料

滋賀県における高齢の聴覚障害者のニーズ調査	集計データ	64
滋賀県における高齢の聴覚障害者のニーズ調査	調査票	78

はじめに

孤立・孤独のない高齢社会をめざして考えよう

現在、わが国における障害者福祉は、障害者の高齢化ならびに高齢期を迎えた障害者への支援、介護サービスの在り方について制度上、多くの課題を抱えています。滋賀県内における高齢聴覚障害者の暮らしおよび介護ニーズ把握と社会資源づくりに向けた検討が課題となっていました。

障害当事者等を中心とする聴覚障害関係団体を構成する各団体の協力を得て2020年12月1日より「滋賀県における高齢の聴覚障害者のニーズ調査」を実施しました。郵送によるアンケート調査と対話を通じた聞き取り調査というハイブリッドを採用した結果は僅か1か月間でしたが、75%を超える回答が得られることができました。

確か7年前の7月頃と思いますが、ある新聞記事が目にとまりました。

——大阪市平野区で今年6月、聴覚障害があり会話もできなかつた鈴木美奈子さん（59歳）が自宅で死亡しているのが見つかった。孤独死だった。病死とみられ、死後約2週間が経過していた。区役所のケースワーカーからも鈴木さん宅を訪問していたが、「異常が確認できなかった」という、都会のはざままでひっそりとなくなった鈴木さん。通所施設の関係者らの手で葬儀は執り行われたものの、その後の納骨場所が決まらず、亡くなってなお“孤独死”が続いている——

滋賀県大津市などでも聴覚障害者で同じような孤立死・孤独死の事例が数件発生しています。

①公営住宅で長年一人暮らししていた女性の病死、しかも炎暑の部屋だった。②公営住宅の玄関で車いすから落ちたか倒れたままの男性、緊急通報ボタンは離れたところに置いていた。③風呂に入ったままの状態で亡くなった男性の遺体が介護従事者によって発見されたのは数日が経過していた。④連絡しても通じず心配した会員の親戚がろうあ協会事務所に通報して初めて知った。妻に先立たれた単身者の孤独死だった。このように一人暮らしをしていて誰にも看取られず亡くなっています。また地域や親戚など気がつかない事例が殆どです。

誰もが住み慣れた地域で、生きがいを持って安心して暮らしていける“癒し”のまちを求めています。「介助や介護が必要になったときに暮らしたい場所は現在の家に住み続けたい」と46%回答があります。ちなみに「今後、県内に聴覚障害者向けの施設が建設されれば入所を希望する」と回答したのは高齢聴覚障害者の34%であることがわかりました。

この報告書が、単身の高齢聴覚障害者を含め、地域の皆さんや自治体の方々などに悲惨な孤立死・孤独死を防止するためにどうしたら様々なネットワーク、コミュニティの活性化を図ることができるかを考えていただく契機となれば幸いです。

今後は、新たな提言のもと、きめ細やかな聴覚障害者施策のさらなる推進に取り組んでまいります。この調査報告書の作成に関し、上掛利博委員長・京都府立大学名誉教授をはじめ本委員会委員の皆様より貴重なご意見やご提言をいただきました。また並びに関係機関、関係団体等の皆様に、熱心に調査へのご協力をいただきましたことに対し、心より厚くお礼申し上げます。

2021年7月

社会福祉法人 滋賀県聴覚障害者福祉協会
理事長 石野 富志三郎

第 I 章 調査の目的と概要

第 I 章 調査の目的と概要

1 調査の目的

滋賀県における高齢聴覚障害者支援の取り組みは、聴覚障害者団体主催の「高齢者向けのサロン」の開催や、聴覚障害の介護関係者で結成された団体が主催する「ミニデイサービス」などがあるが、いずれの取り組みもボランティア活動としての限界があり、計画的、継続的な開催や、介助や介護が必要な人にまで手が届かないという課題があった。また近年、一人暮らしの高齢聴覚障害者が「孤独死」するという事態が生じて、高齢聴覚障害者や関係者から老後の不安と支援の必要性が語られるようになってきた。

そこで、社会福祉法人滋賀県聴覚障害者福祉協会（以下、法人）では、高齢聴覚障害者に対する支援の現状を関係者と共有するため、2019年10月、当事者団体・施設の取り組みと、地域の聴覚障害者や支援者の声を交流するセミナー（聴覚障害者の社会的自立を考えるセミナー）を開催した。また、2020年11月にも同様のセミナーにおいて高齢聴覚障害者支援の事例発表などを行い、課題の共有を図った。これらのセミナーを通して、聴覚障害者団体が開催している「サロン」を発展させたいという希望や、介護が必要な人への支援を求める声、更には老人ホーム建設の要望の声も出され、法人としての高齢聴覚障害者支援に向けたビジョンの策定が急務となってきた。

法人は、2008年に発表した「滋賀県聴覚障害者福祉ビジョン2008」（2008年～2018年）で、「聴覚障害者は地域の中でコミュニケーションがうまくできないことから社会的に孤立しやすい傾向にあり、特に高齢の聴覚障害者の割合が高く、公的機関に手話通訳者、要約筆記者が配置されていない地域については地域社会の中で孤立し、様々な社会的不利を被っている状況にあることが想像されます」と現状を分析した。そして「高齢聴覚障害者に対する生活問題対策を柱とした取り組みについての検討を開始すること、具体的には介護保険制度に基づく居宅サービスの実施の可否や既存の老人福祉施設との連携について検討します」と今後の方向を提示したが、その期間内では検討は進まず、県内における高齢聴覚障害者の生活ニーズ把握と社会資源づくりに向けた検討が課題となっていた。

幸い2020年度に、公益財団法人ダイトロン福祉財団の障害者福祉助成金が得られることとなり、高齢聴覚障害者支援にむけた調査、検討が可能となった。調査では、滋賀県内に暮らしている高齢聴覚障害者の生活実態と介護ニーズの把握を通して、高齢聴覚障害者が老後を安心して暮らせるための社会資源の創設など、高齢聴覚障害者福祉における法人の長期計画の策定に向けた提言を行うこととした。

2 調査の概要

(1) 調査の内容

これまで全国で高齢聴覚障害者を対象に行われた調査のうち、長野県（2003年実施）、京都府（2004年、2013年実施）、富山県（2007年実施）、長崎県（2016年実施）での調査報告書等を検討して、調査票を設計した。調査票では、高齢聴覚障害者の生活ニーズを把握するため、

障害の状態や暮らし、コミュニケーション手段の状況、健康と暮らし、介護や福祉サービスの利用状況や専用老人ホームの希望、情報入手や社会参加の方法についてたずねた。また、今後、聴覚障害者の仲間が安心して暮らすために滋賀県内で必要と思うことや、日常生活で困っていること、心配なこと、希望などについてもたずねた。

(2) 調査方法

① 調査対象

滋賀県在住の身体障害者手帳を取得している聴覚障害者の内、聴覚障害者団体の会員(※)を中心に、55歳以上(調査時点)の者を抽出した。対象者は314名、調査票の回収数は236名(回収率75%)であった。

(※) 県ろうあ協会会員(地域協会会員含む)、県中途失聴難聴者協会会員、しが盲ろう者友の会会員、人工内耳友の会ACITA滋賀支部会員、及び身体障害者団体、行政からの紹介者若干名。

② 調査票の回収

調査は、新型コロナウイルスの感染予防を考慮して、調査票を個々人に郵送する方法を基本としつつ、以下の方法を取り入れた。

○説明会の開催。対象者に会場に出向いてもらい説明を受けながら調査票に記入。(9会場35人)

○所属団体内で個別に聞き取り調査を実施。(しが盲ろう者友の会、びわこみみの里、湖北みみの里)

③ 調査員

法人職員(7名)及び調査委員会委員(1名)、また一部、自治体職員、施設関係者が担当した。

(3) 調査の期間

2020(令和2)年12月1日～12月31日

(4) 調査票の集計・分析

回収した調査票の点検・整理の作業は柴田委員の協力のもと事務局が担当した。また、各種のクロス集計と製表、分析についても柴田委員に助言を仰いだ。調査委員会で検討を重ね、本報告書の執筆は上掛委員と柴田委員及び事務局メンバーがそれぞれ分担した。

(5) 調査委員会の設置

法人内に「高齢聴覚障害者のニーズ調査委員会」を設置した。委員会は、聴覚障害者当事者団体及び支援団体の役員、法人・施設代表、学識経験者、県障害福祉課(オブザーバー)で構成した。

委員長	上掛利博	京都府立大学名誉教授
副委員長	石野富志三郎	(社福)滋賀県聴覚障害者福祉協会 理事長
委員	柴田浩志	立命館大学産業社会学部非常勤講師
	祐耆明人	(一社)滋賀県ろうあ協会会長
	中澤功	大津市ろうあ福祉会財政部長
	島田由美	滋賀県中途失聴難聴者協会理事
	増田美智子	滋賀県手話通訳問題研究会前運営委員
	吉田久美子	全国要約筆記問題研究会滋賀支部支部長
	西田昌弘	元老人ホーム施設長
	中西久美子	(社福)滋賀県聴覚障害者福祉協会常務理事・事務局長
	木下博	(社福)滋賀県聴覚障害者福祉協会常務理事
	松本正志	湖北みみの里所長
オブザーバー		
	石田直人	
	富田宗伸	(県健康福祉部障害福祉課 社会活動係長)
事務局		
	小竹安治	滋賀県立聴覚障害者センター所長
	有瀧美栄	滋賀県立聴覚障害者センター相談員
	田邊理恵子	湖北みみの里 生活指導員

(6) 主な実施日程

- ・10月 調査委員会(第1回)の設置・開催 / 年間計画と調査票の検討
- ・12月 調査表の発送と回収、調査説明会の開催
- ・1月 調査票の整理、集計、分析作業
- ・3月 調査委員会(第2回)の開催 / 回収状況、分析結果の検討等
- ・5月 調査委員会(第3回)の開催 / 中間報告・提言(骨子)の検討
- ・6月 調査委員会(第4回)の開催 / 最終報告・提言のまとめ
- ・7月 調査報告書の完成・配布

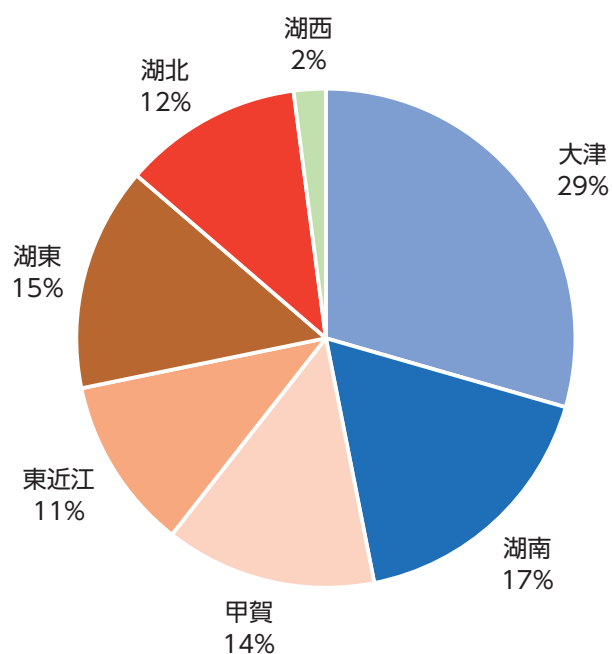
(7) 助成団体

公益財団法人 ダイトロン福祉財団 障害者福祉助成金の助成を受けて実施

第Ⅱ章 滋賀県における高齢の聴覚障害者のニーズ調査

1 ご自身のこと

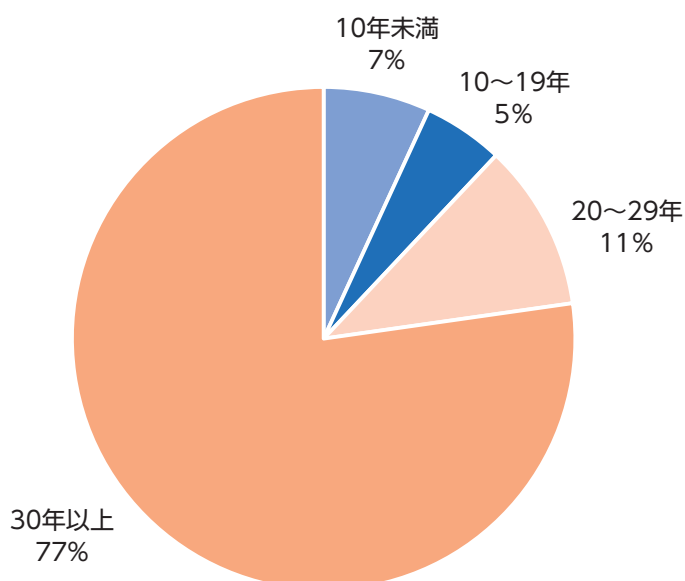
問1 居住地（福祉圏域） n=236



- 〔福祉圏域〕
- 大津圏域
大津市
- 湖南圏域
草津市・栗東市
守山市・野洲市
- 甲賀圏域
湖南市・甲賀市
- 湖東圏域
彦根市・近江八幡市
- 東近江圏域
東近江市・竜王町
愛荘町・日野町
- 湖北圏域
長浜市・米原市
- 湖西圏域
高島市

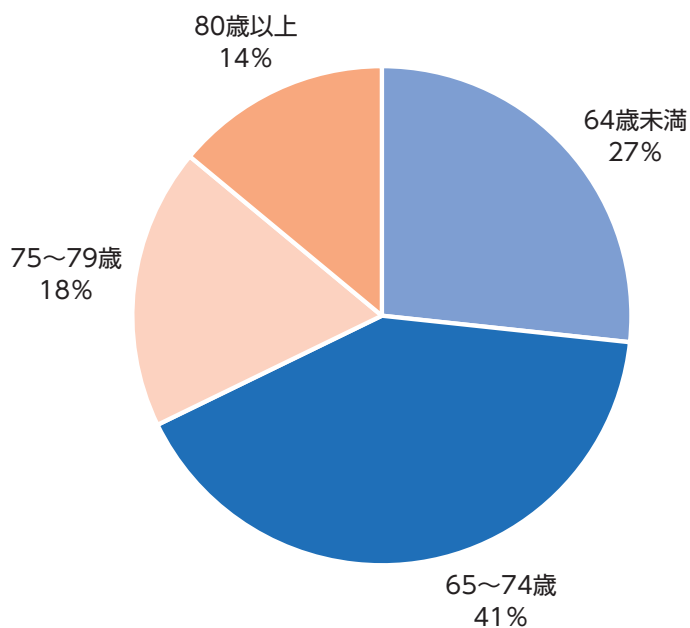
○調査対象者の居住地は、「大津圏域」29%、「湖南圏域」17%、「湖東圏域」15%の順で多く、3圏域に全体の61%が住んでいます。これは65歳以上の滋賀県の福祉圏域における人口比率においても同様でした。

問2 居住期間 n=233



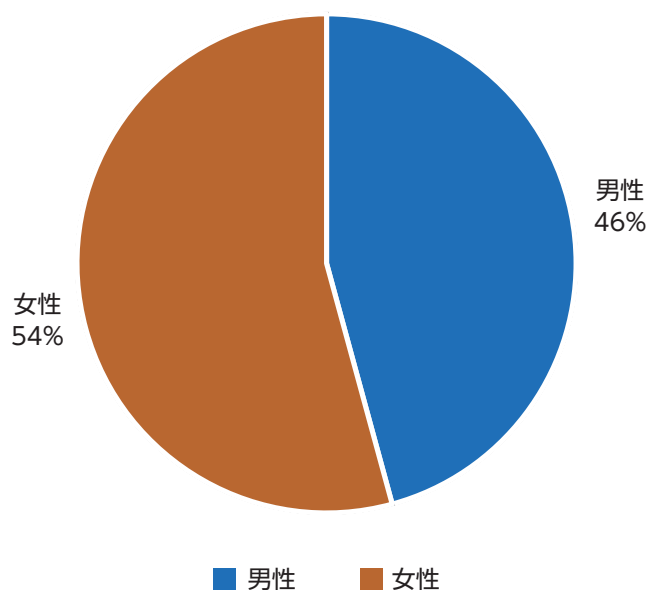
○現在の住所に住んでいる期間が「30年以上」の人が77%（180名）、「20年以上」の人と合わせると88%（205名）となり、人の移住は少ないと思われます。

問3 年齢 n=236



○調査対象者236名のうち、65～74歳のいわゆる「前期高齢者」は41%（97名）、75歳以上のいわゆる「後期高齢者」は32%（76名）です。

問4 性別 n=236

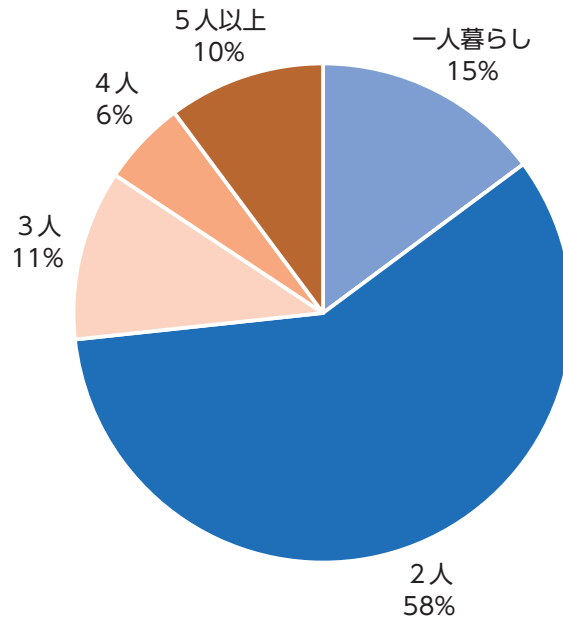


○女性が多いのは、人口統計と同じです。

【参考】性別による一人暮らしと年齢ごとの人数

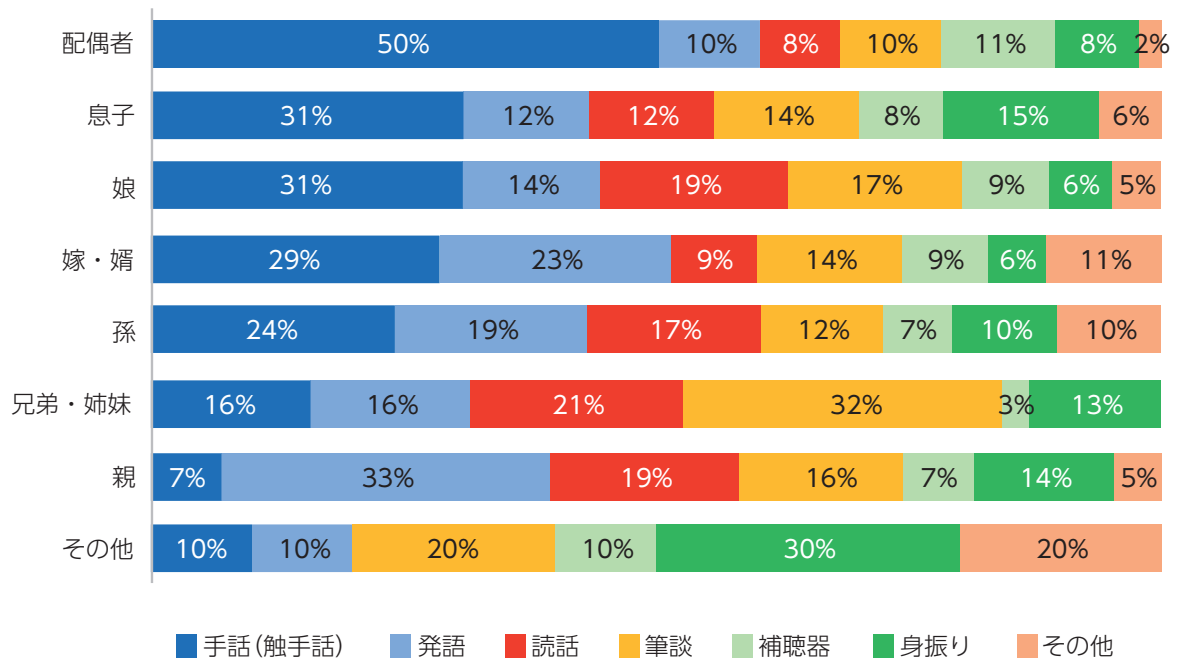
一人暮らし	64歳未満	65～74歳	75～79歳	80歳以上	総計
女性	1	8	5	4	18
男性	5	9	1	2	17
総計	6	17	6	6	35

問5 家族構成 n=236



○「一人暮らし」15% (35名)、「二人暮らし」は58% (138名) で、約半数が二人暮らしです。

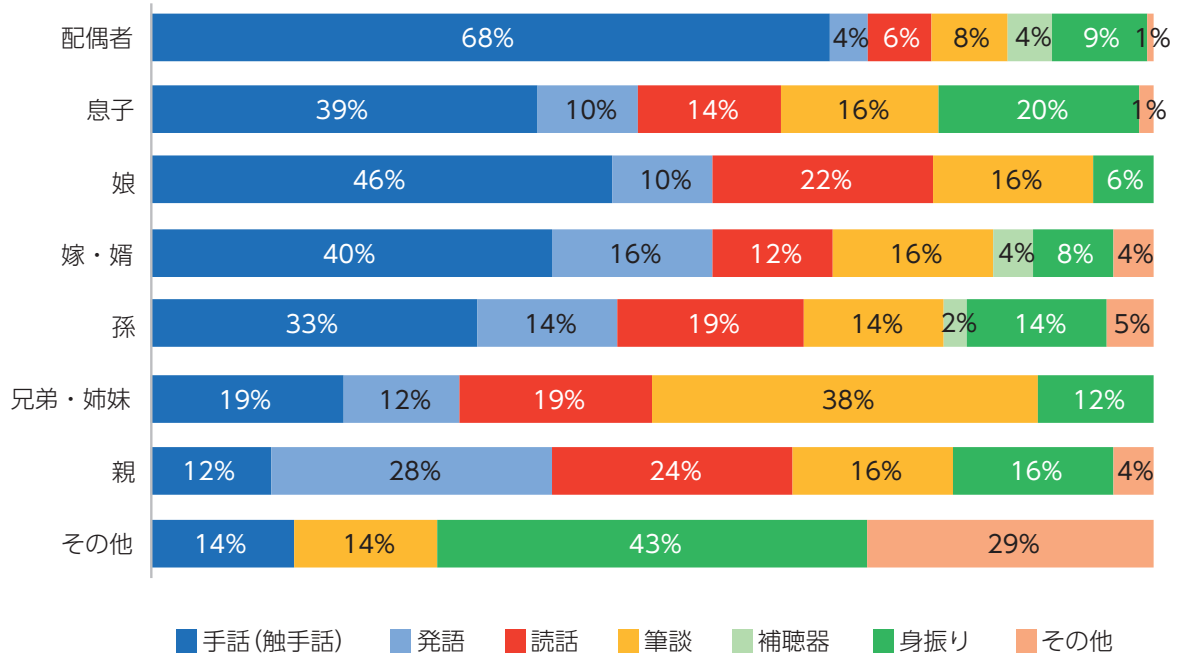
問6 家族との会話方法 (複数回答) n=236



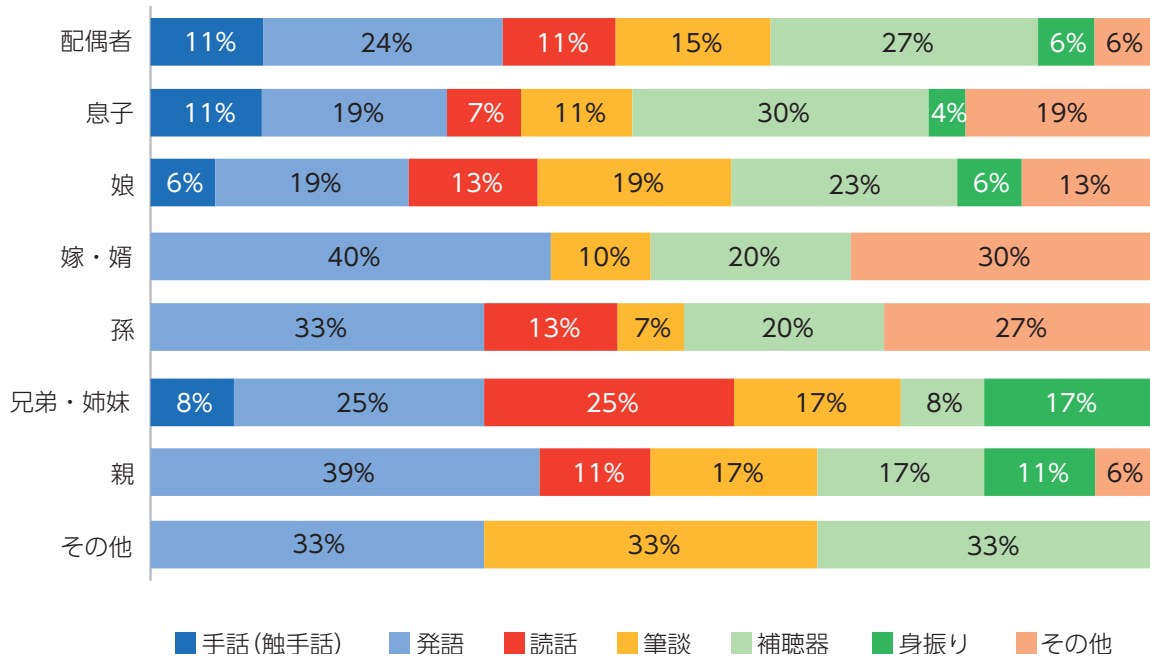
○「配偶者どうし」や「子(息子、娘)」とのコミュニケーションは手話が多く、「親」や「兄弟」などとは筆談や音声によるコミュニケーションが多いことがわかります。これは滋賀県に限らず他府県でおこなわれた調査結果と同様の結果が出ています。「親」とは音声によるコミュニケーションを優先している状況があります。

【参考】家族コミュニケーション（ろう者と難聴者別）

視覚的手段を中心とした人（ろう者）のコミュニケーション

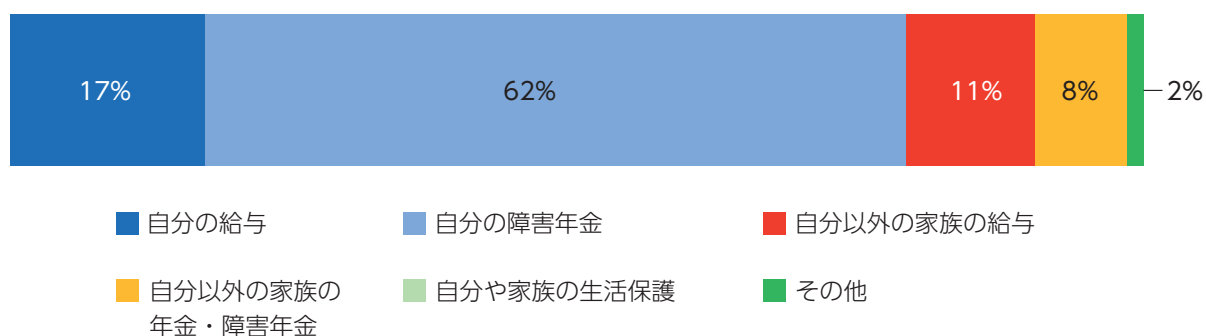


音声による手段を中心とした人（難聴者）のコミュニケーション



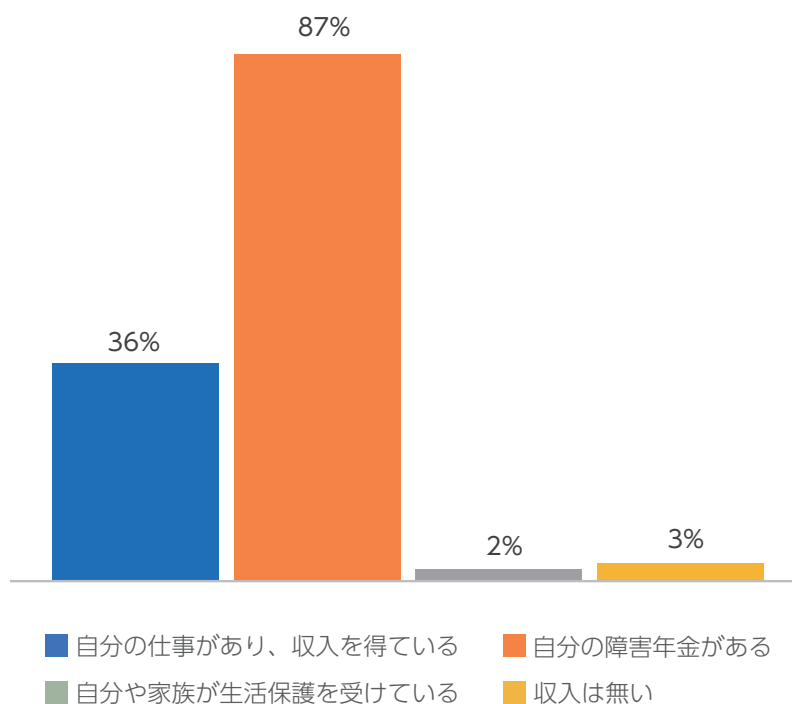
○日常のコミュニケーションが手話など視覚的手段を中心とした人（以下、「ろう者」という）と補聴器や人工内耳等の音声による手段を中心とした人（以下、「難聴者」という）とで、家族とのコミュニケーション方法がはっきりと分かれています。ろう者では親には発語や読話、兄弟や姉妹には筆談が多く、その他の人には身振りが多いのが特徴的です。難聴者ではすべての人と補聴器と発語を活用しコミュニケーションする場合があります。

問7 生活するための収入（多いもの） n=233



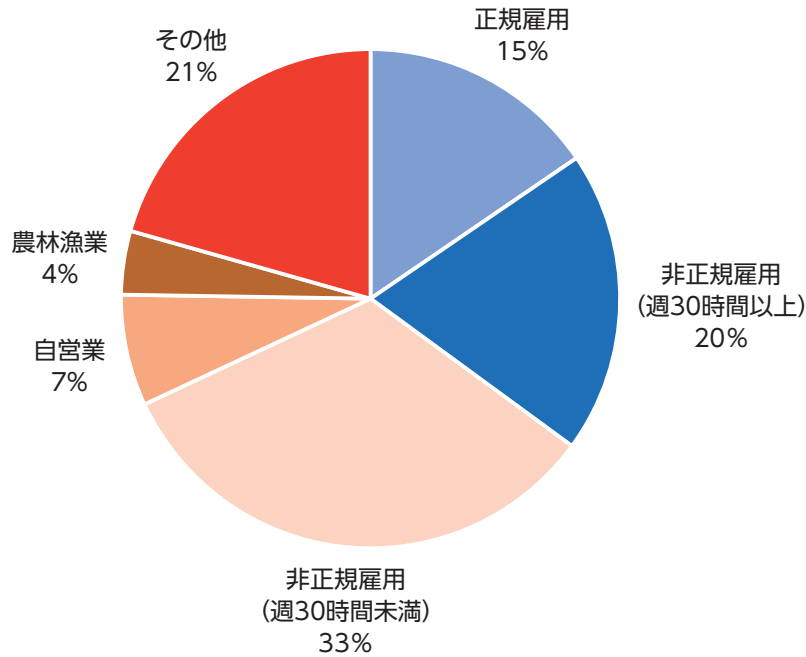
○収入で一番多いのは「自分の障害年金」62%（114名）でした。

問7-1 現在の収入 n=231



○回答者の87%（201名）が障害年金を受給しています。一方で、「収入は無い」3%（6名）のほとんどは難聴者で同居家族の収入に頼っていることが分かります。

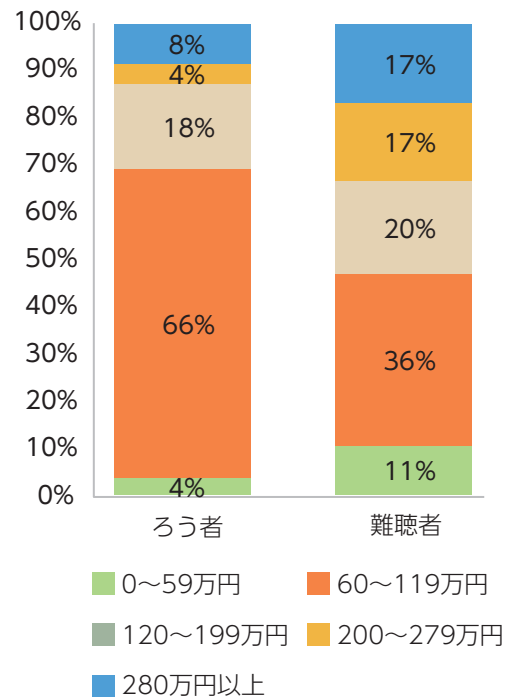
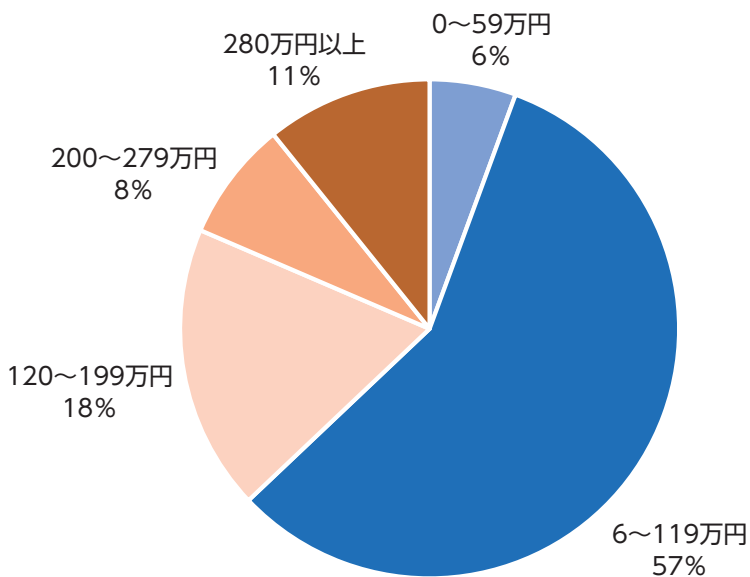
問8 収入源 n=97



○収入があっても「非正規雇用」の身分の人は 53% (51名) と半数にのぼります。「非正規雇用」の中には就労支援事業所に通っている人も含まれています。

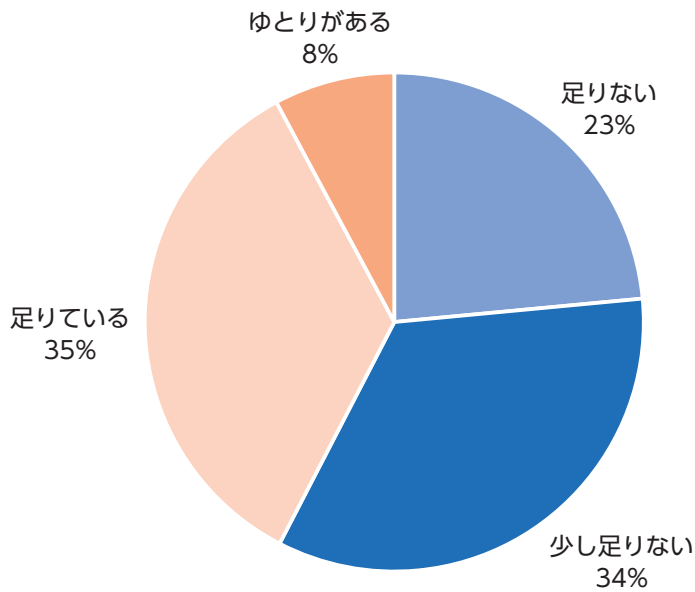
問9 年収 n=232

【参考】 年収 (ろう者と難聴者別)

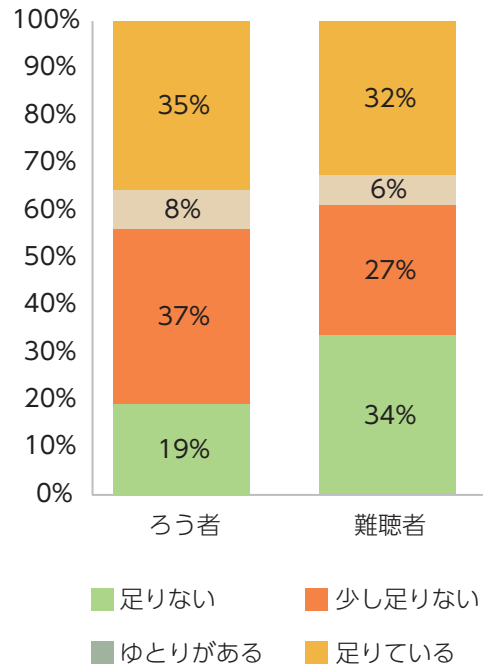


○障害者年金と思われる「年収60～119万円」が 57% (130名) と半数以上です。その内訳をろう者と難聴者の割合で見ると、ろう者は 66% (109名) なのに対し、難聴者は 36% (24名) です。また、難聴者は年収200万円以上が34% (22名) と多いことから、仕事を持つ人が比較的多いと考えられます。

問10 生活の余裕 n=217

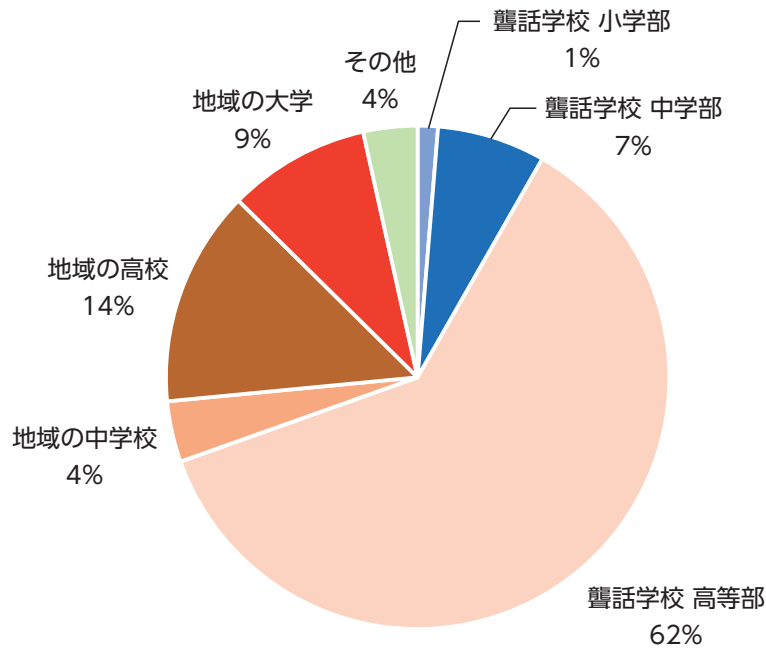


【参考】生活の余裕 (ろう者と難聴者別)



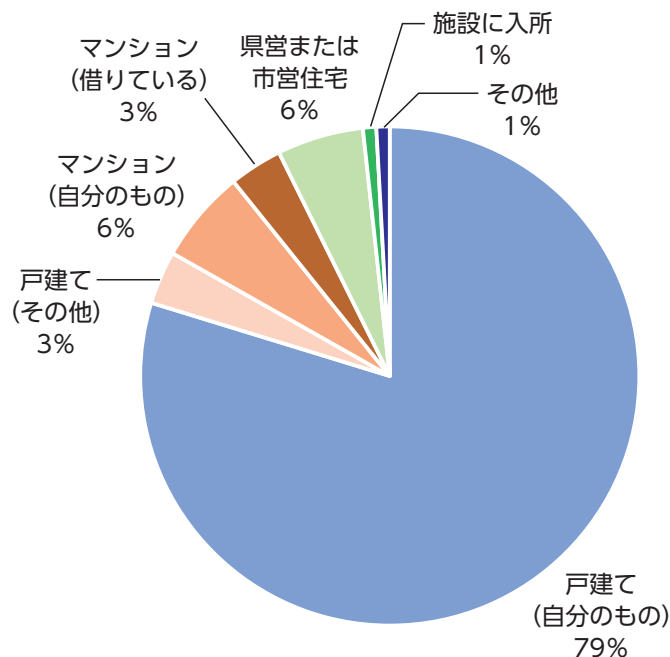
○生活のゆとりについては、「足りない」と「少し足りない」が57%（126名）と半数以上でした。ろう者と難聴者を比較すると、難聴者は「足りない」が34%（21名）見られました。

問11 学歴 n=227



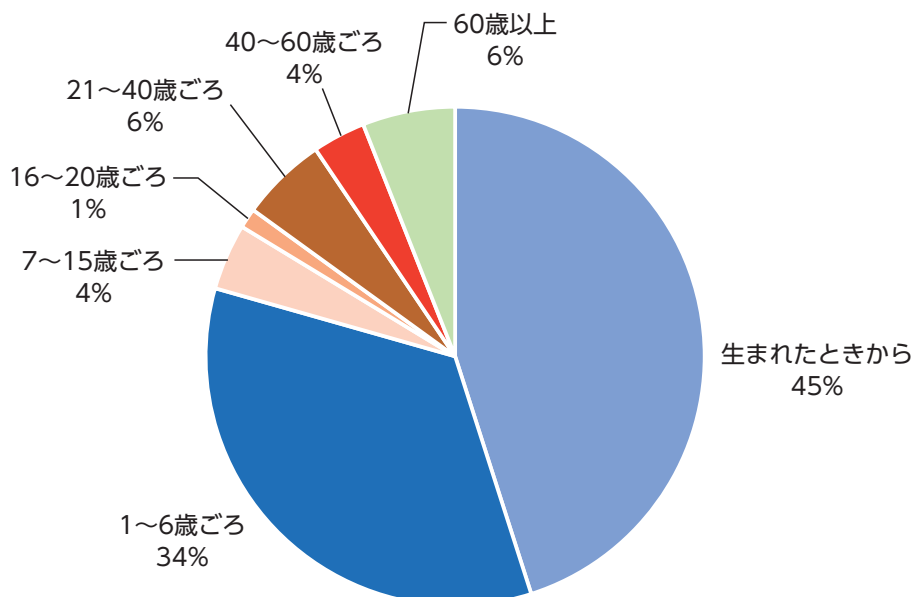
○聾話学校出身者が70%（160名）でした。問2の「居住期間 30年以上」の人が77%であることを考えると、聾話学校出身者は卒業後も滋賀県で在住している人が多いと思われます。

問12 居住形態 n=234



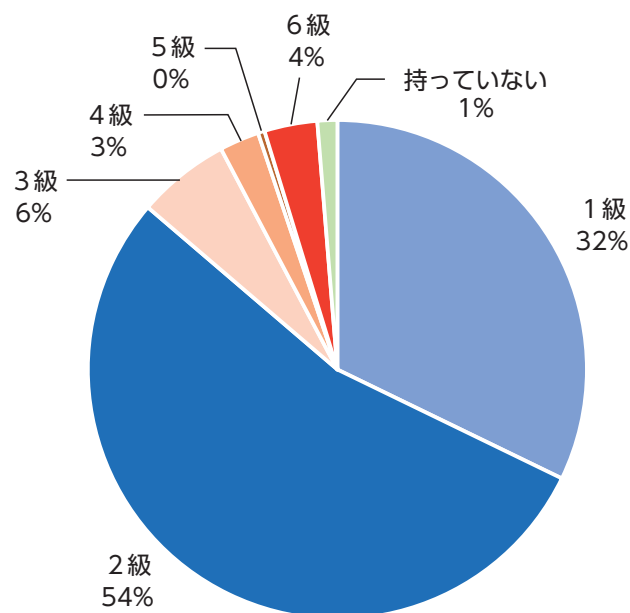
○自分の戸建てに住む人が79%（185名）でした。これは問 2、問11から考えて聾学校を卒業してから滋賀県で居住する人が多いことと、親からの家をそのまま継いでいる人も一定数いるのではないかと考えられます。

問13 聴覚障害になった年齢 n=233



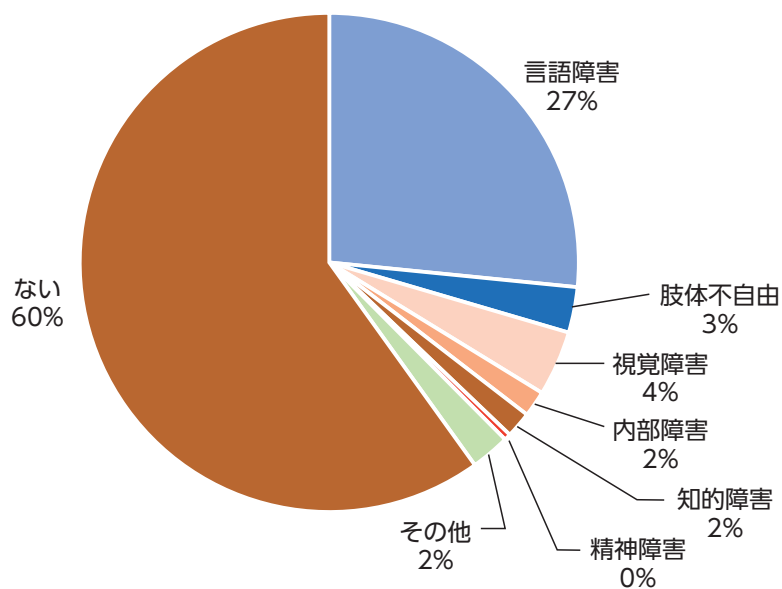
○「生まれたときから」が45%（105名）で、「1～6歳ごろ」が34%（80名）、合わせると79%（185名）と大半の人が就学前までの聴覚障害でした。「7～15歳ごろ」が4%（10名）、「16～20歳ごろ」が1%（3名）で、就学期から20才までの人は5%（13名）、「21～40歳ごろ」が6%（13名）、「40～60歳ごろ」が4%（8名）で、「60歳以上」は6%（14名）でした。

問14 身体障害者等級 n=233



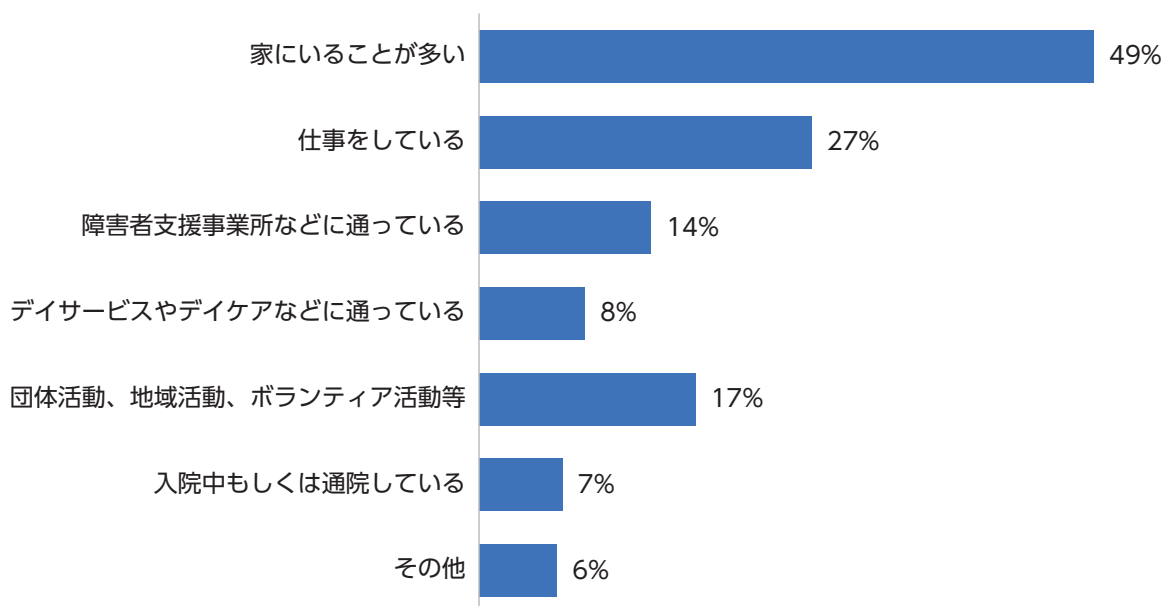
○「1級」・「2級」の重度障害者は 86% (201名) と大半を占めます。
「3級」・「4級」の人は9% (20名)、「5級」・「6級」は4% (9名) です。

問15 聴覚以外の障害 (複数回答) n=228



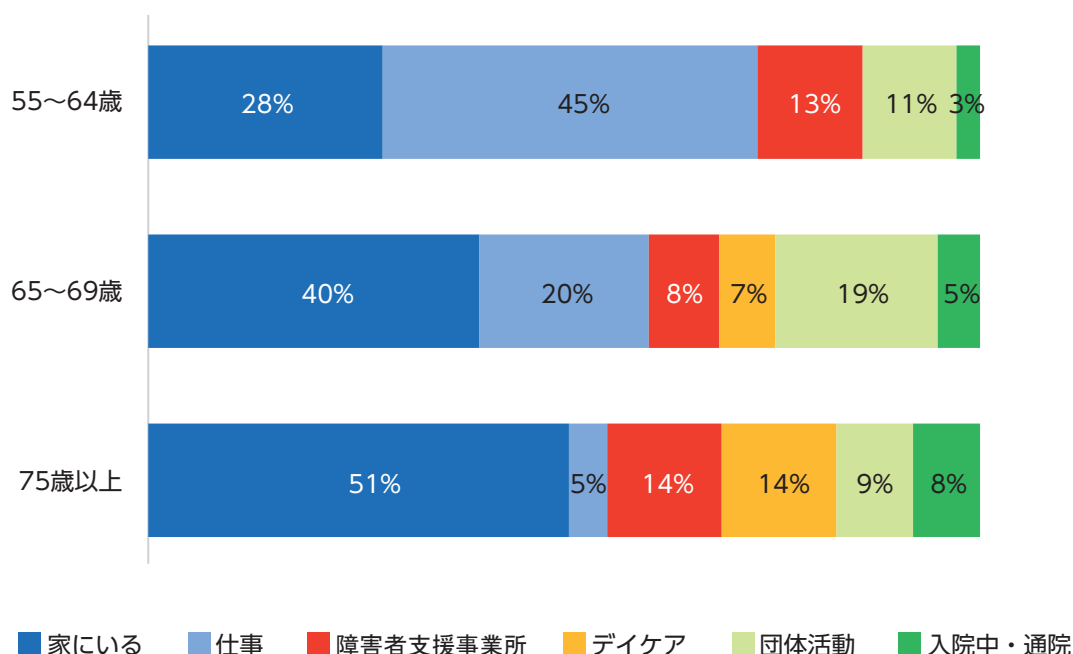
○聴覚障害と他の障害を併せ持つ人は 42% (95名) でした。言語障害を除くと 12% (26名) です。
そのうちで最も多いのは、視覚障害で 4% (10名) でした。

問16 日中の過ごし方（複数回答） n=228



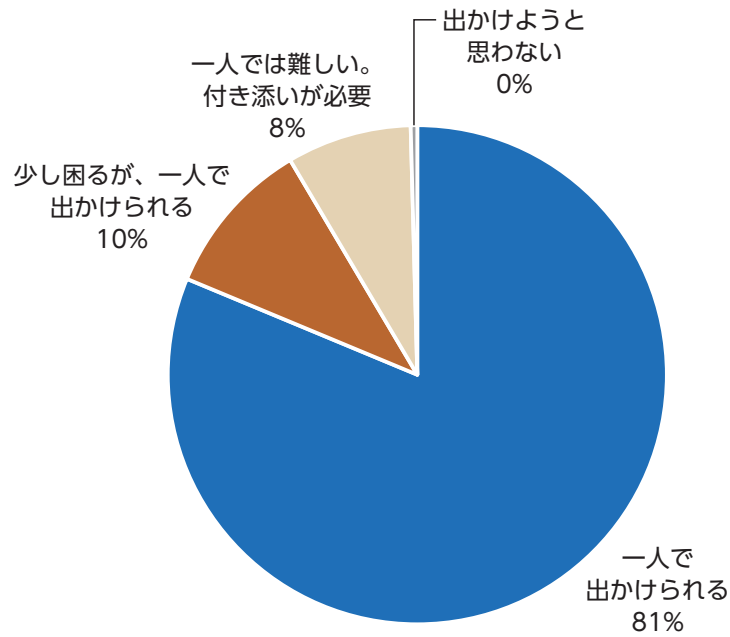
○日中の過ごし方では、「家にいることが多い」が49%（111名）と最も多く、次いで「仕事をしている」が27%（60名）、「団体活動、地域活動、ボランティア活動等」が17%（39名）「障害者支援事業所などに通っている」が14%（31名）です。

【参考】年代別の日中の過ごし方 n=225



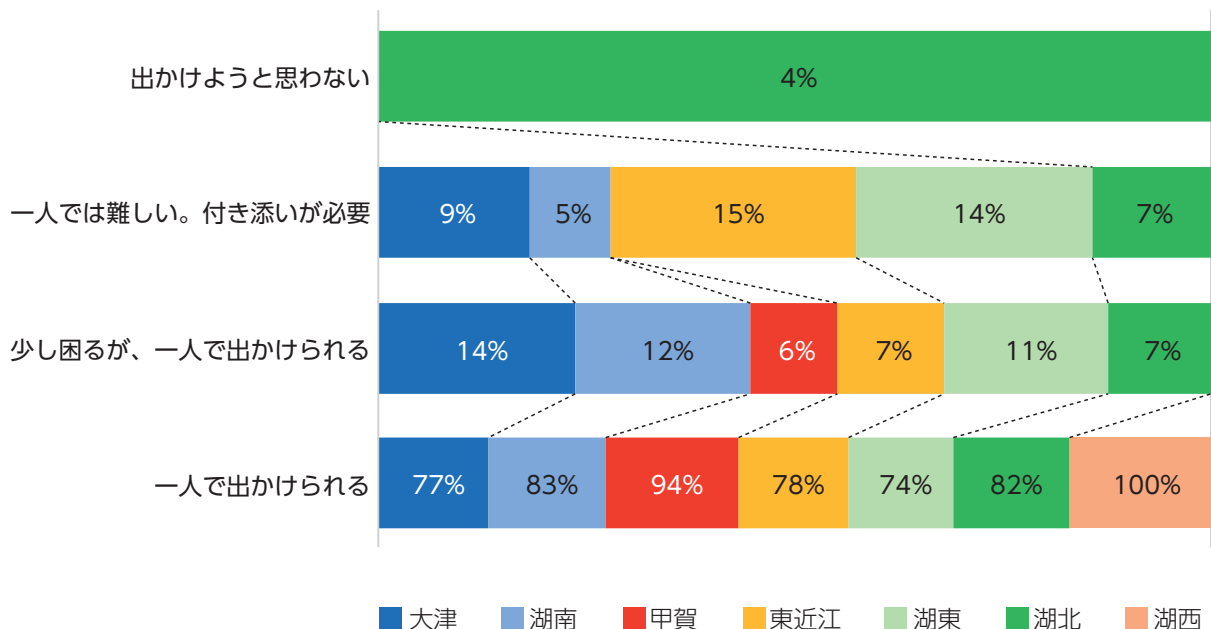
○日中の過ごし方を年齢区分で見ると、団体活動等をしているのは「65歳～ 74歳」で一番多く19%（23名）。一人、「75歳以上」になると活動をする人は減少しています。「55～ 64歳」では仕事をしている人が 45%（32名）と一番多い。これは、聴覚障害者団体の会員数の動向と一致しています。入院中・通院はやはり年齢が上がるとともに増えています。

問17 一人で出かけることができるか n=235



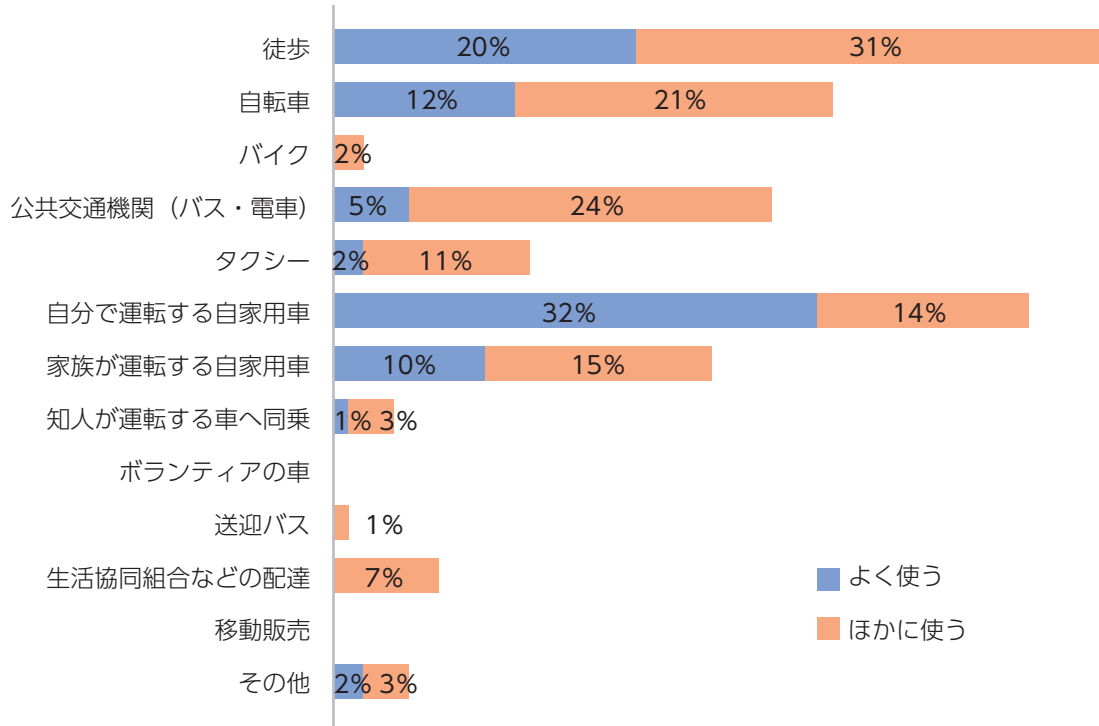
○一人で出かけられるかたずねた結果、「一人で出かけられる」は 81% (191名)、「少し困るが一人で出かけられる」が10% (24名)、「一人では難しい」が 8% (19名) でした。「一人で出かけられる」を除くと、18% (43名) が外出に支障があります。これは全体の 5人に1人の割合です。

【参考】居住地別の外出度 n=235



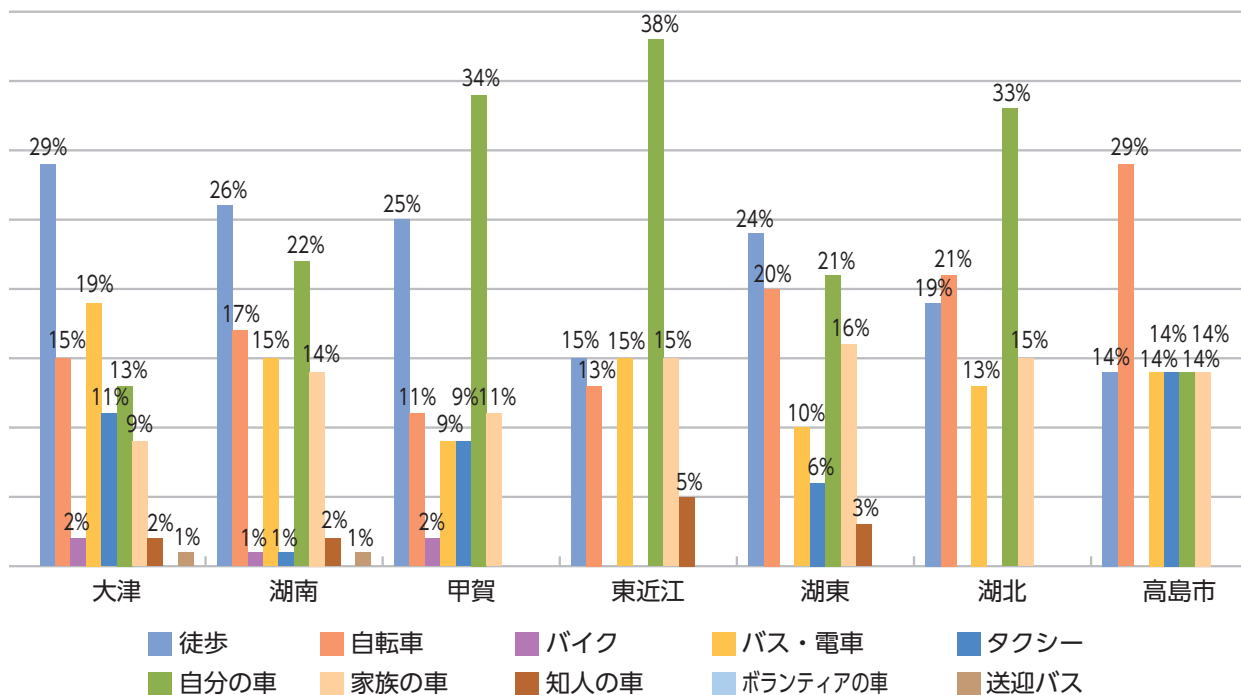
○住んでいる地域によって外出の困難さに違いがあるのか見てみました。「少し困るが出かけられる」と回答した人が10%以上いる地域は大津地域 14% (9名)、湖南地域 12% (5名)、湖東地域11% (4名) でした。また、「一人で外出が困難」と回答した人が 10%以上いる地域は東近江地域 15% (4名)、湖東地域14% (5名) でした。また湖北地域では「出かけようと思わない」と回答した人も 1名います。

問18 日常の買い物に行く方法（複数回答） n=230



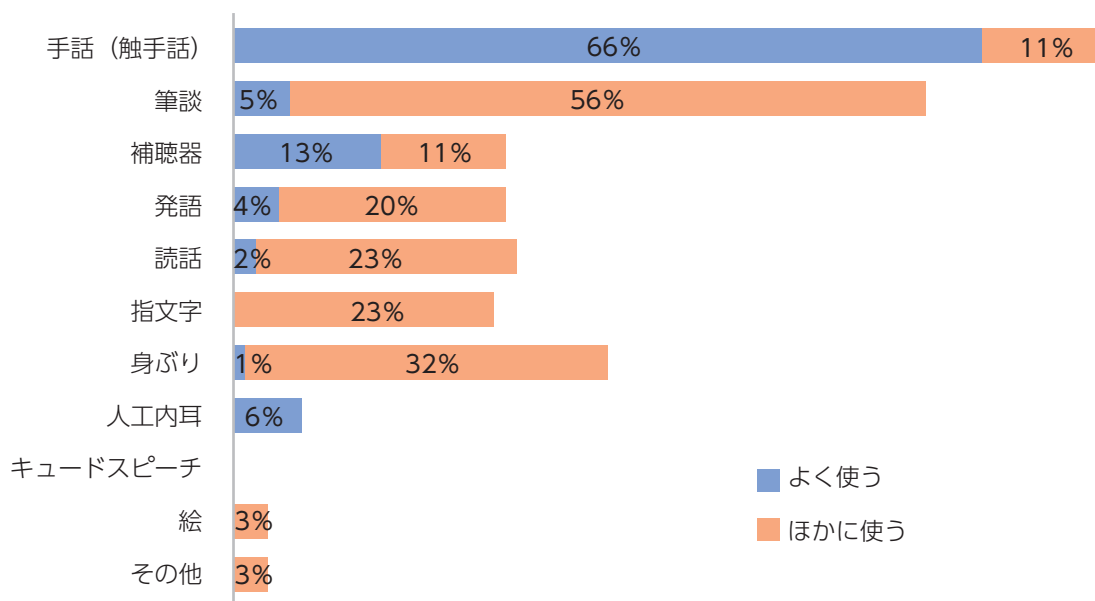
○日常の買い物に行く方法（交通手段）は、多い順に、「徒歩」50%（116名）、「自分の車」47%（107名）、「自転車」33%（76名）、「公共交通機関」30%（68名）でした。また、「家族」や「知人」、「タクシー」など他人に依存する人の割合も一定数いました。「家族が運転する車」25%（58名）、「知人が運転する車」29%（67名）、「タクシー」13%（30名）、「生協などの配達」の利用も7%（15名）あり、今後の買い物のアクセスを考える必要があります。

【参考】地域別の買い物の手段 n=230



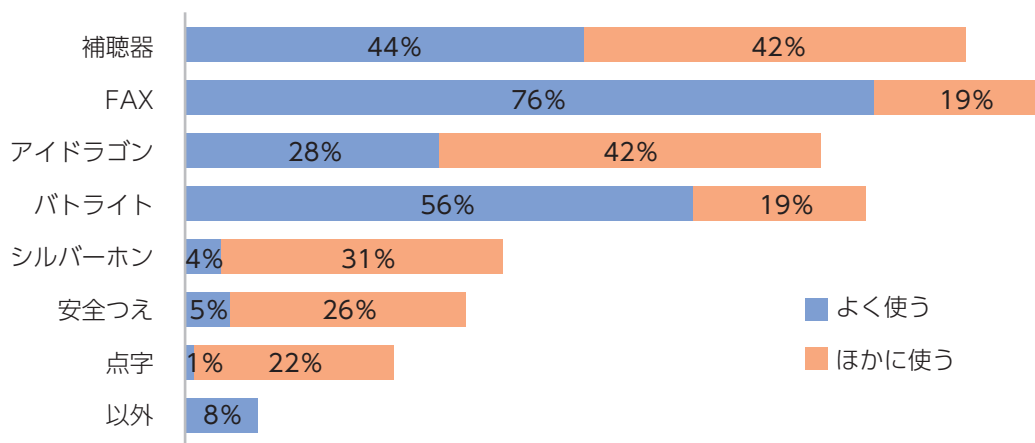
○地域によって交通手段の特徴がわかります。「徒歩」が多いのは、順に大津、湖南、甲賀地域で25%以上となっています。「自分の車」が多いのは、順に東近江、甲賀、湖北地域で、30%以上を占めます。

問19 日常のコミュニケーション手段（複数回答） n=235



○コミュニケーションの手段で「よく使う」のは「手話（触手話）」が66%（154名）と一番多く、次いで、「補聴器」13%（30名）、「人工内耳」6%（13名）でした。「ほかに使う」のは「筆談」、「身振り」が多く、続いて「発語」、「指文字」、「読話」となります。コミュニケーション手段を「よく使う」「ほかに使う」を合わせて見ると、多い順に「手話」77%（179名）、「筆談」61%（143名）、「身振り」33%（78名）となります。

問20 補装具や日常生活用具などの福祉機器や情報機器（複数回答） n=231

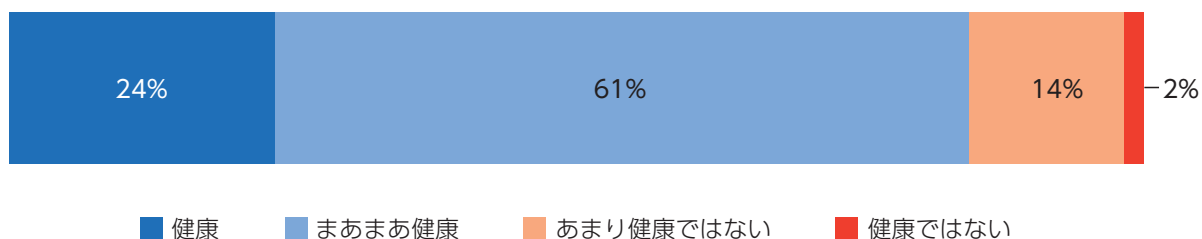


○日常生活用具で一番よく使われているのは「FAX」76%（176名）、次いで「パトライト」56%（130名）でした。「アイドラゴン」は「知っている」42%（96名）ですが、実際に「使っている」と回答したのは28%（65名）にとどまりました。日常の生活情報を取得するためにも、また外出が困難な人にも手話や聴覚障害に関する情報が得られるアイドラゴンをもっと普及したいところです。

【それ以外に使っている福祉機器の記述】

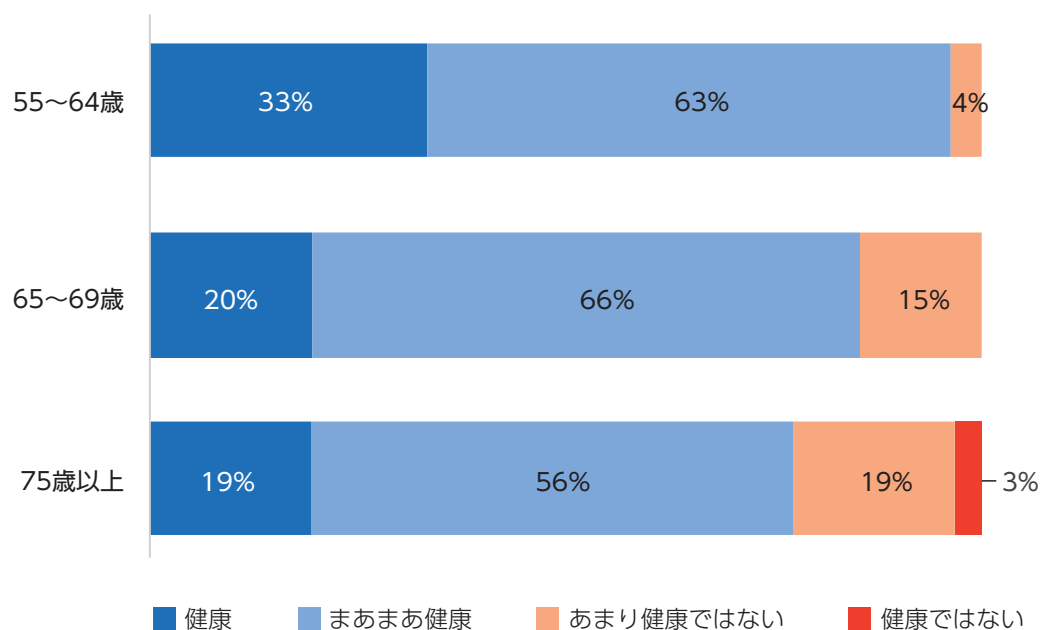
- ・FM受信機 ・シルウォッチ ・スマホ ・テレビの字幕機能 ・音声認識アプリ
- ・拡大読書機を使っているが利用できない ・車椅子を利用している ・携帯電話メール
- ・市役所と福祉事務所に手話通訳をたのんでいる ・室内カメラ ・手すり ・人工内耳
- ・小さな医院の受付から振動器を持ってます（考案してます）
- ・杖の代わりに買い物できる小さい車 ・UDトーク、電子メモ、補聴器を付けて、テレビを見て楽しく聞いています。歌は好きですので、聞きながら、よかった。

問21 健康状態 n=234



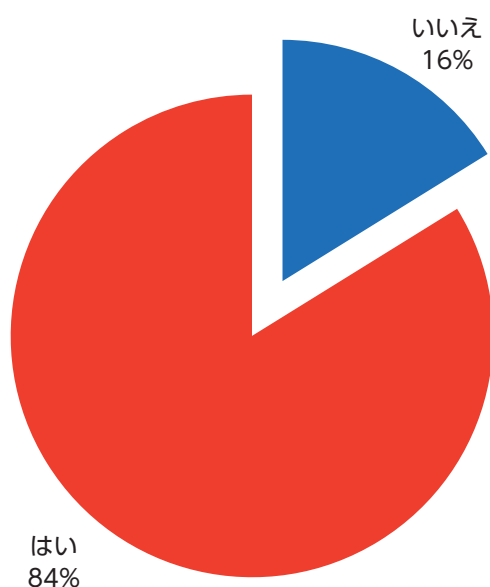
○「健康である」は24%（55名）、「まあまあ健康である」は61%（143名）で、合わせると85%（198名）の人が健康であると回答しています。一方、「健康ではない」2%（4名）、「あまり健康ではない」14%（32名）と合わせると15%（36名）が自分が健康ではないと感じています。

【参考】年代別の健康状態（全体で） n=234



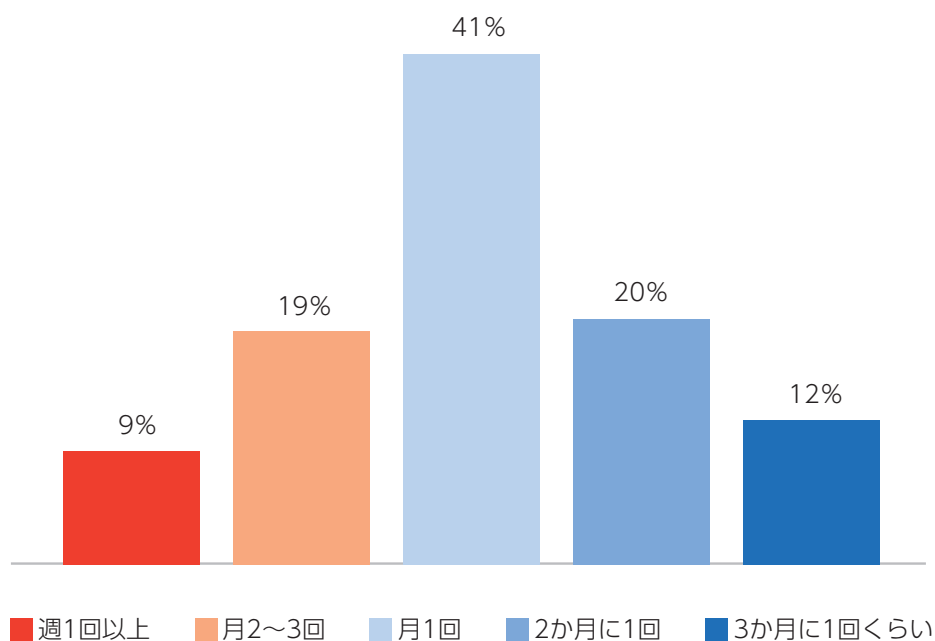
○年代別の健康状態は、「健康である」「まあまあ健康である」と回答する人は、年代が上がるにつれ減っていきいます。逆に「健康ではない」と回答する人は70歳までの人では0%でしたが、75歳以上になると3%（2名）になり、「あまり健康ではない」と合わせると、75歳以上の回答者のうち22%（18名）になります。

問22 通院しているか n=235



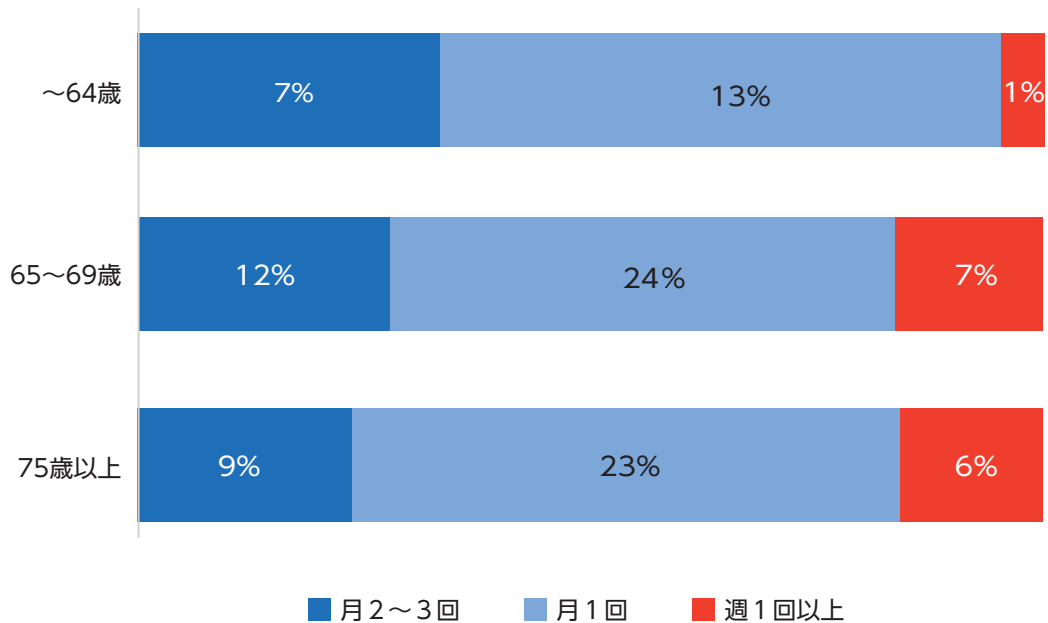
○現在、病院や医院（診療所・クリニック）に通院しているかたずねました。「はい（通院している）」と回答した人は全体の 84%（197名）、「いいえ（通院していない）」と回答した人は16%（38名）でした。

問22-1 通院頻度 n=198



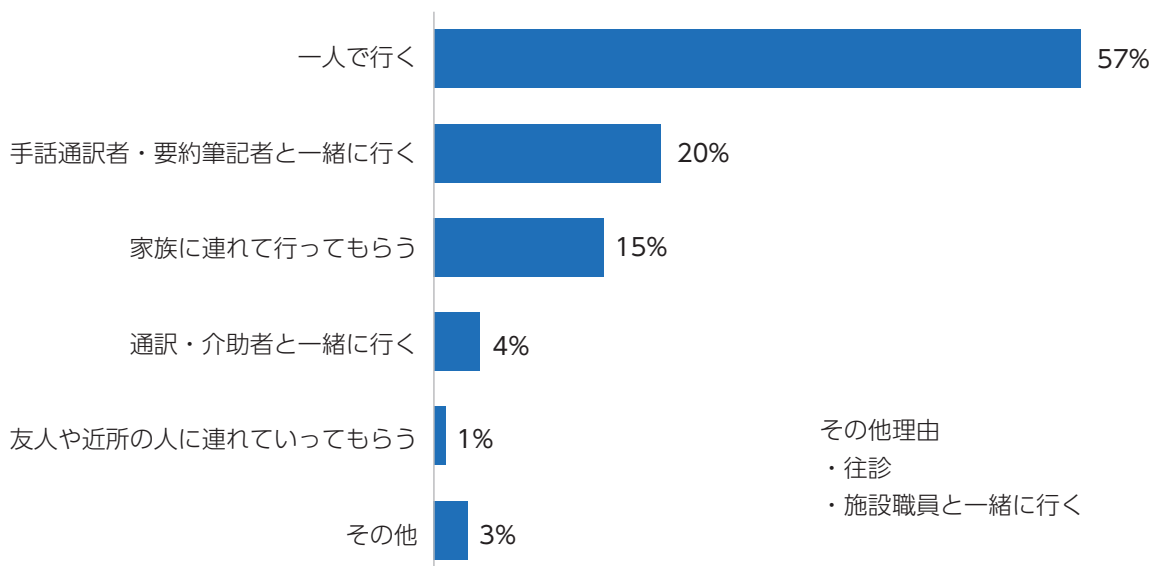
○どのくらいの頻度で通っているのかたずねた結果、「月1回」と回答した人が最も多く、41%（81名）でした。「月2～3回」と回答したのは19%（37名）、「週1回以上」は9%（18名）でした。

【参考】 通院する人の年代別状況 n=136



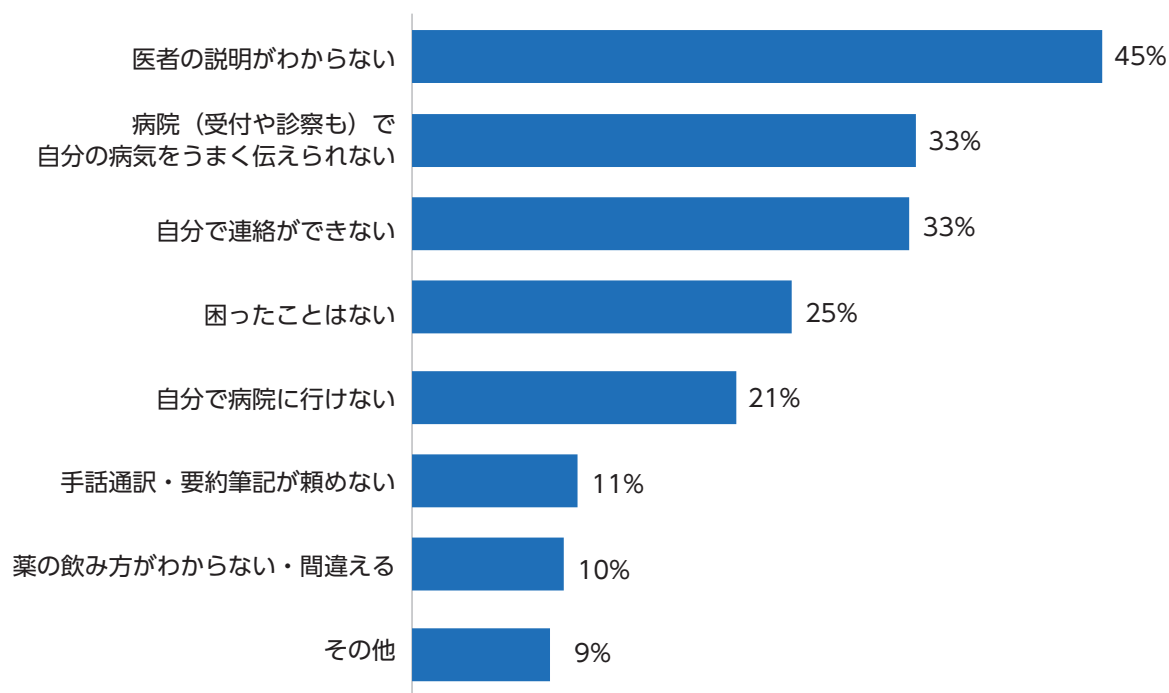
○「週1回以上」通院する人は、年代が上がるに伴って増えていきます。

問22-2 通院方法 n=228



○通院の方法で「手話通訳者・要約筆者と一緒にいく」と回答した人が 20% (45名) いました。滋賀県では、意思疎通支援者に同行を伴う派遣依頼は行っていませんので、病院に行くときは必ず通訳を利用している聴覚障害者にとっては「通訳者・要約筆者と一緒にいく」という認識で回答したのかもしれませんが。そう考えると、「一人で行く」と回答した 57% (131名) と合わせた 77% (176名) が一人で通院していることとなります。一方、「家族か友人などに連れていってもらう」と回答した人は、盲ろう者の通訳・介助以外で16% (37名) でした。

問23 病気の時の困りごと（複数回答） n=220



☆病院の困りごとではやはり・・・

○一番多いのは「医師の説明がわからない」で 45%（100名）にものびりました。つぎに「病院（受付や診察も含む）で自分の病気をうまく伝えられない」33%（73名）、「自分で連絡ができない」33%（72名）と続きます。「薬の飲み方がわからない」も 10%（22名）います。このことから、病院関係者に聴覚障害者への理解が求められるとともに、医療分野での意思疎通支援者の重要性がうかがえます。

また、「自分で病院に行けない」と回答した人は 21%（47名）でした。この人数は、問 22-2「どのように通院していますか」で「誰かに連れていってもらおう（「家族」15%、「友人や近所の人」1%、「盲ろう通訳・介助者」4%）」と回答した人の数とほぼ同数となります。他に自由回答で「土曜日はバスが休みで行けない」と回答した人もおり、公共交通機関の便の悪さが高齢者の外出の頻度に影響している可能性がうかがえます。

その他の記述

- ・ FAX連絡がないと困る
- ・ バスが休みの土曜日は行きたくても行けない
- ・ 緊急窓口などFAX等、問合せ先がわからない
- ・ 看護師さん他の言われることがわからない
- ・ 自分の番になり呼ばれた時、聞こえにくく気づきにくい
- ・ 手話通訳がいてくれるから困らない・受付できこえないので順番がきたらよろしくとお願いしても配慮がないときある
- ・ 受付での呼出など診察中に付き添いの家族に話しても、自分に話してくれないから、内容がわからない
- ・ 必要に応じて手話通訳をお願いしている
- ・ 補聴器でなんとか対応できる
- ・ ノートテイクを書いている
- ・ 意思疎通ができない
- ・ 呼ばれても分からない
- ・ 子どもに頼んでいる
- ・ 聞き取りにくい

2 障害と暮らし ～生活と介助～

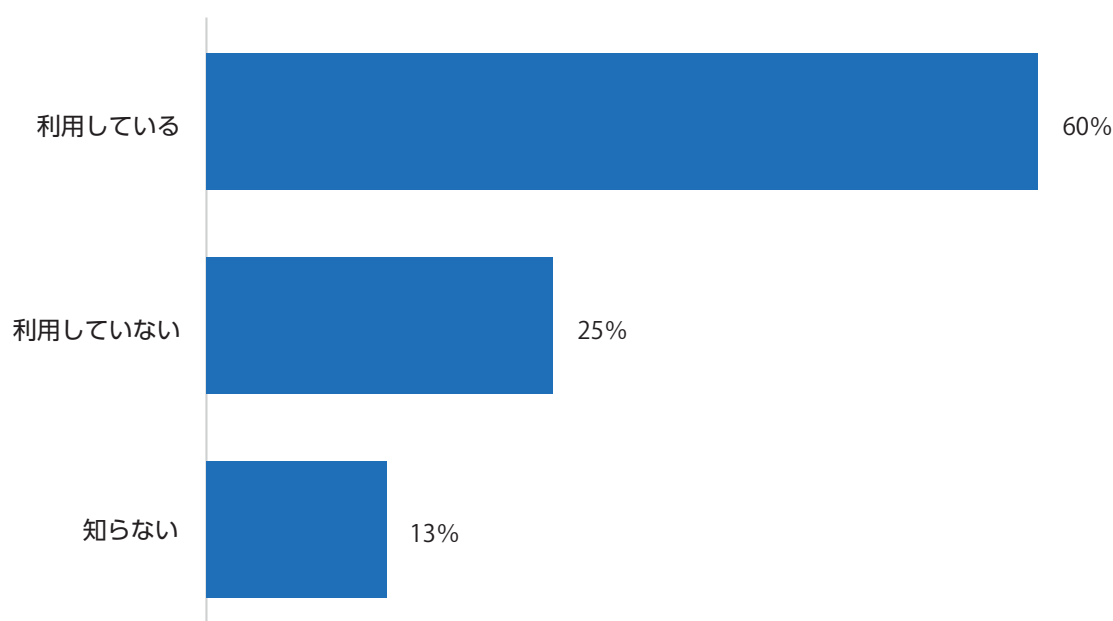
問24 今の生活に誰かの助け（介護や介助）が必要か n=233



○今の生活に誰かの手助け（介護や介助）が必要かをたずねた結果、「必要ない」と回答した人は83%（193名）、「必要」と回答した人は17%（40名）でした。

介護サービスに限らず、もろもろの手続きを聞こえる家族が担うことが多い背景から、ご自身が介護サービスを受けているとは知らずに利用している例もあると考えられます。また、介護サービスの利用が相当と思われる場合でも、制度を知らないために利用していない人も含まれることを考えると「必要」な人の数は増えると思われれます。

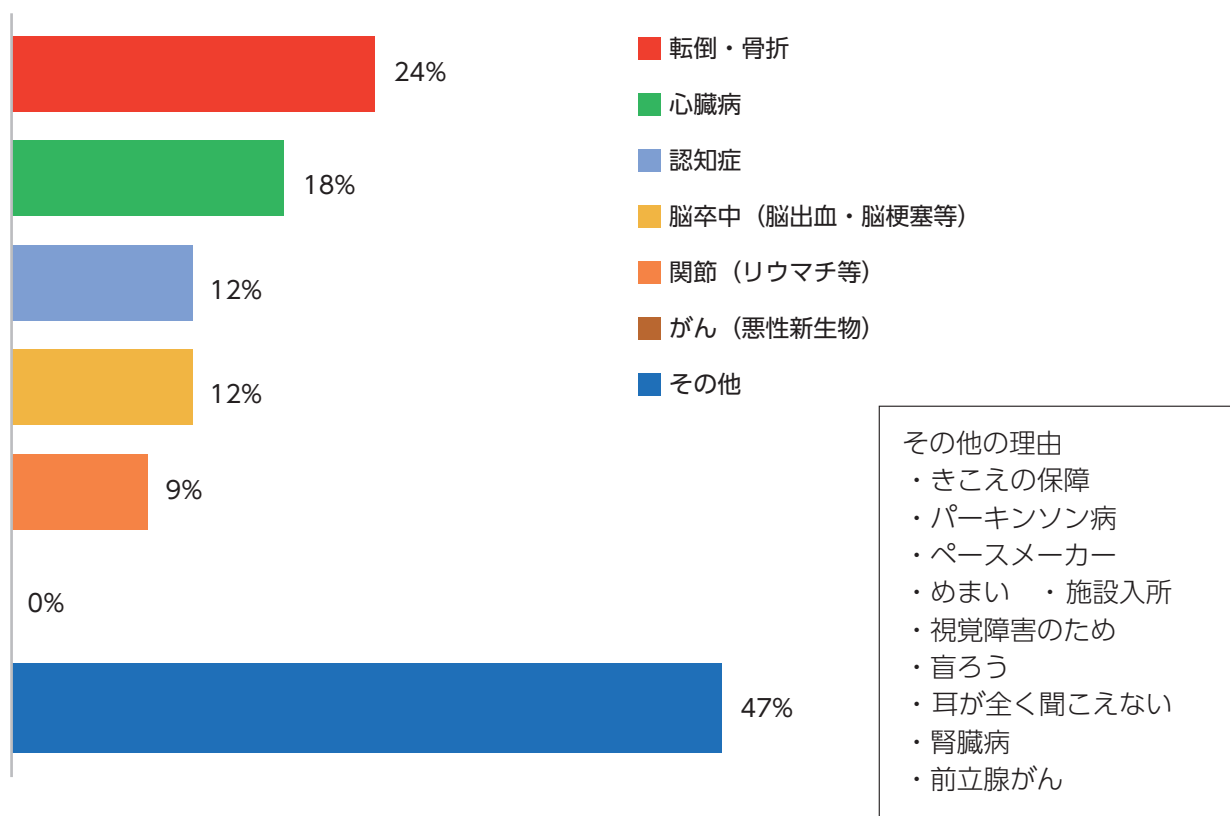
【参考】 介護・介助が必要と回答した人の介護サービスの利用の状況は n=40



○「介護・介助が必要」と回答した人は17%（40名）。そのうち、「利用している」は24名（60%）でした。

問25 だれかの助け（介護・介助）が必要な理由（複数回答） n=34

脳卒中 (脳出血・ 脳梗塞等)	心臓病	がん(悪性 新生物)	関節(リウ マチ等)	認知症	転倒・骨折	その他
12%	18%	0%	9%	12%	24%	47%

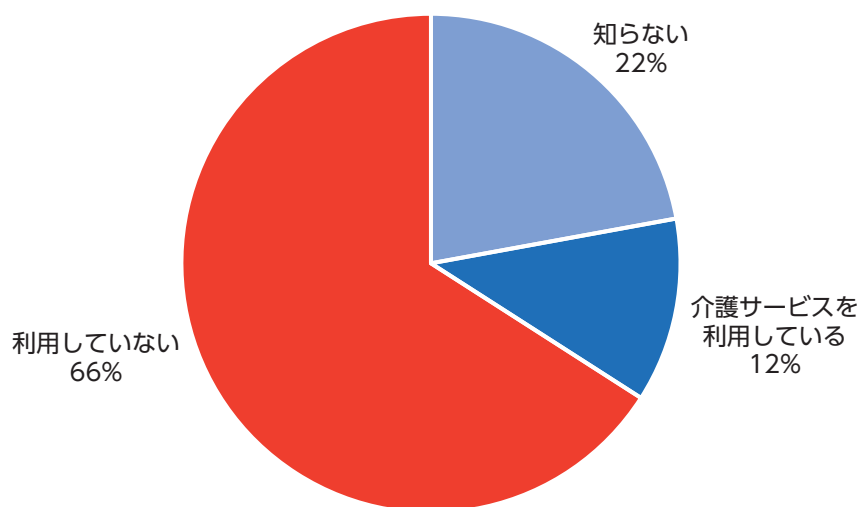


○問24で「だれかの助けが必要」と回答した 17%（40名）のほぼすべての人は、何らかの病気を理由にあげています。高齢による体力低下をあげた人は自由回答にも見当たりませんでした。

3 障害と暮らし ～介護サービス～

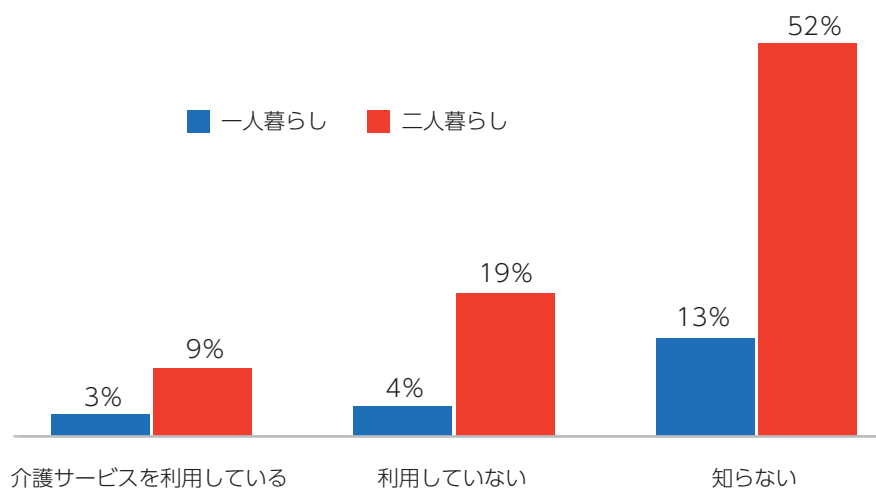
問26 介護保険や介護サービスを知っているか n=226

利用している	12%
利用していない	66%
知らない	22%
総計	100%



○介護サービスを「利用している」のは全体の12% (27名) でした。「利用していない」66% (149名) と「知らない」22% (50名) を合わせると、全体の88% (199名) にのびります。

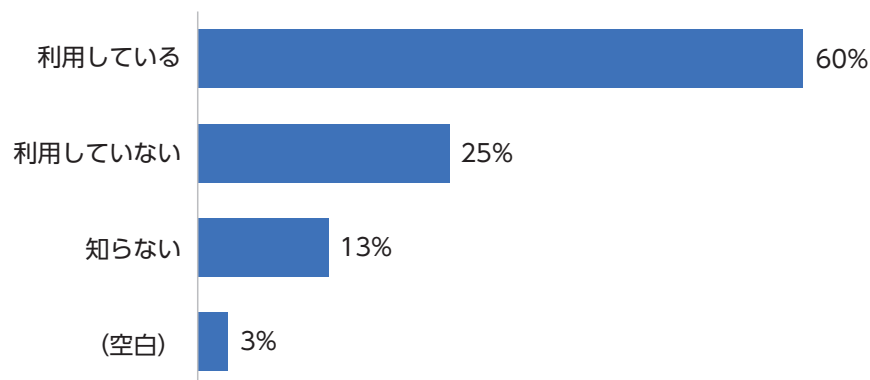
【参考】一人暮らしまたは二人暮らしの人の介護サービス利用状況 n=167



○「一人暮らし」または「二人暮らし」の人で介護サービスについて回答があった167名のうち「介護サービスを利用していない」のは「一人暮らし」で4% (6名)、「二人暮らし」で19% (32名) でした。また、介護サービスを「知らない」と回答したのは、「一人暮らし」で13% (22名)、「二人暮らし」で、52% (87名) でした。

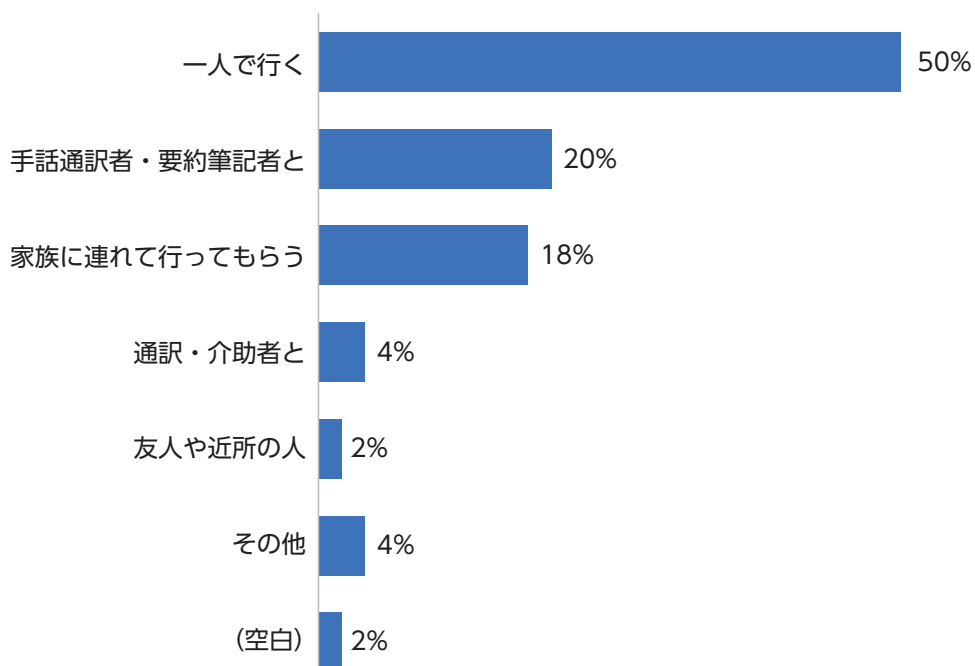
このことから、「一人暮らし」の人がより将来に不安を感じやすく、「二人暮らし」の人よりも介護サービスについて関心があると考えられます。

【参考】「介護・介助が必要」と回答した人の介護サービスの利用は？ n=40



○問24で「今の生活に誰かの助けが必要」と回答した人 17% (40名) のうち、の介護サービスを「利用している」人は60% (24名) でした。

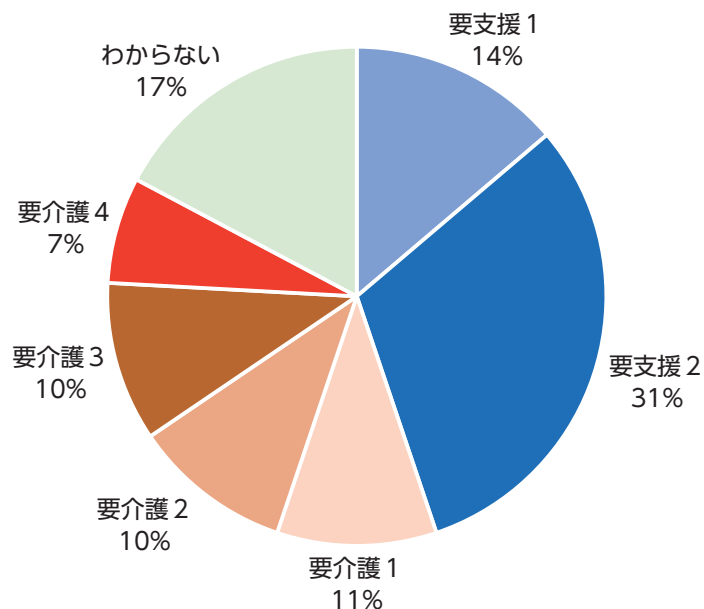
【参考】介護サービスを「知らない」と回答した人の通院状況 n=50



○問26で介護サービスを「知らない」と回答した 22% (50名) の人のうち、通院の方法において、50% (25名) が「一人で行く」と回答していますが、「家族」や「友人」に「連れていってもらおう」と回答した人も20% (10名) おられ、聴覚障害者の人たちの外出支援が必要だと考えられます。

問27 要介護度 n=29

要支援1	要支援2	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	わからない	総計
14%	31%	10%	10%	10%	7%	17%	100%



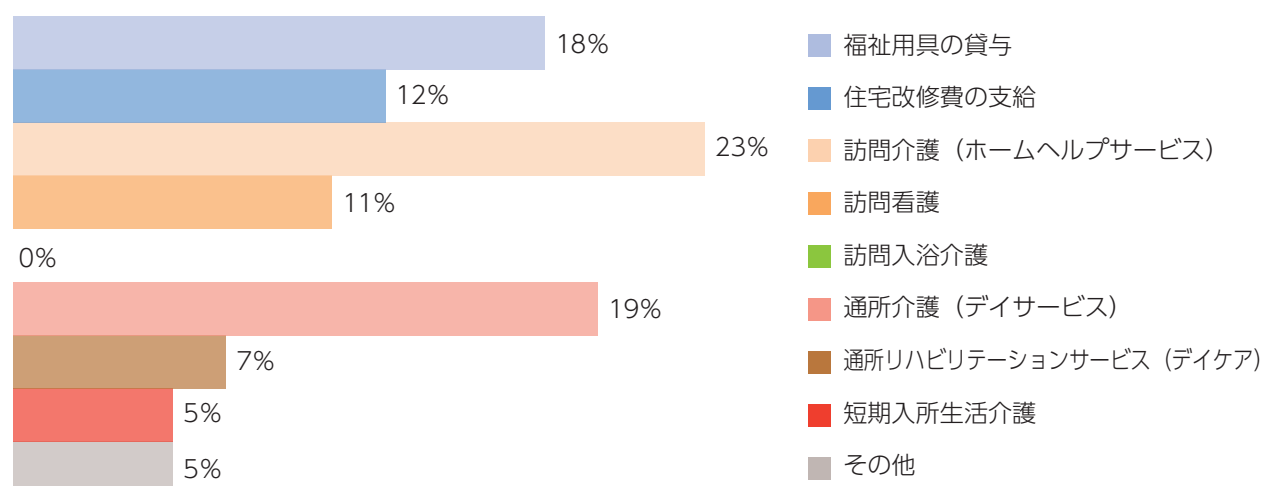
○介護保険の要介護度は、「要支援1」と「要支援2」を合わせると45%（13名）でした。「要介護3」と「要介護4」を合わせると17%（5名）でした。

高齢聴覚障害者は意思決定・意思疎通の疎外、家族や社会からの孤立という問題をかかえているにもかかわらず、これらの問題が介護認定において十分反映されていないことが推察されます。

また、「わからない」と回答した聴覚障害者の割合が高く、介護認定について十分な説明を受けていないことが推察されます。

問27-1 利用している介護サービス（複数回答） n=57

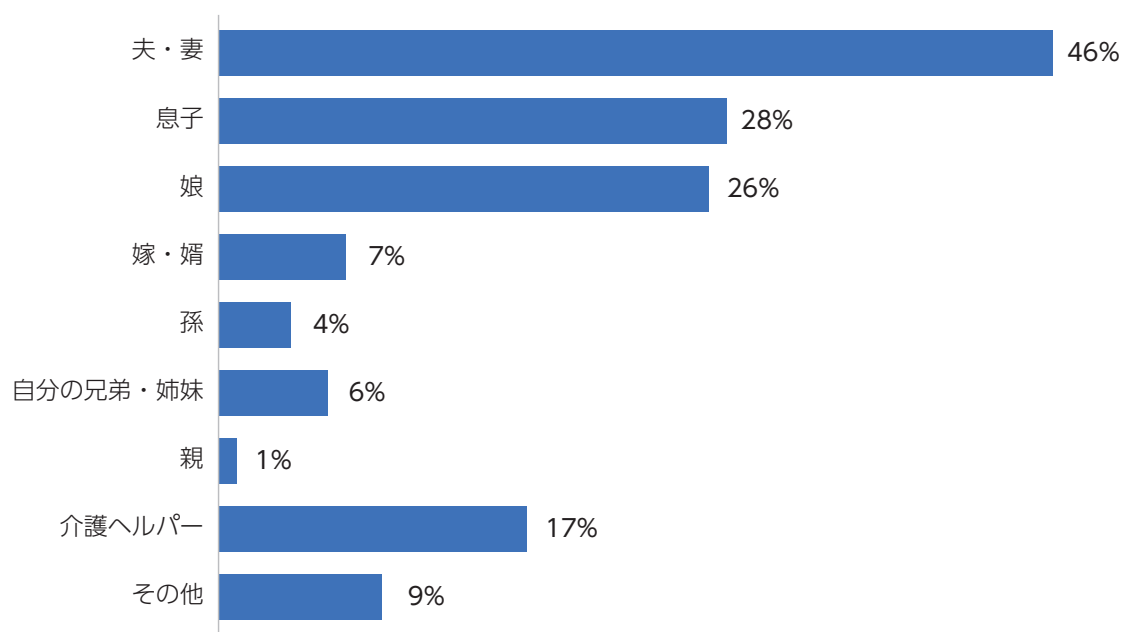
自宅の暮らしを支えるサービス	福祉用具の貸与	18%
	住宅改修費の支給	12%
自宅に来てもらい受けるサービス	訪問介護（ホームヘルプサービス）	23%
	訪問看護	11%
	訪問入浴介護	0%
施設を利用するサービス	通所介護（デイサービス）	19%
	通所リハビリテーションサービス（デイケア）	7%
	短期入所生活介護	5%
	その他	5%
	総計	100%



○利用している介護サービスで一番多いのは「訪問介護（ホームヘルプサービス）」の23%（13名）でした。施設系サービスの「通所介護（デイサービス）」と通所リハビリステーション（デイケア）」と「短期入所生活介護」を合わせると施設利用は32%（18名）でした。

問28 介護・介助をしてきている人（複数回答） n=137

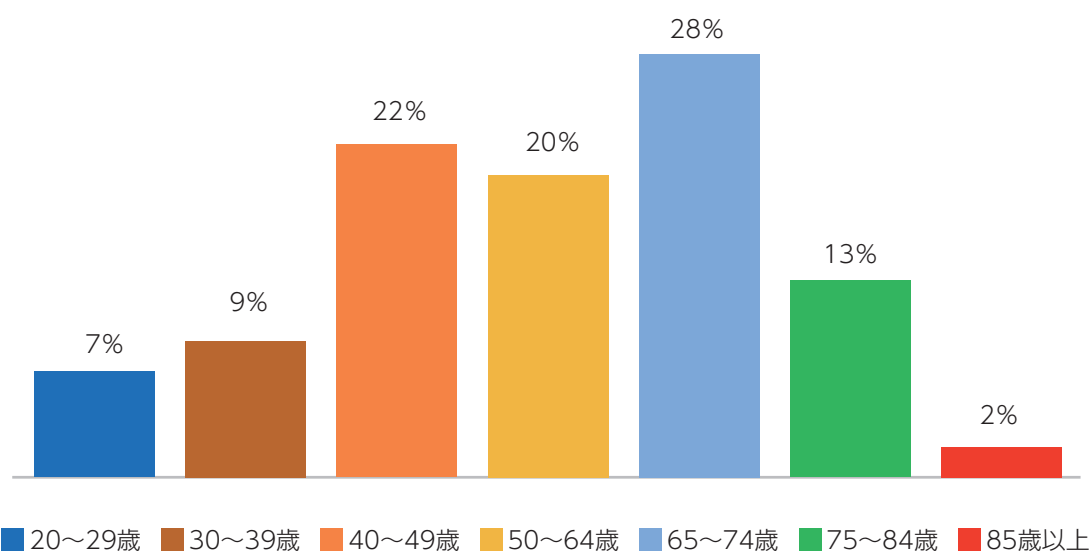
ア. どんな人



○介護・介助してきている人は「夫・妻」が一番多く46%（63名）でした。次いで「息子」、「娘」と続き、「介護ヘルパー」と回答した人は17%（23名）でした。

イ. その人の年齢 n=132

20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～64歳	65～74歳	75～84歳	85歳以上	総計
7%	9%	22%	20%	28%	13%	2%	100%



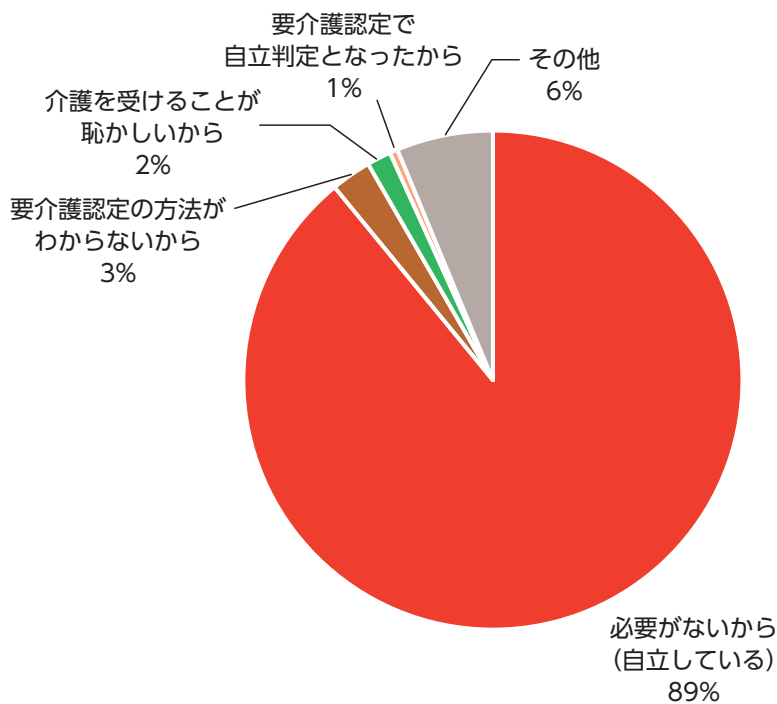
○介護・介助する人は「65～74歳」が一番多く、全体的に見ても40～74歳の年代で70%（92名）です。

問29 介護・介助を必要ないとする理由は n=192

介護を受ける必要がないから（自立している）	89%
要介護認定を申請したが、自立判定となったから	1%
要介護認定の方法がわからないから	3%
介護を受けることが恥ずかしいから	2%
その他	6%
総計	100%

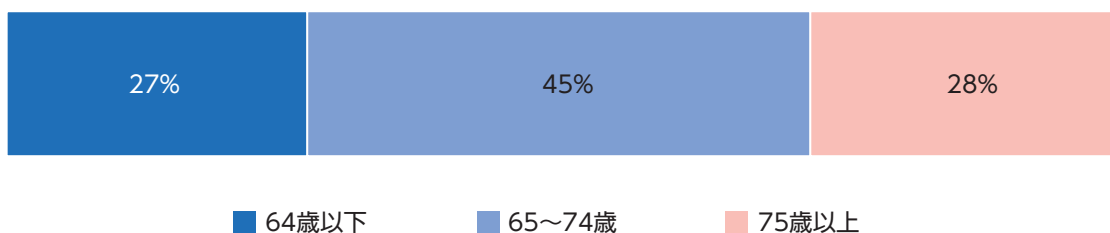
その他の理由

- ・ことばと字がかからないので介助が必要
- ・介護を受ける年齢に達していない
- ・考え中
- ・今、まだわからない
- ・支援施設に入所していたため
- ・判断で決めるので
- ・娘がいる間は



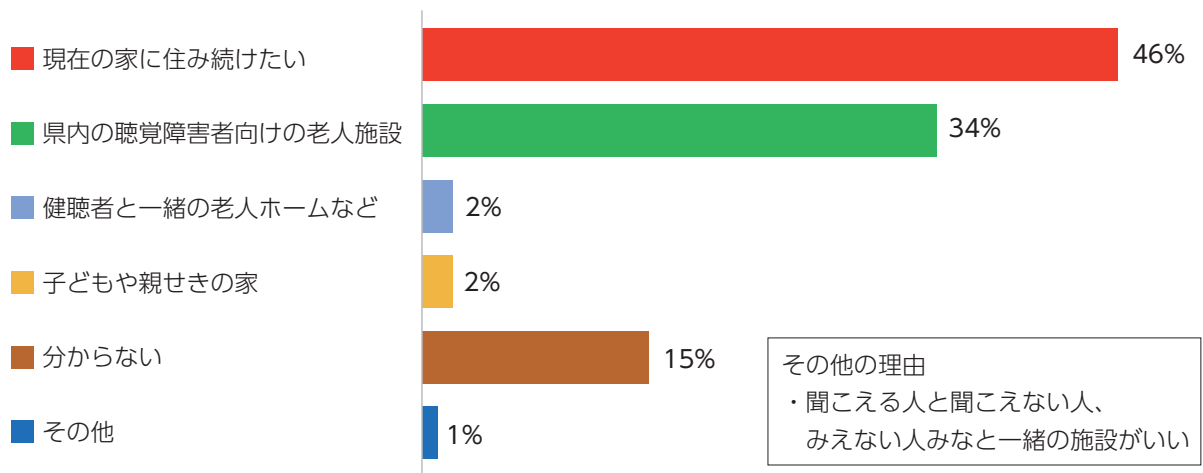
○「介護・介助が必要ない」理由は、「自立しているから」が一番多く、89%（171名）でした。一方で、「介護認定の方法が分からない」と回答した人が3%（5名）、「介護を受けることが恥ずかしい」と回答した人が2%（3名）おり、介護サービスに関する理解が広まれば利用につながると考えられます。

【参考】介護を受ける必要がない（自立している）と回答した人の年代別状況 n=170



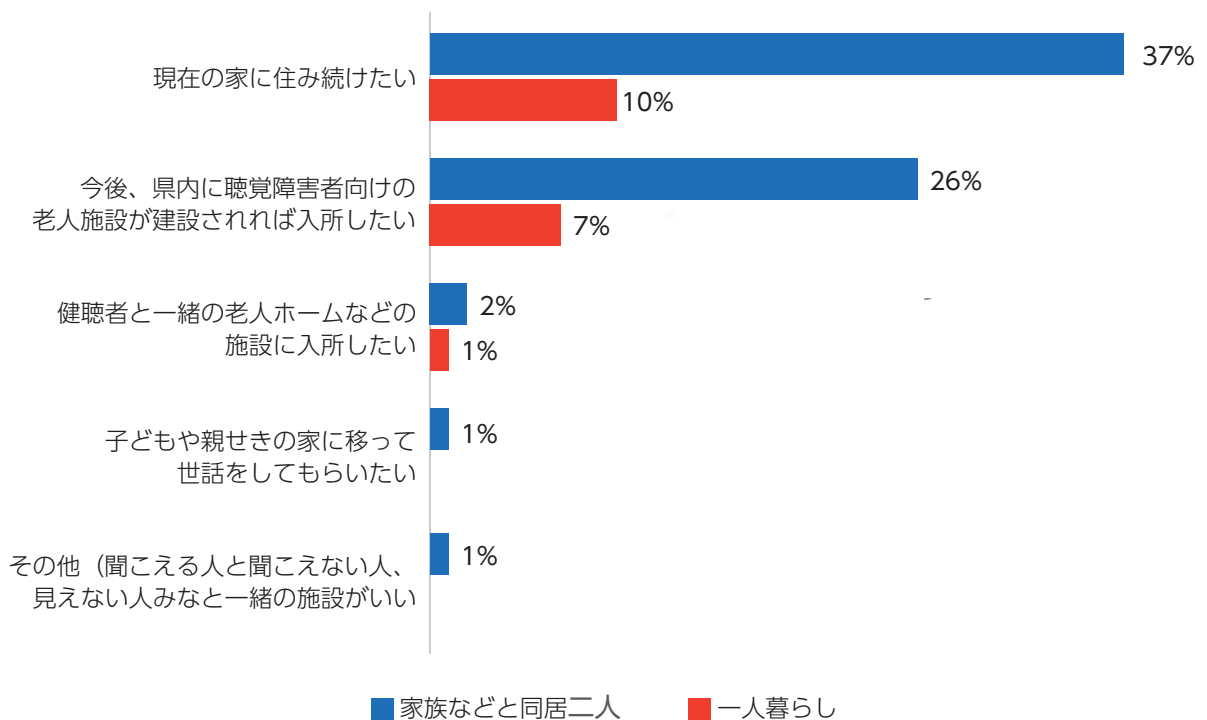
○65歳以上の73%（124名）が「自立している」と回答しています。

問30 将来、介助や介護が必要になったときに生活したい場所 n=227



○将来、介護や介助が必要になった時に生活したい場所は、「現在の家に住み続けたい」が46%（105名）、「県内に聴覚障害者専用の施設ができれば入りたい」が34%（78名）、「健聴者と一緒の老人ホーム」が2%（5名）と、老人施設での生活を希望する人が36%（83名）でした。

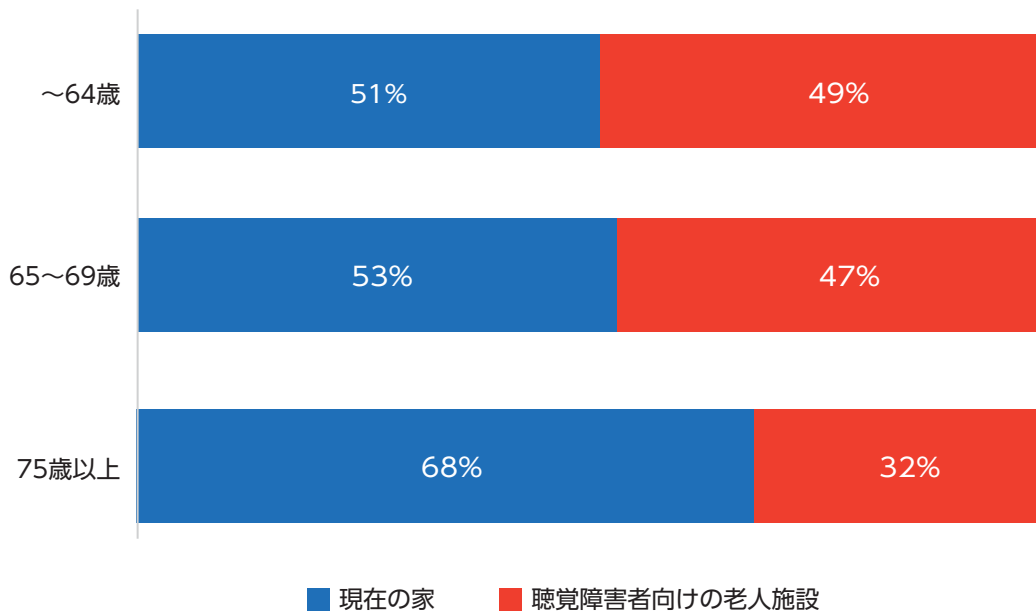
【参考】一人または二人暮らしの人の希望は n=167



○将来、介護・介助が必要になった時に生活したい場所で、現在一人暮らしの人、または夫婦や親子で二人暮らしの人たちの回答を見ました。「現在の家に住み続けたい」が「一人暮らし」で10%（17名）、「二人暮らし」で37%（62名）でした。「県内の聴覚障害者向けの老人施設」が、「一人暮らし」で7%（12名）、「二人暮らし」で26%（55名）でした。

【参考】現在の家に住み続けたい人と聴覚障害者向けの老人施設に入りたい人の年代別状況

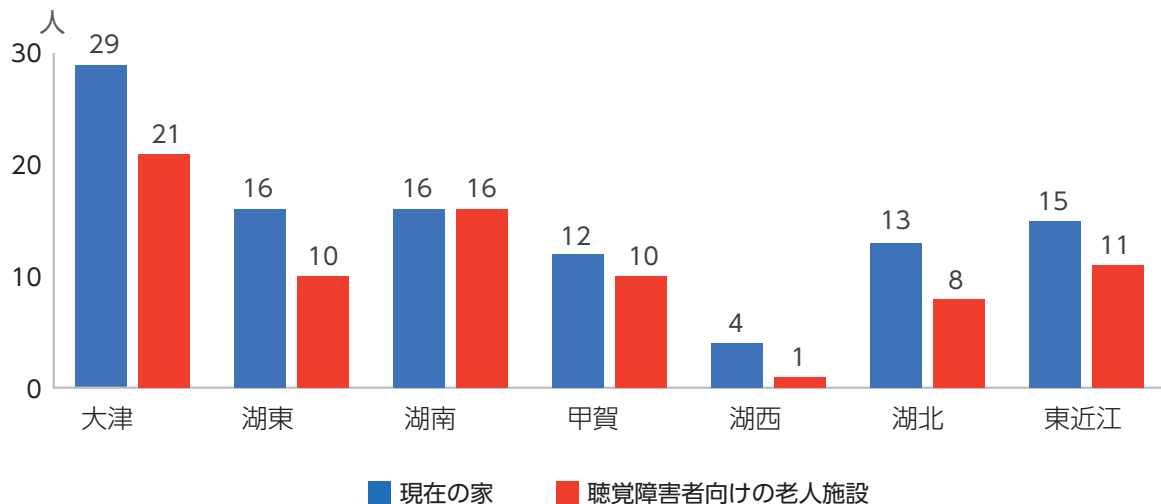
n=182



○将来、介護・介助が必要になった時に住みたい場所を年代別にみると、「県内の聴覚障害者向けの老人施設」を希望する人は年代が上がると減少し、「現在の家」を希望する人は逆に年代が上がると増えました。聴覚障害者向けの老人施設は滋賀県にはまだありません。建設されるまでは時間がかかると考えて、若い人は施設が完成する希望を持てているが、高齢になるほどあきらめていくのではないのでしょうか。

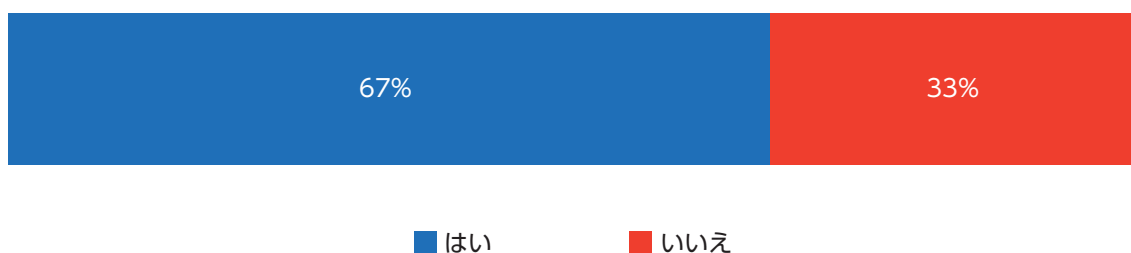
【参考】現在の家に住み続けたい人と聴覚障害者向けの老人施設に入りたい人の地域別状況

n=182



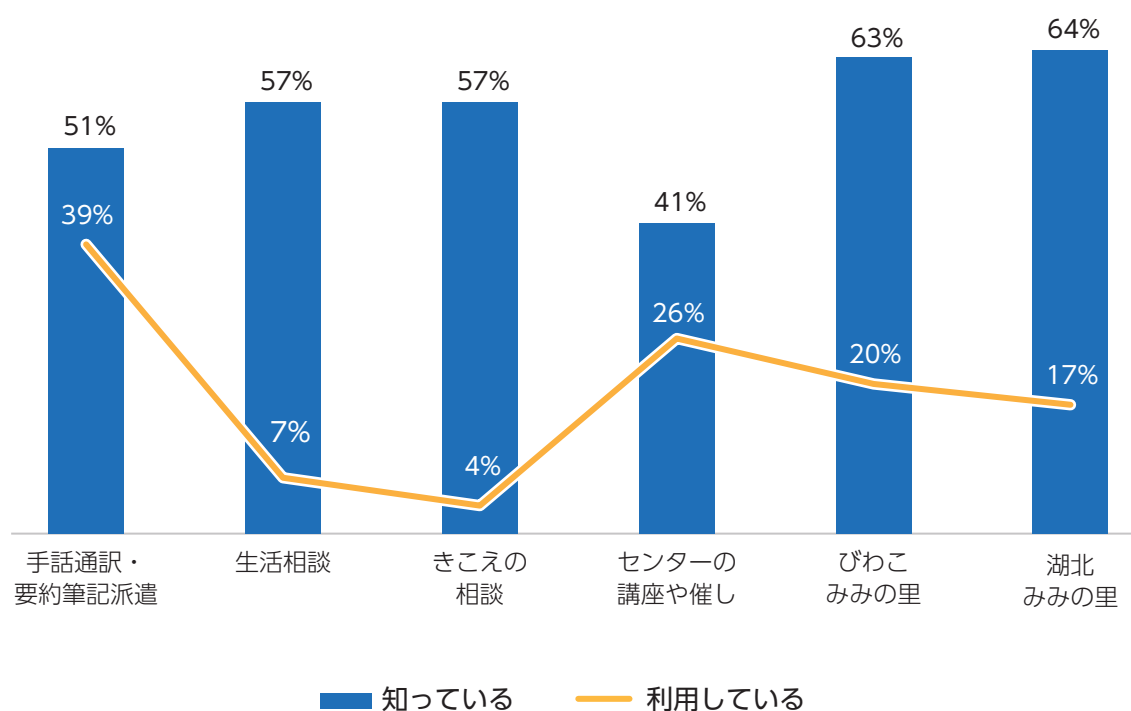
○地域別にみると、湖南地域では「現在の家」と「聴覚障害者向けの老人施設」の希望者が同数でした。どの地域の人でも、「現在の家」を希望する人の人が「聴覚障害者向けの老人施設」を希望する人よりも若干多いですが、地域別の差は小さく、同程度の割合で老人施設での暮らしも希望しています。

問31 県外の聴覚障害者向け老人ホームを知っている n=220



○県外の聴覚障害者向け老人ホームを67%（148名）が「知っている」と回答しました。

問32 滋賀県聴覚障害者福祉協会の事業（複数回答） n=214

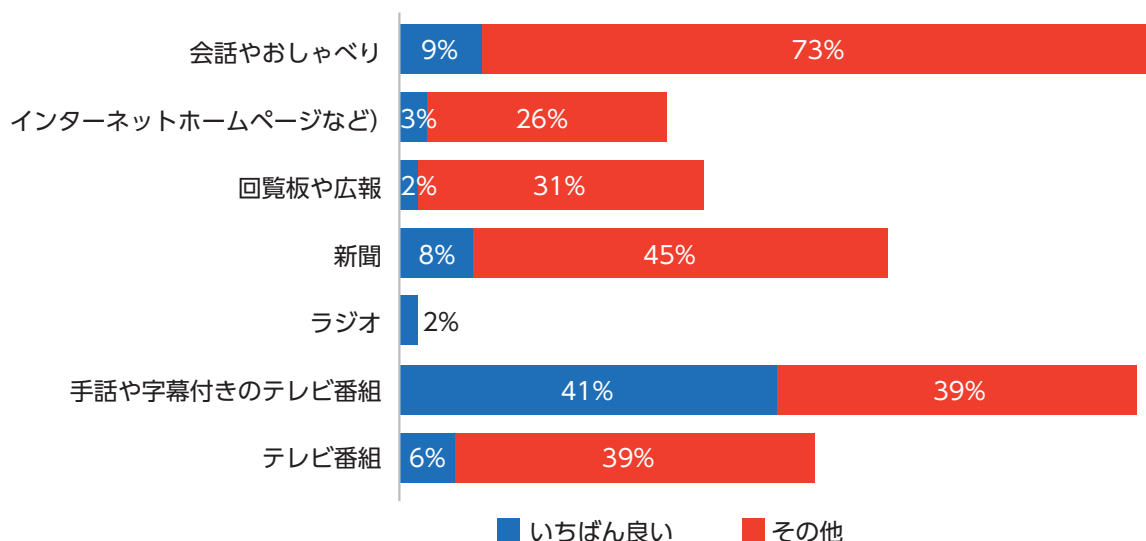


○滋賀県聴覚障害者福祉協会の事業はどれも「知っている」との回答が「センターの講座や催し」を除いて50%以上でした。しかし、「生活相談の利用」は7%（16名）にとどまります。生活相談の意味が分からない人もいると考えられますが、アウトリーチによる相談をすればもっと増えると思われます。

「きこえの相談の利用」も4%（8名）にとどまっており、聞こえに不自由を感じている人が気軽に相談できるよう周知方法や実施方法の改善が必要です。

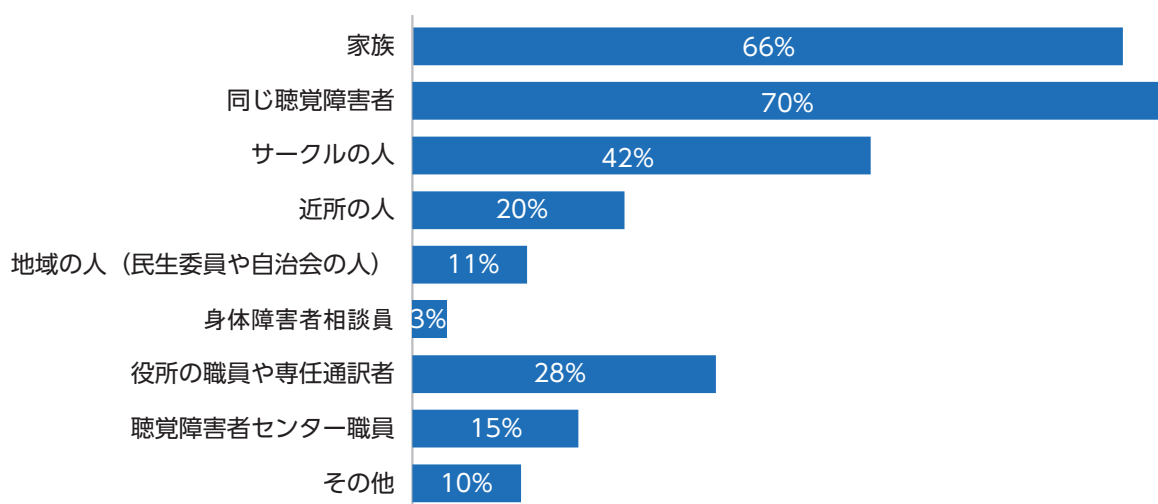
4 情報と社会参加

問33 情報を知る方法（複数回答） n=231



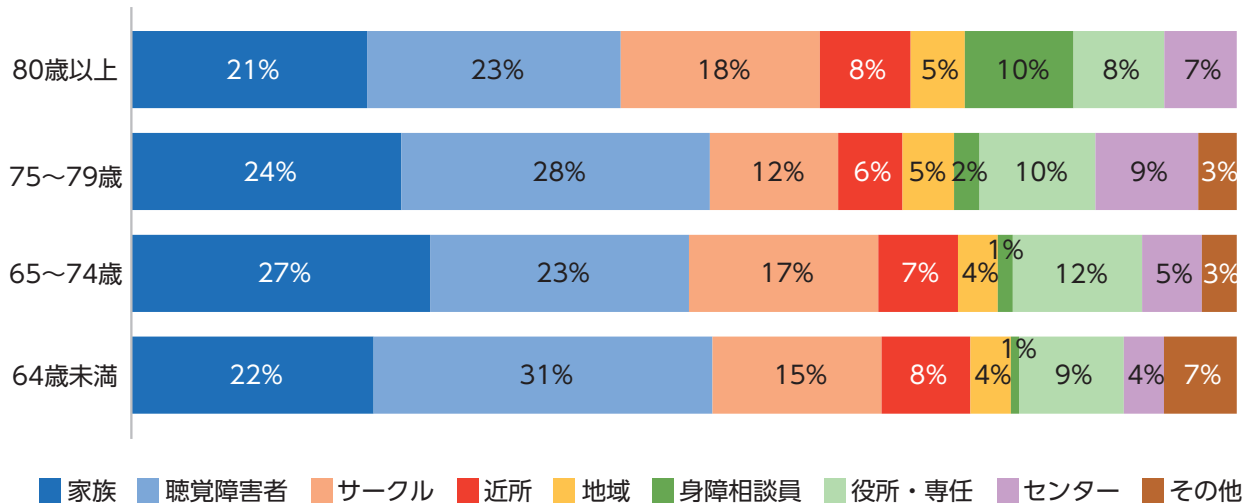
○情報を知る方法で一番良い入手方法についてたずねたところ、231人の回答者のうち41%（94名）が「手話や字幕付きのテレビ番組」、9%（21名）が「会話やおしゃべり」、8%（18名）が「新聞」で、「手話や字幕付きのテレビ番組」の割合が高い結果となりました。総務省の公表によると2019年度の字幕放送はNHK総合で86.5%、NHK教育で79.4%となっており、字幕付番組の増加が影響していると考えられます。

問33-1 会話やおしゃべりの相手（複数回答） n=189

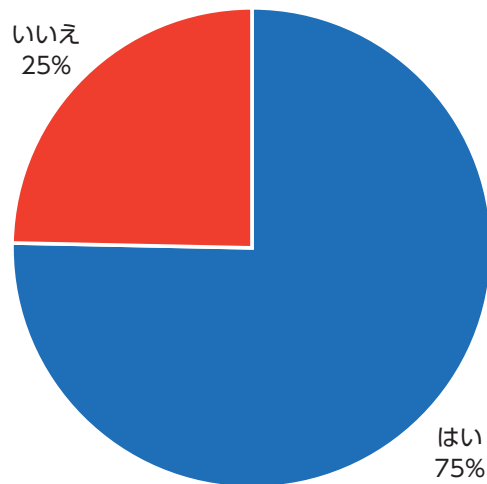


○日常生活での会話やおしゃべりの相手は、189人の回答者のうち70%（132名）が「同じ聴覚障害者」、66%（124名）が「家族」、42%（80名）が「サークルの人」でした。「同じ聴覚障害者」がおしゃべりの相手と回答した人が多い年齢層は「65～74歳」で39%（52名）、「64歳未満」で32%（42名）でした。逆に、少ないのは「75～79歳」で18%（24名）、「80歳以上」で11%（14名）。高齢になるにつれて、同じ聴覚障害者とのおしゃべりの機会が減少すると考えられ、同じ障害のある人どうしの交流やサークルを促進していく必要があります。

【参考】年齢層

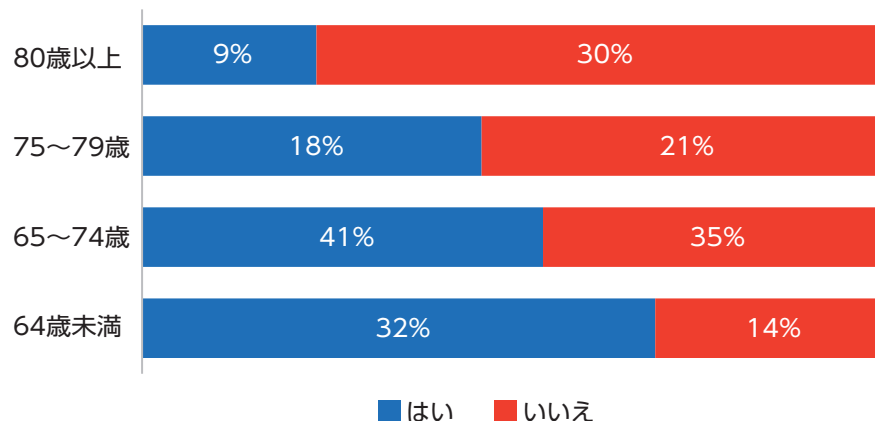


問34 スマホやパソコンを使う n=231

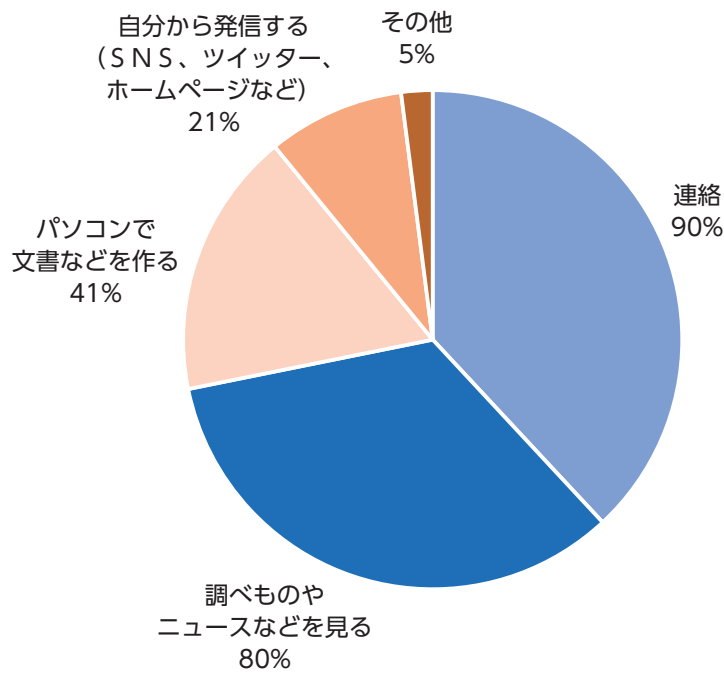


○スマホやパソコンの使用についてたずねたところ、75%（174名）が「使用している」、25%（57名）が「使用していない」と回答しました。年齢層で見ると、問3の75歳以上の回答者76名のうち62%（47名）が「使用している」でした。総務省調査によると、2017年のスマートフォンの個人所有率は60代で44.6%、70代で18.8%であることから、調査対象者のスマホやパソコンの使用率は高いといえます。

【参考】年齢層

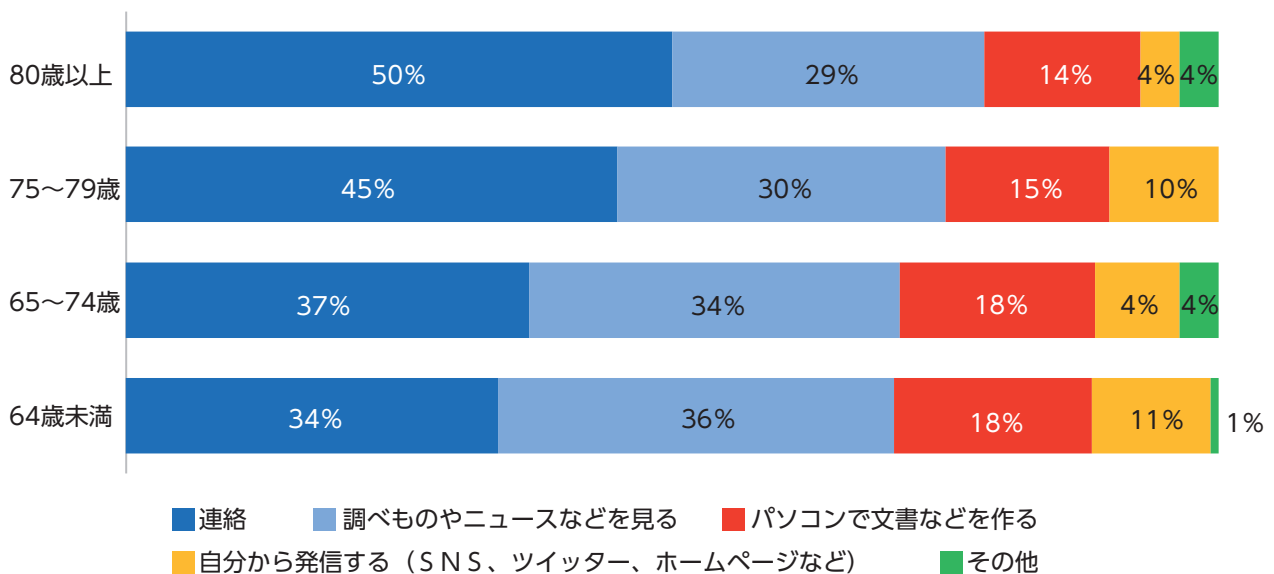


問34-1 スマホやパソコンの使いかた（複数回答） n=186

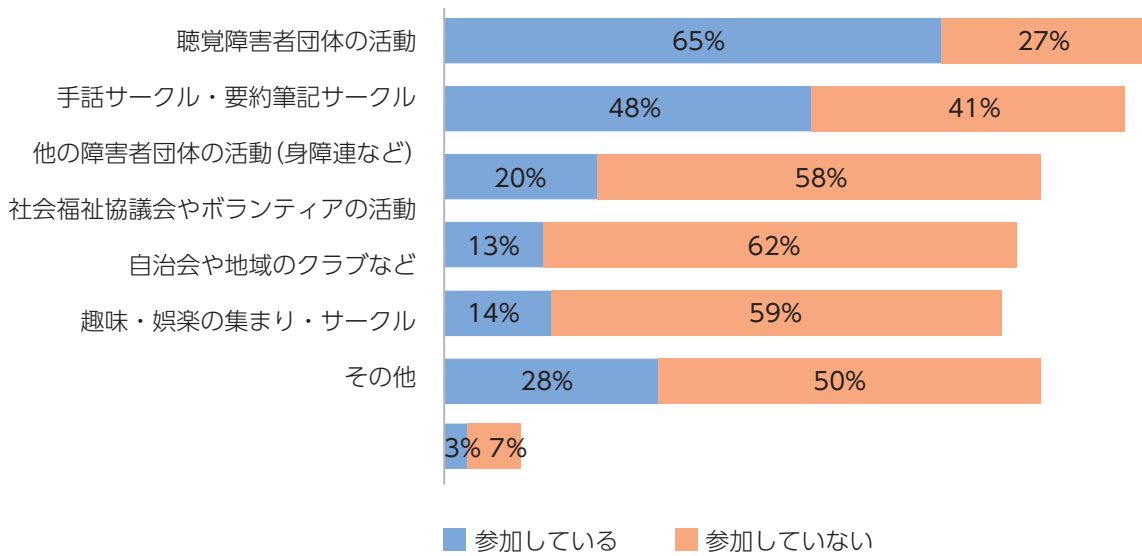


○スマホやパソコンの使用目的をたずねたところ、「連絡」が90% (150名)、「調べものやニュースを見る」が80% (133名) と高い割合で、「パソコンで文書などを作る」が41% (68名)、「自分から発信する」が21% (35名) でした。連絡や調べものなどに日常的にスマホやパソコンを活用している様子が見え、緊急連絡や介護情報の提供手段としてもスマホやパソコンの利用が考えられます。

【参考】年齢層



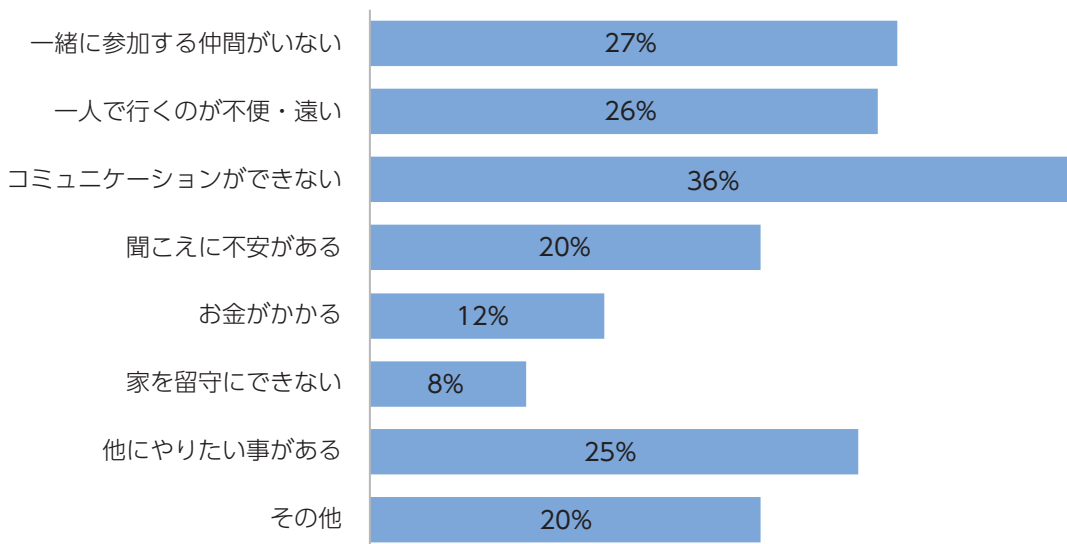
問35 活動について（複数回答） n=229



○活動についてたずねたところ、「聴覚障害者団体の活動」に参加しているが65%（149名）、「手話サークル・要約筆記サークル」に参加しているが48%（109名）と、参加している割合が高い結果となりました。

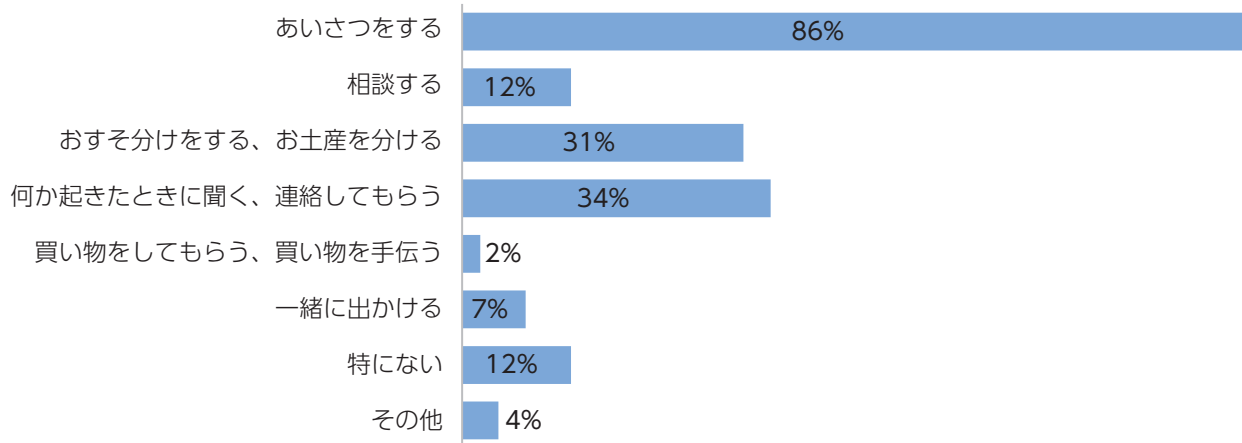
逆に「趣味・娯楽の集まり・サークル」「他の障害者団体の活動」「自治会や地域のクラブなど」「社会福祉協議会やボランティアの活動」は参加していない割合が高い結果となりました。

問36 活動に参加していない理由（複数回答） n=173



○活動に参加していない理由をたずねたところ、「コミュニケーションができない」が36%（63名）、「一緒に参加する仲間がいない」が27%（46名）、「一人で行くのが不便・遠い」が26%（45名）でした。聴覚障害によるコミュニケーションの問題だけでなく、仲間や交通アクセスの問題を理由に挙げる人が1/4程度見られました。

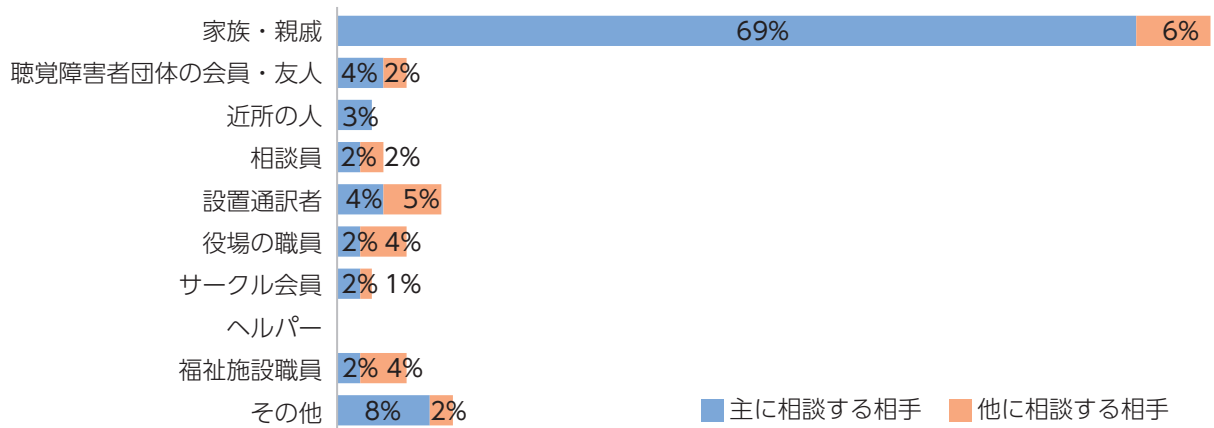
問37 近所の人との付き合い（複数回答） n=229



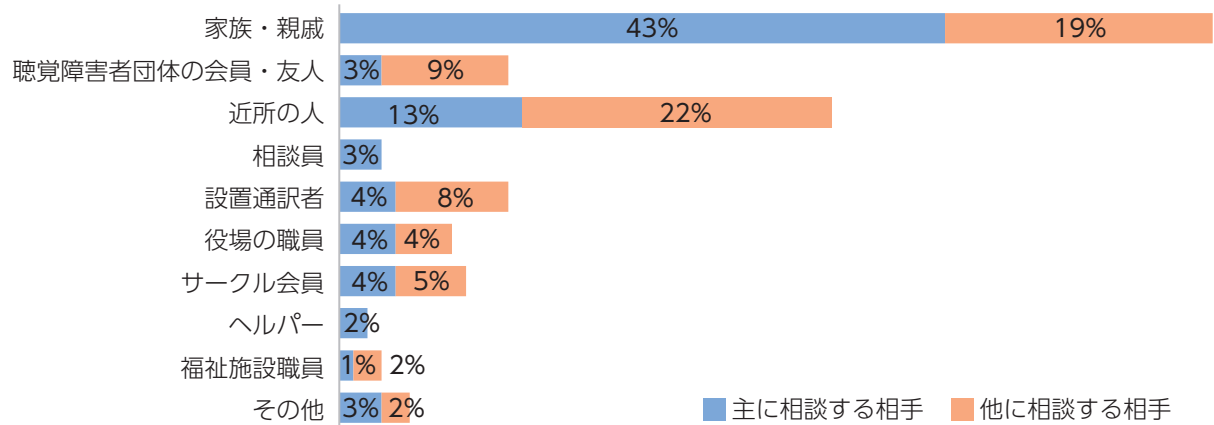
○近所づきあいの状況をたずねたところ、「あいさつをする」が86%（198名）、「何か起きた時に聞く、連絡してもらう」が34%（79名）、「おすそ分けをする、お土産を分ける」が31%（71名）でした。日常的なあいさつと共に、連絡をしてもらったり、おすそ分けができる比較的密度の濃い近所づきあいが3割程度見られました。

問38 相談相手（複数回答）

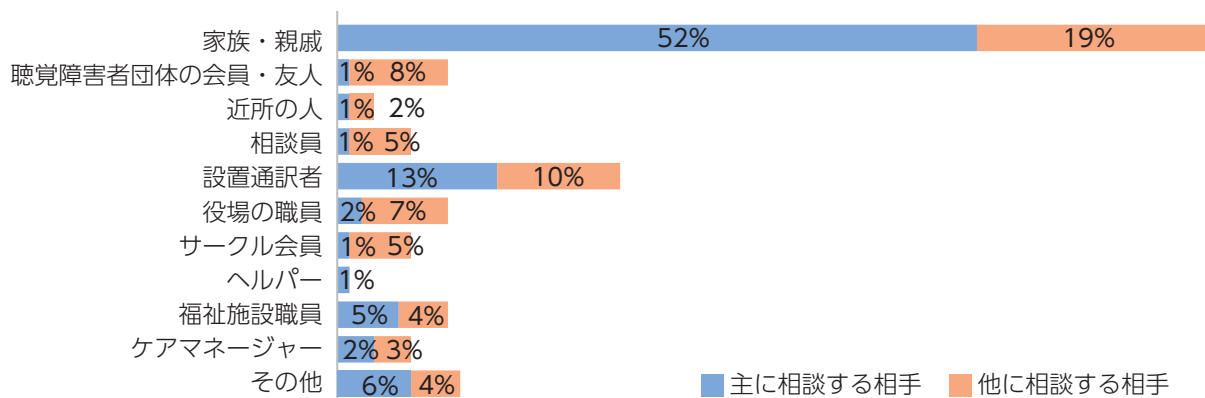
①お金のこと（銀行の手続き、支払いや請求など） n=198



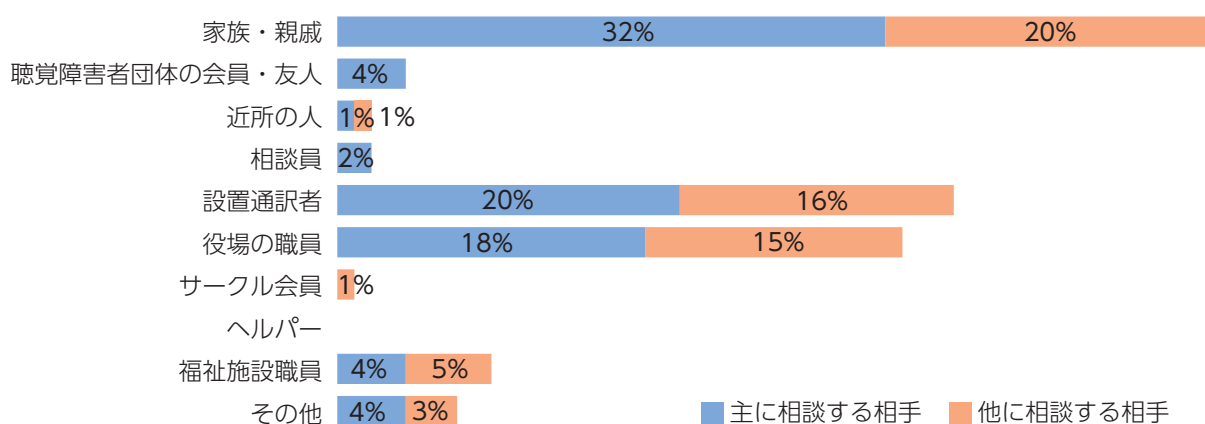
②地域のこと（自治会や近所づきあい） n=180



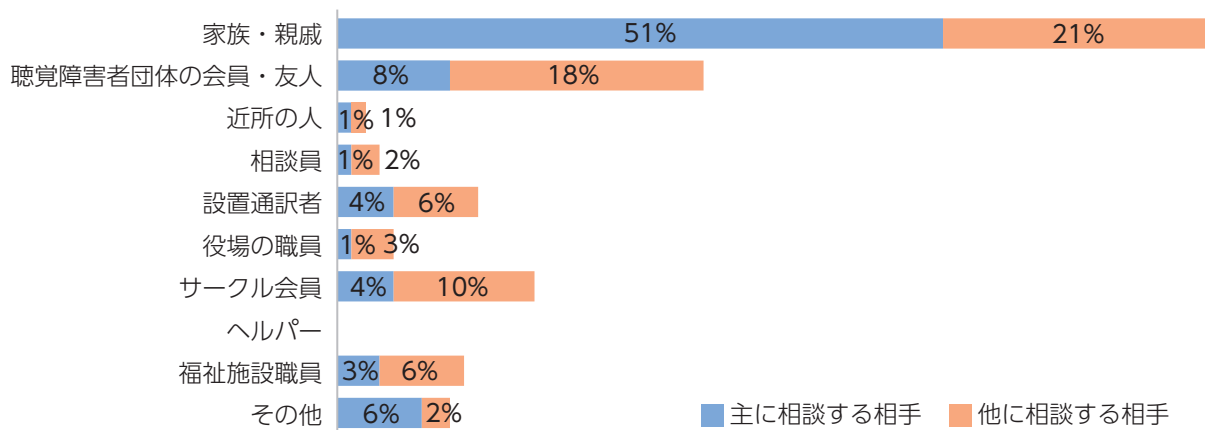
③健康や病気に関すること n=194



④役所の手続きなど n=203



⑤新聞やテレビの内容について n=181



○相談相手についてたずねたところ、「お金のこと」では「家族・親戚」が69%（137名）と際立って多く、「地域のこと」では「家族・親戚」43%（77名）、「近所の人」13%（24名）でした。「健康や病気のこと」では「家族・親戚」52%（100名）、「設置通訳者」13%（25名）でした。「役所の手続き」では「家族・親戚」32%（65名）、「設置通訳者」20%（40名）、「役場の職員」18%（37名）でした。「新聞やテレビの内容に関する相談」では「家族・親戚」51%（93名）でした。

どの相談も「家族・親戚」に相談する割合が高く、健康や病気の相談、役所の手続きに関する相談は「設置通訳者」の割合も相対的に多い結果でした。以上の点から介護情報は本人と共に、家族にも提供することが大切だと考えられます。

問39 今後、あなたや聴覚障害の仲間が安心して暮らすために滋賀県内で必要と思うことがあれば（複数回答）（人） n=211

ア. 同じ仲間が集まりやすくする

190

同じ仲間が働ける場や、
職場で聞こえない人ができる仕事を増やす

93

同じ仲間が集まってすごせる場
（サロン・短期入所施設・小規模作業所）

97

同じ仲間と一緒に暮らせる施設
（グループホームや老人ホーム）

113

イ. 同じ仲間が安心して暮らす「しくみ」をつくる

195

大勢の人が使う施設（たとえば駅・病院）に
わかりやすい案内を増やす

87

災害や事故が起きたときに助けが求められる
（たとえば24時間頼める手話通訳・要約筆記・
盲ろう者ガイドヘルパー）しくみをつくる

158

急な連絡（避難情報、近所や職場の人の入院や
死亡など）や、日ごろの暮らしに役立つ情報が
受け取れるしくみをつくる

111

聞こえない人たち専門の相談機関をつくる

78

暮らしや福祉・医療の相談ができる場をつくる

89

引きこもりがちな人を連れ出してくれる支援

47

聞こえや補聴器の相談ができる場をつくる

51

ウ. 聴覚障害の人と話が通じる人材
（手話のできるホームヘルパーなど）を養成する

80

5 自由回答

問40 日常生活で困っていることや心配なこと、希望など

施設機能について

- ① びわこみみの里や湖北みみの里で高齢聴覚障害者が楽しくいきいき過ごせるような機能があると良いと思います。 (50代後半・男)
- ② 亡くなられた聴覚障害者のお宅を聴覚障害者用デイサービスまたはショートステイに活用できませんか。 (50代後半・男)
- ③ びわこみみの里が続いて欲しい (60代前半・男)
- ④ ろうあ者の老人ホームが欲しい (70代前半・男)
- ⑤ 今はまだ歩けるし、人との会話もなんとか聞こえなくても書いてもらったりしていますが、だんだん忘れっぽくなったり、車椅子等になった場合、聴覚障害者用のホーム等に入りたいと思っています。年金の収入しかないのですので、費用の高いところは入れません。 (80才以上・女)
- ⑥ 妻が先になくなったら聞こえない仲間とくらせる所に入りたい。 (80才以上・男)
- ⑦ 体が不自由になって施設に入所したり、デイサービスに行くようになった場合、周りはおしゃべりの花が咲いているのに、一人ぼつんとしているのは耐えられない。一つの施設に最低1名は手話の出来るひとがおられたら楽しく老後が送れると思う。よろしくお願いします。 (70代後半・女)
- ⑧ 安心の生活してほしい。寂しい人集まって楽しく暮らして欲しい。 (70代前半・女)
- ⑨ 私の場合だと補聴器で普通にできたのが高齢になって補聴器が追いつかない。大きい声であっても言葉になって私の耳に届かない。人と話したいのに聞こえないと人と会うのがおっくうになる。滋賀県も聴覚障害者向けの施設をつくって欲しい。(不便な場所は困る) (70代後半・女)
- ⑩ びわこみみの里が続いて欲しい。もっと収入が増えてほしい。ろう者の老人ホーム建てて。 (70代後半・男)
- ⑪ 健聴者もろうあ者も共に楽しめる、またお風呂も手伝って入れてもらえる施設が欲しいです。 (70代後半・男)
- ⑫ 私は人工内耳で、病院で入院した時の人工内耳機器の管理、保管が心配。施設に入所したとしても、同じ機器の管理、保管。 (70代後半・男)
- ⑬ 聴覚障害者老人ホームを早く建設して欲しい。 (80才以上・女)

仲間づくりについて

- ① おいしいものを一緒に食べる仲間がほしい。 (70代前半・女)
- ② 高齢になって難聴が一段と進み人と出会いにくくなってきました。また、一人孤独で淋しく過ごしています。死にたい！死にたい！ (70代前半・男)
- ③ 年を取ったら何が起こるかかわからないので心配だと思えます。一人生活は寂しくなるだろうと思って、誰か話し合っしてほしい。 (70代前半・女)

生活について

- ① ひざを痛め、外に出ず。老人施設に入所したい。 (80才以上・女)
- ② 加齢に伴う心身の機能低下、諸疾患の発生。 (70代前半・男)
- ③ 何かの病気、けが等で入院するとき、今は家族のつきそいが難しいと思うので、当人の体調が悪いとき、人工内耳の適正な装着や外しているときの管理ができないのが心配。はめていて何かで外れても、気づいてくれる人がなく紛失する等。 (50代後半・女)
- ④ 相続手続き。将来一人ぼっちのために、葬式に不安 (60代後半・女)
- ⑤ あなたのためと勝手に庭や垣根を切ってしまう人が地域に多く、発覚した後で抗議に行くのだが、あなたのためにやって何が悪いと逆ギレされること。相手は耳が聞こえないからと勝手に決めつけてしまうこと。 (60代後半・男)
- ⑥ 遺言書を書く方法・相続の問題がある (60代後半・男)
- ⑦ 家の生活に一人で大変です。 (60代後半・男)
- ⑧ 経済的に不安がある。 (60代後半・男)
- ⑨ いっぱいありすぎて書けません。 (70代前半・女)
- ⑩ 今は家族（主人、子ども達）が一緒なので、毎日安心して暮らしていけるが、人生いつどんな事が起こるかかわからない。いつも『もし…になったら』を考えながら生活しています。 (70代前半・女)
- ⑪ 退職した後の生活が一人で自分の事もできないのでその事が一番の悩み。 (70代前半・男)
- ⑫ 現在は介助なく自立していますが年を重ねて自由に行動できなくなった時精神面での不安があります。 (70代後半・女)
- ⑬ 病院の先生の説明がわからない（マスク着用のため） (70代後半・男)
- ⑭ 家にこもりがちで会話が少なく聞き取る能力が低下しているように思います。 (70代後半・男)

- ⑮ 家でテレビを見て過ごすことが多い。夫が亡くなった後、4年が過ぎて納骨の件で悩む。(80才以上・女)
- ⑯ 床の中で死亡していたらと、そればかり心配しています。これから身体が動かなくなったら、食事の事や下の事がはずかしいやら心配しております。今の世の中はたとえ肉親と云えど親身に心配してくださる方がおらず、その事で少なからず悩んでいます。(80才以上・女)
- ⑰ 高齢両耳難聴で生きていくのはつらいですが、補聴器に助けられて生きていきます。(80才以上・男)

要望活動について

- ① 法人と当事者団体がともに高齢者福祉や介護福祉について勉強し、行政への要望活動に活かしては
いかがでしょうか (50代後半・男)
- ② 人工内耳装用者です。コントロールユニットの故障に対応するため、動産保険に加入しています。
もし不可能になった時、買い換えは大変高額となり、年金生活者で大変不安です。自治体によっては
補助が出来る制度もあり、大津市でもあれば助かります。どうすれば補助制度が出来るか、一度皆
さんと話がしたいです。(60代後半・女)
- ③ 人工内耳をサポートする機器を使っていますが、高価で出費がかさみます。行政の支援をお願いし
ます。(70代後半・男)
- ④ 公的な病院（市立）、役場などに手話で通じる方の常駐を希望します。(80才以上・女)
- ⑤ 盲ろう通訳介助者を増やして欲しい。(70代後半・男)
- ⑥ 障害に関係が無く当たりまえの様に、生活できる環境を作ってほしい。(50代後半・男)
- ⑦ いつでもどこでも手話通訳依頼に応えられるような体制を作って欲しい。(60代前半・男)

コミュニケーションについて

- ① コロナ禍でマスクの常態化による読話ができないことでコミュニケーションの質が落ちている。今ま
でなら聞こうと思ったことでもマスクだと聞きにくいと思ってあきらめてしまい情報が得にくくなっ
ている。(50代後半・女)
- ② 高速道路の料金所での精算の際、(手帳を見せるなど) マイクからの職員さんの説明が聞こえない。
(単にはETC無し) 一人だと高速を走れない、どうすればいいか。(60代前半・女)
- ③ 人工内耳で、病院に入院した時の人工内耳機器の管理、保管が心配。
- ④ 人工内耳が故障したときは、代替機が病院から貸与されるまでに1週間かかり、その間は会話が聞き
取れない。中途失聴のため手話はわからない。(50代後半・女)

- ⑤ 再就職するための活動で一番困ったことは、電話連絡がスムーズにできないことでした。住んでいる市役所の電話中継サービスは受け手がすぐ対応できず中継がスムーズでなかった。急ぐ時はその場にいた健聴者に電話を代わりにお願いしたりもした。ハローワークは手話通訳者が常勤ではないので困った。手話通訳者派遣は時間がかかって求人を探す時、先越されることがしばしばあった。
(60代後半・男)
- ⑥ 補聴器を頼りに生きて30年以上になると、手話通訳も私にはわからないことが多い。家族・親戚もいない。とにかく補聴器がなければ話が通じない。要約筆記と字幕放送は中途失聴難聴者協会に入り、初めて知りました。今のところ、大声と筆記、字幕で日常生活を続けるしかありません。
(80才以上・男)
- ⑦ 手話の出来る人・手話通訳者が増えて欲しい
(70代前半・男)
- ⑧ 読話を重視して生活している私は、会話で繋げることの大変さを実感しています。(即、対応できないもどかしさなど…)
(70代後半・女)
- ⑨ 人工内耳を利用しても大勢の中では話が理解できない。
(70代後半・男)
- ⑩ 補聴器をしていても、相手が話してくれることがハッキリわからない事があり、何回も訪ねることがありますが、それでもわからない時がある。いい加減な返事をしてしまう事がある。相手の人は、私のことをあの方少し頭がおかしいのと違うか…と聞いたことがある。
(80才以上・男)

交通手段について

- ① 必要な時、車で移動できるサービスが欲しい。
(50代後半・男)
- ② 免許を返した後、送迎サービスを使いたい。
(70代前半・男)
- ③ 現在、車の運転をしていますが、2、3年後に運転をやめると思います。重い物（買い物など）を持って運ぶことが出来ないので、つらいと思います。
(70代前半・女)
- ④ バス（交通）は日、土、祭日が休み、困ります。
(70代前半・女)

情報・通信について

- ① テレビが字幕でしか見られない。
(70代後半・男)
- ② 固定電話にかかってきてもベルはわかるが内容がわからないのででられない、かけるのもできない。LINEやメール、FAXが頼りである。
(70代前半・女)
- ③ 福祉法人で聴覚障害コミュニケーション機器のFAXだけではなくテレワーク機器を支援して欲しい。
(50代後半・男)

- ④ 聞こえない辛さはなった者にしかわからない。何もかも向上している社会でスマホ等で正確にグループや友達との会話等が字幕でスムーズに入る機器の開発を進めて欲しい。二人ぐらいの会話は現在のスマホで出来るアプリを使っているが、3から4人となると全く無理だから。 (70代前半・女)
- ⑤ 万一、火災、地震、津波、原子力の被爆恐れ緊急情報が聞き取れない。 (50代後半・男)
- ⑥ テレビ番組の字幕が大きすぎてテレビが見づらくなりおこられる。出来たら文字は小さくて良いので下の方に入れてほしい。 (70代前半・女)
- ⑦ 電話が使えない。 (70代後半・男)
- ⑧ 手話通訳者だけでなく筆談で伝えてくれる通訳者も必要。市役所に困ったことを相談しても、聴覚センターへ行ってもスムーズに利用出来る事がないので困る。 (70代前半・女)
- ⑨ スマホや電化製品など、おこまりの節はTELくださいとTEL番号しかかいていないのが多いのでFAXの相談や申込みができるようにしてほしいです。 (70代前半・女)
- ⑩ 近所とのつきあい、コミュニケーション不可・筆談対応してくれない。誤解が多少ある。手話できなくても普通の会話ができないこと理解も必要と筆談対応も必要との件、PR拡大をしてほしい。 (50代後半・男)

緊急時の対応について

-
- ① 24時間体制で手話通訳派遣できるように要望したい。(事故や急病の時) (60代前半・女)
 - ② 2年前に身寄りが亡くなったので寂しく、将来が不安である。一人暮らしなので夜間に病気(体調不良)になった時が不安。必要な時、車で移動ができるサービスが欲しい (50代後半・男)
 - ③ 一人暮らしで夜が心配。もし夜間に急に倒れたら不安。家でテレビを見て過ごすことが多い。ひざを痛め老人施設に入所したい。夫が亡くなった後、4年が過ぎて納骨の件で悩む。 (80才以上・女)
 - ④ 緊急時、知らせる装置が欲しい。スマホはろう者は見える、盲者はきこえる、盲ろう者は対応がない。新しい仕組みが欲しい。 (50代後半・男)
 - ⑤ 主人と二人暮らしなので、急な電話しなければならない時は、主人がしてくれるが、一人暮らしになった時に電話で確認してから病院へ行く…とこの場合・連絡できない。日常的にもタクシー、消防署とか警察とかの電話連絡ができないから不安です。 (70代前半・女)
 - ⑥ 将来、もし一人暮らしが始まって急病が発生した時に『緊急ボタンSOS』を設置すればすぐ連絡が出来るのでよいと思います。スマホや電話などで連絡するのは遅いので『緊急ボタンSOS』を使えば便利で良いと思います。 (60代前半・女) (60代後半・男)
 - ⑦ 災害・水害の時、助けなり(訓練)音がわからないです。台風、地震の時古民家は心配している。 (70代前半・女)
 - ⑧ 日中、一人で家に居る時に、体調不良、倒れた時に、外部に連絡する手段がない。 (70代後半・女)

- ⑨ 病気になった時、救急車、情保保障に不満がある。 (70代後半・男)
- ⑩ 自分自身の体調が悪いとき、釦を押すことで救急車を呼べるシステム？等検討していただければうれしいです。 (80才以上・女)
- ⑪ 地震、台風など起こった時、聞こえないので心配。 (80才以上・女)

街づくりについて

- ① 近所づきあいが必要ですが、手話出来る人が二人だったので。もっとたくさん手話交流会になればいい環境ができるような町を作りたい。安心して暮らせるためです。 (50代後半・女)
- ② 近所の人亡くなったとか火事、救急車が来た。広報車が何をいっているのか。近所の方達と一緒にサロンを楽しめない。声もかけてもらえない。もっと声をかけ合っただけのものにしないような地域になるとうれしい。 (70代後半・女)
- ③ 地域の自治活動について国→県→市→地域へと自治のあり方が変わっていく中、障害者の参加が置いてぼりになってる。人々の理解、協力が必要だが都会と違って田舎は古くから住んでおられる人々は障害者の偏見がまだ根強く残っており、自治会活動への参加は(i)電話連絡できない (ii)会議のとき嫌な顔をされる。手話通訳者同行する/防災連絡体制からはずれる。役員持ち回りで受け持ってもお荷物扱いされる→ゆえに自分が生まれ育った町でもこの町がキライというろう高齢者たくさんいる。一緒に避難したくないとの声も多数ある。 (60代前半・女)
- ④ 近所の人たちの支援がない。暗くなると見えないので助けが必要。ビブスを付けたら助けてくれるのかな。 (70代前半・男)
- ⑤ 地域の方は付き合い、理解がない。手話言語を広めてほしい。 (70代後半・女)
- ⑥ 近所で手話の会が欲しい。 (80才以上・女)

アンケート調査について

- ① このアンケートで気になりました。障害者がもらってる年金は障害者年金だけではありません。 (60代後半・男)

その他

- ① 何も困らないけれど、来客の確認のためテレビドアを福祉課に申し込みましたが認めない。知っている電気店にも頼んでいたが駄目でした。家内、健聴者の娘に言っても駄目でした。困りました。 (70代前半・女)

第Ⅲ章 まとめと提言

第Ⅲ章 まとめと提言

高齢聴覚障害者の生活を通じて考える

「日常のくらしの質」の向上と「安心してらせる街づくり」

上掛利博（京都府立大学名誉教授）

1. 調査の目的と視点～「孤独」を超えて「共生社会」を

(1) 高齢聴覚障害者と「孤独」の問題

2020年の「高齢化率」(65歳以上人口が占める割合)は、全国平均の28.9%に対して、滋賀県は26.3%であり、2.6ポイント低くなっています(国立社会保障・人口問題研究所、および内閣府の推計値をもとに滋賀県が推計)。なお、滋賀県の「出生率」(人口千比)は、2017年が8.3(全国5位)で、全国の7.6より0.7ポイント高くなっていますし、2019年に7.7(全国6位)に下がりましたが、全国の7.0よりもやはり0.7高い水準です(滋賀県『統計だより』2020年11月号)。合計特殊出生率でも滋賀県は1.47で、全国の1.36よりも0.11ポイント高くなっています。このように高齢化が進行するなかでも、子どもが一定数生まれていることや、外国人が増えていること(2018年24,120人から2020年28,790人へ2年間で4,670人増)、また、転出(1,965人)より転入(2,204人)が多いということもあって、滋賀県の人口は141万人台を推移しており「横ばい」であるという特徴があります(2020年9月1日現在、141万2,732人)。

滋賀県は、琵琶湖をはさんで西(湖西線沿線)と東(びわ湖線沿線)では違いがありますし、人口流出が進んでいる湖北地域と京阪神のベッドタウンとして人口が増えてきた湖南地域とでは事情が異なるので、7つの福祉圏域によって注意が必要です。

本調査では、滋賀県における高齢の聴覚障害者の生活実態から、①「日常のくらしの質」を向上させるうえでの“固有の課題”が明らかにされているとともに、そのことが、②聴覚に障害のない人にとっても(加齢で難聴などの中途障害になる可能性はあるので)「安心してらせる街づくり」につながっていること(社会全体の“ユニバーサルな課題”)が示されています。

高齢の聴覚障害者の生活について、いくつかの着眼点を示すと、①介助や介護が、必要な人に届いていない実態があることから、これまでのようなボランティア活動にたよる方法では計画性・継続性の点で限界があること、②「孤独」の問題が今日の老後の不安の中核にあることが明らかになり(注)、一人暮らしの高齢聴覚障害者の「孤独死」が起きていることもあって、孤独の問題に対する支援が求められていること、③IT(情報技術)、AI(人工知能)などの科学技術の発展を活かし、そのためにも若い世代の感覚を取り入れていく(=参加を促す)必要性など、“多様性が生きる”方策を工夫する必要があります。をあげることができます。

(注)例えば、「深刻化する孤独問題」『毎日新聞』2021年5月19日付など。(a)海外在住の相談者も組織して、24時間年中無休でインターネットを利用したチャット相談を受けている大空幸星さん(慶応大学総合政策学部4年、NPO法人「あなたのいばしょ」理事長)は、「家族や地域とほとんど接触のない状態を指す『社会的孤立』という概念では、友達がいても寂しいという若者や親に虐待されている子どもたちは救えない。私が『望まない孤独』という言葉を使うのは、性別や年齢などの属性で線引きしたり排除したりせずに、主観的な『孤独』という状態に着目する言葉だからだ。…孤独を恥じずに相談できる社会にしなければならない」と述べています。(b)CSW(コミュニティソーシャルワーカー)として制度の狭間で困っている人の支援に当たってきた勝部麗子さん(大阪府豊中市社会福祉協議会・福祉推進室長)は、「人間関係の貧困」によって「自分から助けを求められない」とか「助けを求めても誰にも気づいてもらえない」という二つの危機が存在するが、日ごろから人とのつながりを大切にしてきた女性は“群れて”活動するなかでユニークなアイデアを出せるのに対して、中高年男性の孤立が深刻化しているとして、「競争社会で生きてきた男性たちを共生社会に取り戻す」必要性について言及しています。そして、(c)批評家の杉田俊介さんは、男性の孤独は二つに大別でき、一つ目は、従来の「男らしさ」の呪縛によるもの(自分の弱さを認められない)、二つ目は、地域にネットワークがないなど労働や家族の形態変化に伴うもの(人に助けを求められない)であるとして、その解決策としては、趣味や地域のつき合いを通じて「他者に巻き込まれること」と「無駄なこと」を勧めています。

全国で行われている「孤独」をめぐるこのような状況や実践、滋賀県下の各福祉圏域などで取り組まれている好事例、聴覚障害以外の様々な経験からも学ぶことが重要です。

(2) 支援の現状

滋賀県における高齢聴覚障害者に対する支援の現状では、2019年10月と2020年11月の「聴覚障害者の社会的自立を考えるセミナー」で、聴覚障害者団体が開催している「サロン」の発展、介護が必要な人への支援の問題、また老人ホーム建設の要望が提起され、また、「滋賀県聴覚障害者福祉ビジョン2008」(2008年～2018年)では、高齢の聴覚障害者の割合が高くなっていること、公的機関に手話通訳者・要約筆記者が配置されていない地域があること、介護保険制度に基づく居宅サービスの実施状況、既存の老人福祉施設との連携などが示唆されています。

この提言では、滋賀県内に暮らす高齢聴覚障害者の生活実態と介護ニーズの把握を通して、高齢聴覚障害者が老後を安心して暮らせるための社会資源の創設(居宅サービスや介護施設)など、高齢の聴覚障害者の福祉(=幸福)の増進における社会福祉法人・滋賀県聴覚障害者福祉協会の役割(長期計画の策定)に関わる提言を行います。しかし、それは法人だけの問題に留まりません。高齢の聴覚障害者一人ひとりはもちろん、家族、職員、支援者、友人も含まれますし、そして滋賀県や市町村などの行政が担当する問題、企業、NPOなどの民間の諸団体、そして地域住民の全体に関わってくる課題でもあります。

2. 調査結果から見えてきたこと

(1) 基本属性

調査対象者の基本属性は、性別では「男性」46%「女性」54%と女性が8ポイント多く、年齢は「65歳～74歳」が41%を占めています。障害状況を見ると、身体障害者手帳の「2級」54%、「1級」32%、「3級」6%と、3級以上が92%でした。

聴覚障害になった年齢は、「生まれた時から」45%、「1歳～6歳ごろ」34%と、就学前が79%を占め、学歴では、「聾話学校高等部卒」62%、「聾話学校中等部卒」7%、「聾話学校小学部卒」1%と、聾話学校卒業生が70%でした。

(2) 暮らしの状況と持ち家

暮らしの状況を聞いたところ、最も多いのが「二人暮らしの人」58%、次いで「一人暮らしの人」15%でした。収入の種類では、最も多いのが「障害年金」の62%、「給与」は17%です。年収では、「60万円～119万円」が最も多く57%、次いで「120万円～199万円」の19%でしたが、「0～59万円」が6%おられるので、年収119万円までの方が63%という結果でした。金額について「生活の余裕」を聞いたところ、約6割が「足りない」「少し足りない」と回答しています。

これに対して、住宅の形態を見ると、「自己所有の戸建て」が79%、および「自己所有のマンション」が6%と、85%の人が自己所有の住宅に住んでいます。ちなみに、2017年の長崎県高齢聴覚障害者実態調査では「持ち家」は51%、2003年の長野県ろうあ高齢者実態調査では「持ち家／一戸建て」は71%であったのと比べても、滋賀県の高齢聴覚障害者での自己所有の住宅の多さがわかります。

(3) 健康状況

健康状態を聞いたところ、「まあまあ健康である」61%と「健康である」24%で、健康という回答が合わせて85%を占めていますが、そうしたなかで通院している人は84%おり、通院の回数は「月1回」41%、「2か月に1回」20%、「3か月に1回」12%と、「月1回未満」が73%を占めています。このことから、「健康」と回答した人でも通院している状況がみられます。

また、通院に付き添いが必要な人が40%おられます。病気の時に困ったこととしては、「医者の説明がわからない」が45%、「自分で連絡ができない」及び「病院で自分の病気がうまく伝えられない」が各33%と、病院においてコミュニケーションの困難さがあることが明らかになりました。

介護状態を聞いたところ、「介護・介助が必要」な人は17%おり、そのうち「介護サービスを利用している」は60%で、なかには「介護サービスを知らない」が25%、「介護サービスを知っているが利用していない」が13%みられるように、介護が必要でありながら介護サービスの利用につながない人が約4割も存在しています。このことから、まわりの支援を得られないまま「孤独死」につながっている可能性が考えられます。

また、介護サービスを利用している人の介護度は、「要支援2」31%、「要支援1」14%と、要支援

の人が45%を占めていますが、自分の介護度が「わからない」と回答した人が17%も見られました。

そして、将来、介護・介助が必要になった時に生活したい場所を聞いたところ、「現在の家に住み続けたい」が46%、「県内にろうあ老人施設が建設されれば入所したい」が34%、「健聴者と一緒の老人ホームなどの施設に入所したい」が2%と、老人施設での生活を希望する人の割合は36%ありました。すなわち、自宅で住み続けたいという人が、老人施設の希望より10ポイント高かったのですが、このことに関連しては、回答者がどのような施設を希望しているのか、高齢者の生活実態をふまえて明らかにしていくことが重要です。

(4) 社会参加

社会参加の状況では、情報を知るのに一番良い方法としては、「手話や字幕付きのテレビ番組」が41%と最も高い割合でした。「会話やおしゃべり」は9%、「新聞」は8%でした。また、スマホやパソコンの使用では、「使用している」が75%、「使用していない」が25%で、使い方(複数回答)としては、「連絡」が90%、「調べものやニュースなどを見る」が80%と高い割合を占めています。

近所づきあいの状況については、「挨拶をする」が86%と最も高い割合を占めています。「何か起きたときの連絡」は34%、「お土産を分ける」は31%でした。相談相手については、「お金のこと」「地域のこと」「健康や病気」「役所の手続き」「新聞やテレビの内容」のいずれの相談も「家族・親戚」の割合が高いのですが、「健康や病気」に関すること、及び「役所の手続き」については「設置通訳者」の割合が比較的高くなっています。

3. 聴覚障害者と施設 ～ 「施設入所」 で本当に良いのか

(1) どのような施設に入りたいのか

自由記述のなかに、「ろうあ者の老人ホームが欲しい」(70代前半・男)とか、「妻が先になくなったら、聞こえない仲間とくらす所に入りたい」(80代以上・男)というように、ろうあ者専用の老人ホームの希望が多くみられました。もっと具体的に、「だんだん忘れっぽくなり、車椅子等になった場合、聴覚障害者用のホーム等に入りたい。年金の収入しかないのですので、費用の高いところは入れません」(80代以上・女)という切実な希望も届いています。また、「健聴者もろうあ者も共に楽しめる、またお風呂も手伝って入れてもらえる施設が欲しい」(70代後半・男)というように、ろうあ者専用ではない施設へのニーズもみうけられます。

このように、加齢に伴う心身の機能低下、諸疾患の発生(ひざを痛め、外に出られない)などの理由から、老人施設に入所したいという要望がたくさんみられます。この点に関しては、施設の場所、部屋の大きさ、かかる費用、自由の度合い、ケアの質(手話通訳、食事)などを含めて、「どのような施設に入りたいのか」ということが重要になります。

例えば、2021年3月に、これまでにはない新しい発想による施設が建設されています。それは、川崎市と民間の社会福祉法人による**官民複合型の福祉施設**です(『福祉新聞』2021年4月15日付)。

この施設「ふくふく」は、JR川崎駅から徒歩15分、総工費62億円のうち福祉法人が42億円、市が20億円負担(および土地は市が無償提供)、8階建てのうち、1～3階は、川崎市の「総合リハビリテーション推進センター」(更生相談所+精神保健福祉センター)と福祉機器開発支援拠点、他の階が社会福祉法人設置の施設、4～5階は、**障害者が入所する施設**で、自宅やグループホームに移る訓練をする通過型施設(短期入所、宿泊型自律訓練を併設;定員各20人)、6～8階は、**特別養護老人ホーム**(そのうち8階は、聴覚障害者の専用フロアで定員25人;手話ができる職員を配置、居室天井には3色のランプ)というものです。聴覚障害のある高齢者を専門的に受け入れる特養ホームは全国的に数が少ないので、こうした複合型の福祉施設のあり方も注目されます。

(2) 自分たちが望む「友だちができる」デイセンター

「“びわこみみの里”や“湖北みみの里”で、高齢聴覚障害者が楽しくいきいき過ごせるような機能があると良い」(50代前半・男)という希望について、どのような機能があったら楽しく過ごせるのか、具体的に明らかにしていくことが求められます。

また、新しい発想として、「亡くなられた聴覚障害者のお宅を、“聴覚障害者用デイサービス”または“ショートステイ”に活用できませんか?」(50代前半・男)という提案もありました。「持ち家」の多い滋賀県で、その特長を活かすことで、自分たちの夢を叶える基盤になると考えられるかもしれません。こうしたことを通じて、自分たちが利用したい、より良い制度や施設を創っていく「創る福祉」が求められます。

その際、「デイサービスで、周りはおしゃべりの花が咲いているのに、一人ぼつんとしているのは耐えられない。一つの施設に最低1名は手話の出来る人がおられたら楽しく老後が送れると思う」(70代後半・女)という声に応えるためには、こちらからデイサービスに出向いて行ったり、デイサービスから出掛けたりして、「友人をつくるのを助けてくれる福祉」の実践も求められています。

ありがちな「自己責任論」に対峙するには、専門的な支援とともに広域で幅広いネットワークを持った支援、自分たちで「創る福祉」「出向く福祉」を担う人材育成が不可欠です。

4. 高齢難聴者の「ユニバーサルな課題」と「固有の課題」

(1) 「生きる意欲」を引き出す福祉

「高齢難聴者」という言葉に関して、誰もが年をとって高齢者となって聞こえにくくなる事実を踏まえるならば、「高齢者福祉」と「障害者福祉」の重なりを考える必要があります。そのことは、「障害」の概念を広げることに繋がりますし、また、「生きる意欲」を引き出す福祉へと、「福祉」の意味を深化させることでもあります。

例えば、「町内に聴覚障害者は1人か2人、あと老人性難聴者は10%ぐらいおられる。…高齢になって補聴器が追いつかなくなり、人と話したいのに聞こえないと人と会うのがおっくうになる」(70代後半・女)という自由記述の例にもみられるように、人と「会いたい」にもかかわらず会うのが「おっくうに」

なるというのは、生きる意欲をなくしていく(=「福祉」とは逆の)プロセスを現しています。同様に、一方で、「おいしいものを一緒に食べる仲間がほしい」(70代前半・女)という希望が語られているのに対して、他方では、「高齢になって難聴が一段と進み、人と出合いにくくなって、一人孤独で淋しく過ごしています。死にたい！死にたい！」(70代前半・男)というように展望が見えない辛さ、苦しさをあらわしている記述もみうけられます。

これらのことは、高齢者の仲間づくりが「孤独」問題への対応としての「ユニバーサルな課題」として求められているだけでなく、聴覚に障害を有するもの同士の仲間づくりが必要であるという「固有の課題」があることを示しています。「重度」「重複」障害者の存在も同様ですし、「女性」の視点から今まで気づかなかったことや政策から抜け落ちていることを明らかにすることもそうです。また、30年～50年後に高齢者となる「若者」を、将来社会の担い手としてどのように位置づけて育てていくかという教育の課題も重要です。

高齢の聴覚障害者が、「年を取ったら何が起こるかわからないので心配だ。一人の生活は寂しくなるだろうと思うので、誰か話し合って欲しい」(70代前半・女)という希望を叶えるための第一歩は、「近所で手話の会が欲しい」(80代以上・女)という固有のニーズを、高齢者サロンなどを定期的に開催する「居場所」をつくることにつなげることから始まるのではないかと考えられます。

(2) 要望・要求から「自主的活動」へ

そうしたなか、「法人と当事者団体がともに高齢者福祉や介護福祉について勉強し、行政への要望活動に活かしてはいかがでしょうか」(50代前半・男)という提案は大切ですが、「要望活動」の段階に留まらないで、社会全体をより良くするための課題解決に向けた「自主的活動」へと広めていくことが不可欠のように思えます。

例えば、「遺言書を書く方法」(60代後半・男)や「相続の手続き」(60代後半・女)について知りたいというニーズに対しては、自発的に専門家を招いて学習する機会をサロンなどで設ける必要がありますし、「一人ぼっちのため葬式が不安」(60代後半・女)という切実な要望に応えるには、共生の組織である生活協同組合とか、協力してくれる葬儀社などと連携して、あらかじめ相談して要望を聞いてもらえる仕組みを整えることができるならば、聞こえない当事者にも葬儀社にも有益だと思われれます。

このように、法人内部や当事者団体だけで解決するという発想にとどまらないで、視野を広げて、地域社会の中で協力してもらえる個人や団体、NPO、行政、会社、大学等の教育機関などの地域資源と連携していくことが求められます。というのも、高齢になってから障害と向き合うことになる難聴者の団体は平均年齢も高いことが多いので、手話言語条例の制定(近江八幡市、米原市、大津市、栗東市)などを通じて、若い世代が関心を持ったり、若いうちから当事者と一緒になって参加して行動する社会活動(ソーシャル・アクション)が重要になります。

5. コミュニケーションの確保

(1) ソーシャル・コミュニケーション (= 社交)

自由記述のなかにも、「あなたのためと勝手に庭や垣根を切ってしまう人が地域に多く、抗議に行くと、あなたのためにやって何が悪いと逆ギレされる。相手は耳が聞こえないからと、勝手に決めつけてしまう」(60代後半・男)という意見があるように、“あなたのため”という決めつけで判断され、“大きなお世話”の対応をされてしまうケースも見受けられます。この問題の根底には、「対等なコミュニケーション」が十分とられていないという問題があります。

不十分なコミュニケーションについては、聴覚に障害がある者のあいだだけでなく、今日すべての人にかかわる社会問題になっています。そこで、ソーシャルなコミュニケーション(= 社交)というものを位置づけて、「社会生活を営む上での協同的なつながり」を意識的に生み出すことを考えてみてはどうでしょうか？

例えば、2020年3月以降の新型コロナ感染予防対策のなかで、コミュニケーションにも大きな影響が出ています。特に、聞こえない人にとっては、「コロナ禍でマスクの常態化による読話ができないことで、コミュニケーションの質が落ちている。…マスクだと聞きとりにくいと思ってあきらめてしまい、情報が得にくい」(50代後半・女)という切実な声が上がられています。

また、「再就職の活動で一番困ったことは、電話連絡がスムーズにできないことでした。市役所の電話中継サービスは、受け手がすぐ対応できず、中継がスムーズでなかった。急ぐ時は、その場にいた健聴者に電話を代わりにお願いしたりもした。ハローワークは手話通訳者が常勤ではないので困った。手話通訳者派遣は時間がかかって、求人を探す時、先を越されることがしばしばあった」(60代後半・男)というように、現代の社会は、“電話”を基本にした連絡体制が中心であるために、電話中継サービスなどの制度は整備されつつあるものの有効に機能していない場合もあるという課題があります。

そして、「補聴器を頼りに生きて30年以上になると、手話通訳もわからないことが多い。…補聴器がなければ話が通じない。要約筆記と字幕放送は、中途失聴難聴者協会に入り、初めて知りました」(80代以上・男)という声からもわかるように、特に中途失聴の難聴者の場合には、制度はあっても知られていないという課題が残されています。

それゆえ、SDGsの「一人も取りこぼさない」という考え方にたって、社会のいろいろなコミュニケーションの場面において、聴覚に障害のある高齢者が「あきらめない」で済むような社会の支援が求められます。

(2) 交通 (移動・買い物)

一般に高齢期を迎えると、移動の場合(通院、役所、金融機関)と買い物の場合などで、交通手段についてのニーズが高まります。

聴覚に障害がある高齢者の場合も同様で、「必要な時、車で移動できるサービスが欲しい」(50代後半・男)とか、「免許を返した後、送迎サービスを使いたい」(70代後半・男)というように要望が出されています。また、聴覚障害者に固有のニーズとしては、「高速道路の料金所での精算の際、マイ

クからの職員さんの説明が聞こえない。ETC無しで一人だと高速を走れない、どうすればいいか」(60代前半・女)などがあげられています。

そして、買い物の際の交通手段のニーズが高いことがあります。「重い物(買い物など)を持って運ぶことができないので、つらい」(70代前半・女)という現状に対応するには、生協や一部スーパーの宅配サービス(ネットで注文して配達する場合と、店舗で買った物を届けてくれるサービス)などの利用も考えられるので、あらかじめ相談して仕組みを作っておくと安心できます。

また、移動や買い物に関する便利な情報を、聞こえない仲間のあいだに広めることも重要です。これらは、一般の高齢者にとっても有用でしょう。

(3) 情報・通信 (FAX・筆談)

「スマホや電化製品などで、〈おこまりの節はTELください〉とTEL番号しかかいていないのが多い。FAXでの相談や申込みができるようにしてほしい」(70代前半・女)という要望は、当事者ならではの重要な気づきです。TELだけでなくFAXも必要だということを、業界団体などに伝えて理解してもらう必要があります。また、関連して、「固定電話にかかってくる、ベルはわかるが内容がわからないので出られない、かけるのもできない。LINEやメール、FAXが頼り」(70代後半・女)という声もありました。

また、FAXへの着目について、「筆談」の必要性も認められています。例えば、「近所とのつきあいやコミュニケーションが不可欠になっている。そのために、“筆談対応”も必要だというPRをしてほしい」(50代後半・男)という意見がありました。ほかにも、「手話通訳者だけでなく、筆談で伝えてくれる通訳者も必要。市役所に困ったことを相談しても、聴覚センターへ行っても、スムーズに利用出来る事がないので困る」(70代前半・女)という声など、アナログな対応だけれども確実な“筆談”へのニーズも根深いものがあるということがわかりました。

そのほかにも、「テレビ番組の字幕が大きすぎて、テレビが見つらくなり(家族に)怒られる。できたら文字は、小さくてよいので下の方に入れてほしい」(70代前半・女)という毎日の生活場面での切実な技術的に改善できるニーズについての指摘や、「スマホ等でグループや友達との会話が、正確に字幕でスムーズに入る機器の開発を進めて欲しい。2人での会話は現在のスマホで出来るが、3~4人となると全く無理」(70代前半・女)といった最新の技術をもっと使いやすいものにして欲しいというニーズもありました。

また、IT等の講習会の要望も、「福祉法人で、聴覚障害コミュニケーション機器のFAXだけではなくテレワーク機器を支援して欲しい」(50代前半・女)などが出されています。

(4) 人工内耳

人工内耳に関して、①「人工内耳をサポートする機器を使っていますが、高価で出費がかさみます。行政の支援をお願いします」(70代後半・男)、②「病院に入院した時の人工内耳機器の管理、保管が心配」(70代後半・男)、③「人工内耳が故障したときは、代替機が病院から貸与されるまでに1週間かかり、その間は会話が聞き取れない。中途失聴のため手話はわからない」(50代前半・女)、④「人工内耳装用者です。コントロールユニットの故障に対応するため、動産保険に加入しています。も

し不可能になった時、買い換えは大変高額となり、年金生活者で大変不安です。自治体によっては補助が出来る制度もあり、大津市にもあれば助かります。どうすれば補助制度が出来るか、一度皆さんと話がしたい(60代後半・女)など、たくさんの要望があがっています。

1994年に保険適用となったこうした新しい技術に関連した制度へのニーズは高く、整備が求められています。

6. 緊急災害時への対応

地球環境の温暖化が進んで、集中豪雨などの自然災害が多発するようになり、「安心して暮らせるためには、近所づきあひが必要です。たくさん手話交流会ができて、いい環境ができるような町を作りたい(50代前半・女)」という意見にもみられるように、緊急事態への対応を考えるに際しては、近所づき合いなど日常のコミュニケーションが重要です。

しかしながら実際には、「障害者の参加が置いてけぼりになっている。…自治会への参加は、①電話連絡できない、②会議の時、嫌な顔をされる。防災連絡体制から外れる。役員持ち回りで受け持っても、お荷物扱いされる(60代前半・女)」というものであり、「近所の人で亡くなったとか、火事、救急車が来たとか、広報車が何をいっているのかわからない。普段、近所の方達と一緒にサロンを楽しめない。声もかけてもらえない。もっと声をかけ合って、のけものにしないような地域になるとうれしい(70代後半・女)」というような現状です。「障害に関係がなく、当たり前のように生活できる環境をつくって欲しい」(50代後半・男)という要望が出されるのも頷けます。

特に、今後も増加していく「一人暮らし」の高齢者で聴覚に障害がある場合には、「一人暮らしなので、夜間に病気(体調不良)になった時が不安(80代以上・女)とか、「今は主人と二人暮らしなので、急な電話をしなければならない時は主人がしてくれるが、一人暮らしになった時に、電話で確認してから病院へ行く…とかの場合に連絡できない。日常的にも、タクシー、消防署とか警察とかの電話連絡ができないから不安(70代前半・女)」という声があげられています。

こうした状況に対して、「事故や緊急の時に、24時間体制で手話通訳の派遣できるようにしてほしい(60代前半・女)」という要望をはじめ、「緊急時に知らせる装置が欲しい。スマホは、ろう者は見える、盲者はきこえるが、盲ろう者には対応がない。新しい仕組みが欲しい(50代前半・男)とか、「一人暮らしになって急病になった時、『緊急ボタンSOS』があればすぐ連絡が出来るのでよい。スマホや電話などで連絡するのは遅い」(60代前半・女 & 60代後半・男)という意見が上がっています。

さらには、特に病院に関しては、「マスク着用のため、病院の先生の説明がわからない(70代後半・男)」という声もあるように、平常時の対応でもコミュニケーションの課題があるわけなので、緊急災害時にどのように対応がされるのかをあらかじめ検討しておくことが必要です。ですから、「公的な病院(市立)、役場などに、手話で通じる方の常駐を希望します(80代以上・女)や「盲ろう通訳介助者を増やして欲しい(70代後半・男)」という要望についても、緊急時という観点から見直される必要があります。

7. 提言：高齢聴覚障害者の生活を通じて考える「安心して暮らせる街づくり」に向けて

第1は、滋賀県聴覚障害者福祉協会や当事者団体に関連して、その視野を法人内や団体内から「地域社会へ」と広げてみることが課題となっています。すなわち、「地域の他の団体と連携して問題を解決」していく経験を積み上げることが不可欠です。

なぜなら、例えば「一人ぼっちで葬式が不安」という60代後半の女性のニーズなどは、高齢化が進む中で、一般の人も含めてますます切実な課題になってきています。この不安を解決するためには、事前に協力してくれる葬儀社を選定して、(例えば、生活協同組合との提携で実績を積んでいる会社など)、聴覚障害者の固有の要望をすりあわせていくプロセスを支援することが必要です。このようにして、何度か事例を積み上げることでノウハウも形成されるので、会社にとってもメリットが考えられます。また、他の障害などの場合にも適用できるようになりますし、一般の高齢者のニーズにもよりの確に対応できるようになって、「安心して暮らせる街づくり」につながっていくのではないのでしょうか？

それから、「葬式」の他にも、「遺言」や「相続」などの問題について要望があったように、弁護士や司法書士などの専門家団体とつながって、デイセンターやサロンなどの居場所で定期的に相談体制が組めるなら、聴覚に障害がある高齢者にとって、どんなに安心なことでしょう。このように「地域社会」へ視野を広げ、地域の他の団体や個人とつながって問題を解決していくなかで、「孤立・孤独」についての展望も開けるのではないのでしょうか。

第2は、「日常のくらしの質」を高める「個々人の(固有の)課題」が、「安心して暮らせる街づくり」につながっている「ユニバーサル(普遍的)な課題」でもある、という関係性を把握して計画の策定をすすめることが求められます。

高齢の聴覚障害者のところで気づかされやすい課題の解決が、他の「障害を有する市民」や「一般の高齢者」のニーズの解決にもつながっているわけですから、税金の負担の面でも合意を得やすい福祉政策を形成することが可能となります。そして、この理解の延長上には、「社会生活を営む上での協同的なつながり」を意識的に生み出すことにつながっているのではないのでしょうか？

具体的には、例えば、聴覚障害者センターの相談窓口が一本化されて「総合相談窓口」となり、人脈が多いベテランの職員が配置されて、そこに相談しさえすれば、関連団体はもちろん、行政、弁護士会、NPO、専門の業者など、聴覚に障害がある人との対応が不慣れなところも含めて、いろいろなところとつないで問題解決ができるようにすることや、「聴覚障害者専用のケアワーカー」が配置されて固有の課題の解決に当たるようになることなど、多様な取り組みが考えられます。

高齢の聴覚障害だけでなく、他の障害者や子どもたちとの関連では、富山県のNPO法人「大きな手小さな手」のように、デイサービス利用の高齢聴覚障害者が施設で孤立している実態を見て、高齢障害者が利用しやすく、楽しくコミュニケーションができる場をつくらうということで、聴覚障害当事者と手話通訳者、多くの関係者が一緒になって2013年にデイサービス事業を立ち上げたという事例もあります。ここでは、「富山型デイサービス」として、居宅サービス事業、障害福祉サービス事業、障害児通所事業を行っています。

第3は、中途失聴の人を含めた、高齢の聴覚障害者「一人ひとり」に注目して、そのニーズに応え

ていくことです。難聴についてどこに相談して良いかわからないとか、医療の後の「社会リハビリ」の仕組みができていないなどの課題もあげられます。

アンケートの自由記述でも明らかになったように、安心してくらしたいためには、「近所づき合い」が重要なのですけれども、現実には、近所の方がなくなったときや自治会への参加などで、聴覚障害者がお荷物扱いにされ「置いてけぼり」や「のけもの」になっているケースが見られます。重要なのは、普段からのコミュニケーション(社交)ができていないと、頻発している災害などの緊急事態の時に「置いてけぼり」になってしまう可能性が高くなることが示されている点です。

“一人ひとりのニーズ”に着目することはまた、高齢化の進行で注目されている「望まない孤独」を超えて「共生社会」＝「多様性が生きる」社会への展望とも重なってきます。

第4は、聴覚障害の当事者の希望が「施設入所」で本当に良いのか?という問題提起をしましたが、高齢化が進むなかで切実なニーズとなっている居場所＝施設に関する課題です。これまでの特別養護老人ホームなどの高齢者施設とは異なる、まったく新しい発想で、自分たちが利用したい、あるいは入居したいと思えるホーム(居場所)のモデルを「創る」ことが求められているのではないのでしょうか。

例えば、滋賀県は“持ち家”が多いという特長を活かして、「亡くなられた聴覚障害者の方のお宅を、聴覚障害者専用のデイサービスまたはショートステイに活用できないか」という50代前半の男性からの提起にもあったように、住み慣れた地域での生活が続けられる自分たちが利用したい「居場所」や、グループホームなどの施設を創って、聴覚に障害のある高齢者はもとより、一般の高齢者にも魅力があるものを、地域住民、行政などのモデルケースとして示すことが求められているのではないのでしょうか。

それらが制度化されて「聴覚障害者のグループホーム」や、“持ち家”の多い「滋賀県型」ともいえるような「地域密着で多機能なデイサービス」(家から通うことのできる小規模な施設)など、当事者と地域のニーズに沿ったより良い福祉制度の実現につながっていくのだと考えます。

第5は、今回の調査を通じて明らかとなった具体的な困りごとについて、解決のために当事者が参加して行動できる「仕組み」をつくることです。実際に問題を解決していく活動のなかで学習し、安心して暮らし続けることのできる実感を感じられるようになって、“前向きに生きていく意欲”を持てるようにしていくことが重要です。

サロン活動などでは、地域に出向く取り組みも進められていますが、一般の高齢者と聴覚に障害のある高齢者とのつながりや、地域の他の団体とのつながりを普段からつくる活動が課題となっています。

また、以上のような課題を実現していくためには、「創る福祉」「出向く福祉」「ネットワークを広げる福祉」というような“広い発想”にたって、“つながりをつくる”ことのできる職員の確保と養成が欠かすことのできない基盤となっています。

【付記】

「老いのひとり暮らし」について、『茶の世界史』(中公新書、1980年)の著者で和歌山大学元学長の角山栄さん(当時90歳)に、「亡き妻がくれたご近所というつながり」(『中央公論』2012年7月号)という文章があります。

79歳の時に妻を亡くして12年目の境地を語ったものですが、一人暮らしの最初は、「野菜と豆腐をお湯で煮たものに味噌を入れるだけでは、味噌汁の味がしなかった」というように、「出汁をとることを知らない」というところからのスタートだったのですが、①自転車で買い物に行く途中で事故に遭って怪我をした際、ご近所の方が夕食を作って持ってきてくれたり、②心臓が弱ってゴミ出しの時に倒れた時も、向いの奥さんに発見してもらって助かったり、③電動自転車でバランスを崩してしまっただけからは、買い物にも行けなくなったそうです(生活協同組合の夕食宅配を利用)。こうした出来事を通じて、「コミュニティの大切さ」というのを痛感されたというのです。

角山さんは、「妻を亡くした男にはどんな幸せがあるのだろうか」と考えつづけた結果、「幸せとは人と人とのつながり」だと確信します。第1は、ご近所の人たちとのつながり、第2は、もう少し広い範囲の地域とのつながり(自分を必要としてくれる人がいること)、第3は、「お茶」をめぐるつながり(CHAのC:コミュニケーション、H:ホスピタリティ〈もてなし〉、A:アソシエーション〈組織・団体〉)で誕生したグループが気にかけてくれるようになったこととし、「人間は孤立したらダメ」、「良い社会とは、人が孤立しないで生きていける社会」だとして、人間関係の大切さを見直し、自然との共生を大切にする文化へ、価値観を転換していかなければならないと主張されています。

「孤立しないで一人で生きていくことができる人々が増えていけば、社会も確実に変わっていくのではないかと期待しています」というのがこの文章の結びでした。

このたびの調査から明らかになった、高齢聴覚障害者の孤立・孤独の問題についても、「ご近所」とつながって、必要なサポートを受けながら、孤立しないで自分らしく生きていけるための方向性にこの文章はヒントを与えてくれています。

巻末資料 1

滋賀県における高齢の聴覚障害者のニーズ調査 [集計データ]

巻末資料 アンケート調査 集計データ

問1 居住地（福祉圏域） n=236

大津	湖南	甲賀	東近江	湖東	湖北	湖西
29%	17%	14%	11%	15%	12%	2%
71人	42人	33人	27人	35人	28人	5人

問2 居住期間 n=233

10年未満	10～19年	20～29年	30年以上
7%	5%	11%	77%
16人	12人	25人	180人

問3 年齢 n=236

64歳未満	65～74歳	75～79歳	80歳以上
27%	41%	18%	14%
63人	97人	43人	33人

問4 性別 n=236

男性	女性
46%	54%
108人	128人

問5 家族構成 n=236

一人暮らし	同居 2人	同居 3人	同居 4人	同居 5人以上
15%	58%	11%	6%	10%
35人	138人	26人	13人	24人

問6 家族との会話方法（複数回答） n=186

	手話 (触手話)	発語	読話	筆談	補聴器	身振り	その他	合計
配偶者	50%	10%	8%	10%	11%	8%	2%	229人
	115人	23人	18人	23人	26人	19人	5人	
息子	31%	12%	12%	14%	8%	15%	6%	97人
	30人	12人	12人	14人	8人	15人	6人	
娘	31%	14%	19%	17%	9%	6%	5%	81人
	25人	11人	15人	14人	7人	5人	4人	
嫁・婿	29%	23%	9%	14%	9%	6%	11%	35人
	10人	8人	3人	5人	3人	2人	4人	
孫	24%	19%	17%	12%	7%	10%	10%	58人
	14人	11人	10人	7人	4人	6人	6人	
兄弟・姉妹	16%	16%	21%	32%	3%	13%	0%	38人
	6人	6人	8人	12人	1人	5人	0人	
親	7%	33%	19%	16%	7%	14%	5%	43人
	3人	14人	8人	7人	3人	6人	2人	
その他	10%	10%	0%	20%	10%	30%	20%	10人
	1人	1人	0人	2人	1人	3人	2人	

問7 生活するための収入（多いもの） n=233

自分の給与	自分の障害年金	自分以外の家族の給与	自分以外の家族の年金・障害年金	自分や家族の生活保護	その他
17%	62%	11%	8%	0%	2%
40人	144人	25人	19人	0人	5人

問7-1 現在の収入 n=231

自分の仕事があり、収入を得ている	自分の障害年金がある	自分や家族が生活保護を受けている	収入は無い
36%	87%	2%	3%
84人	201人	4人	6人

問8 収入源 n=97

正規雇用	非正規雇用（週30時間以上）	非正規雇用（週30時間未満）	自営業	農林漁業	その他
15%	20%	33%	7%	4%	21%
15人	19人	32人	7人	4人	20人

問9 年収 n=232

0～59万円	60～119万円	120～199万円	200～279万円	280万円以上
6%	57%	18%	8%	11%
13人	133人	43人	18人	25人

問10 生活の余裕 n=217

足りない	少し足りない	足りている	ゆとりがある
23%	34%	35%	8%
51人	74人	75人	17人

問11 学歴 n=227

聾話学校 小学部	聾話学校 中学部	聾話学校 高等部	地域の小学校	地域の中学校	地域の高校	地域の大学	その他
1%	7%	62%	0%	4%	14%	9%	4%
3人	16人	141人	0人	9人	32人	21人	8人

問12 居住形態 n=234

戸建て（自分のもの）	戸建て（借りている）	戸建て（その他）	マンション（自分のもの）	マンション（借りている）	マンション（その他）	県営または市営住宅	施設に入所	その他	その他（兄の家の離れ）
79%	0%	3%	6%	3%	0%	6%	1%	1%	0%
185人	1人	8人	14人	8人	0人	13人	2人	2人	1人

問13 聴覚障害になった年齢 n=233

生まれたときから	1～6歳ごろ	7～15歳ごろ	16～20歳ごろ	21～40歳ごろ	40～60歳ごろ	60歳以上
45%	34%	4%	1%	6%	3%	6%
105人	80人	10人	3人	13人	8人	14人

問14 身体障害者等級 n=233

1級	2級	3級	4級	5級	6級	持っていない
32%	54%	6%	3%	0%	4%	1%
75人	126人	14人	6人	1人	8人	3人

問15 聴覚以外の障害（複数回答） n=228

言語障害	肢体不自由	視覚障害	内部障害	知的障害	精神障害	その他	ない
28%	3%	4%	2%	2%	0%	3%	62%
63人	7人	10人	4人	4人	1人	6人	142人

問16 日中の過ごし方（複数回答） n=228

家にいることが多い	仕事をしている	障害者支援事業所などに通っている	デイサービスやデイケアなどに通っている	団体活動、地域活動、ボランティア活動等	入院中もしくは通院している	その他
49%	27%	14%	8%	17%	7%	6%
111人	60人	31人	19人	39人	15人	14人

【参考】年代別の日中の過ごし方 n=225

	家にいる	仕事	障害者支援事業所	デイケア	団体活動	入院中・通院	合計
55～64歳	20人	32人	9人	0人	8人	2人	71人
	28%	45%	13%	0%	11%	3%	28%
65～74歳	47人	24人	10人	8人	23人	6人	118人
	40%	20%	8%	7%	19%	5%	40%
75歳以上	44人	4人	12人	12人	8人	7人	87人
	51%	5%	14%	14%	9%	8%	51%
合計	111人	60人	31人	20人	39人	15人	276人

問17 一人で出かけることができるか n=235

一人で出かけられる	少し困るが、一人で出かけられる	一人では難しい。付き添いが必要	出かけようと思わない
81%	10%	8%	0%
191人	24人	19人	1人

【参考】居住地別の外出度 n=235

	一人で出かけられる	少し困るが、一人で出かけられる	一人では難しい。付き添いが必要	出かけようと思わない	合計
大津	51人	9人	6人	0人	66人
	77%	14%	9%	0%	100%
湖南	34人	5人	2人	0人	41人
	83%	12%	5%	0%	100%
甲賀	31人	2人	0人	0人	33人
	94%	6%	0%	0%	100%
東近江	21人	2人	4人	0人	27人
	78%	7%	15%	0%	100%
湖東	26人	4人	5人	0人	35人
	74%	11%	14%	0%	100%
湖北	23人	2人	2人	1人	28人
	82%	7%	7%	4%	100%
湖西	5人	0人	0人	0人	5人
	100%	0%	0%	0%	100%

問18 日常の買い物に行く方法（複数回答） n=230

	徒歩	自転車	バイク	公共交通機関 (バス・電車)	タクシー	自分で 運転 する 自家用 車	家族が 運転 する 自家用 車	知人が 運転 する車 へ同乗	ボラン ティア の車	送迎 バス	生活 協同 組合 などの 配達	移動 販売	その他
よく 使う	20%	12%	0%	5%	2%	32%	10%	1%	0%	0%	0%	0%	2%
	45人	27人	1人	12人	4人	74人	24人	3人	0人	0人	0人	0人	5人
ほかに 使う	31%	21%	2%	24%	11%	14%	15%	3%	0%	1%	7%	0%	3%
	71人	49人	4人	56人	26人	33人	34人	6人	0人	2人	15人	1人	6人
合計	116人	76人	5人	68人	30人	107人	58人	9人	0人	2人	15人	1人	11人

【参考】地域別の買い物の手段 n=230

	徒歩	自転車	バイク	公共 交通 機関 (バス・ 電車)	タク シー	自分で 運転 する 自家用 車	家族が 運転 する 自家用 車	知人が 運転 する車 へ同乗	ボラン ティア の車	送迎 バス	総計
大津	46人	24人	3人	30人	18人	20人	15人	3人	0人	1人	46人
	29%	15%	2%	19%	11%	13%	9%	2%	0%	1%	100%
湖南	21人	14人	1人	12人	1人	18人	11人	2人	0人	1人	21人
	26%	17%	1%	15%	1%	22%	14%	2%	0%	1%	100%
甲賀	16人	7人	1人	6人	6人	22人	7人	0人	0人	0人	16人
	25%	11%	2%	9%	9%	34%	11%	0%	0%	0%	100%
東近江	6人	5人	0人	6人	0人	15人	6人	2人	0人	0人	6人
	15%	13%	0%	15%	0%	38%	15%	5%	0%	0%	100%
湖東	17人	14人	0人	7人	4人	15人	11人	2人	0人	0人	17人
	24%	20%	0%	10%	6%	21%	16%	3%	0%	0%	100%
湖北	9人	10人	0人	6人	0人	16人	7人	0人	0人	0人	9人
	19%	21%	0%	13%	0%	33%	15%	0%	0%	0%	100%
高島市	1人	2人	0人	1人	1人	1人	1人	0人	0人	0人	1人
	14%	29%	0%	14%	14%	14%	14%	0%	0%	0%	100%

問19 日常のコミュニケーション手段（複数回答） n=235

	手話 (触手話)	補聴器	筆談	発語	読話	人工 内耳	指文字	キョ ード ス ピー チ	絵	身ぶり	その他
よく 使う	66%	13%	5%	4%	2%	6%	0%	0%	0%	1%	0%
	154人	30人	11人	9人	4人	13人	1人	0人	0人	3人	0人
ほかに 使う	11%	11%	56%	20%	23%	0%	23%	0%	3%	32%	3%
	25人	26人	132人	48人	55人	1人	55人	1人	6人	75人	6人
合計	179人	56人	143人	57人	59人	14人	56人	1人	6人	78人	6人

問20 補装具や日常生活用具などの福祉機器や情報機器（複数回答） n=231

	補聴器	FAX	アイ ド ラ ゴ ン	パ ト ラ イ ト	シ ル バ ー ホ ン	安全 つ え	点 字	以 外
使っ て い る	44%	76%	28%	56%	4%	5%	1%	8%
	101人	176人	65人	130人	9人	12人	3人	19人
知っ て い る	42%	19%	42%	19%	31%	26%	22%	0%
	97人	44人	96人	44人	71人	61人	50人	0人
総計	198人	220人	161人	174人	80人	73人	53人	19人

問21 健康状態 n=234

健康	まあまあ健康	あまり健康ではない	健康ではない
24%	61%	14%	2%
85%		15%	
55人	143人	32人	4人

問22 通院しているか n=235

はい	いいえ
84%	16%
197人	38人

問22-1 通院頻度 n=198

週1回以上	月2~3回	月1回	2か月に1回	3か月に1回くらい
9%	19%	41%	20%	12%
18人	37人	81人	39人	23人
ほぼ毎週		月1回未満		
28%		72%		
55人		143人		

【参考】通院する人の年代別状況 n=136

	週1回以上	月2~3回	月1回	合計
55~64歳	1人	9人	17人	27人
	1%	7%	13%	20%
65~74歳	9人	16人	32人	57人
	7%	12%	24%	42%
75~79歳	7人	7人	14人	28人
	5%	5%	10%	21%
80歳以上	1人	5人	18人	24人
	1%	4%	13%	18%
合計	13%	27%	60%	100%
	18人	37人	81人	136人

問22-2 通院方法 n=228

一人で行く	家族に連れて行ってもらう	友人や近所の人が連れていってくれる	手話通訳者・要約筆記者と一緒に行く	通訳・介助者と一緒に行く
131人	34人	3人	45人	8人
57%	15%	1%	20%	4%

問23 病気の時の困りごと（複数回答） n=220

自分で病院に行けない	自分で連絡ができない	病院(受付や診察も含める)で自分の病気のことをうまく伝えられない	医者の説明がわからない	薬の飲み方がわからない・間違える	手話通訳・要約筆記が頼めない	困ったことはない	その他
21%	33%	33%	45%	10%	11%	25%	9%
47人	72人	73人	100人	22人	24人	55人	20人

問24 今の生活に誰かの助け（介護や介助）が必要か n=233

介護・介助が必要	介護・介助は必要ない
17%	83%
40人	193人

問25 だれかの助け（介護・介助）が必要な理由（複数回答） n=34

脳卒中 (脳出血・ 脳梗塞等)	心臓病	がん (悪性 新生物)	関節 (リウマチ等)	認知症	転倒・骨折	その他
12%	18%	0%	9%	12%	24%	47%
4人	6人	0人	3人	4人	8人	16人

問26 介護保険や介護サービスを知っているか n=226

介護サービスを利用している	利用していない	知らない
12%	66%	22%
27人	149人	50人

【参考】一人暮らしまたは二人暮らしの人の介護サービス利用状況 n=167

家族	介護サービスを利用している	利用していない	知らない	合計
一人	3%	4%	13%	20%
	5人	6人	22人	33人
二人	9%	19%	52%	80%
	15人	32人	87人	134人
合計	12%	23%	65%	100%
	20人	38人	109人	167人

【参考】問24「介護・介助が必要」と回答した人の介護サービスの利用は？ n=40

介護サービスを利用している	利用していない	知らない	空白
60%	15%	23%	3%
24人	10人	5人	1人

【参考】介護サービスを「知らない」と回答した人の通院状況 n=50

一人で出かけられる	少し困るが、一人で出かけられる	一人では難しい。付き添いが必要
84%	12%	4%
42人	6人	2人

問27 要介護度 n=29

要支援1	要支援2	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	わからない
14%	31%	10%	10%	10%	7%	17%
4人	9人	3人	3人	3人	2人	5人

問27-1 利用している（利用した）介護サービス

n=24

訪問介護 (ホームヘルプ サービス)	訪問看護	訪問入浴 介護	通所介護 (デイ サービス)	通所リハ ビ リ テ ー シ ョ ン サ ー ビ ス (デ イ ア)	短期入所 生活介護	福祉用具 の貸与	住宅 改修費の 支給	その他
23%	11%	0%	19%	7%	5%	18%	12%	5%
13人	6人	0人	11人	4人	3人	10人	7人	3人

【参考】利用している介護サービス

	言語障害	肢体 不自由	視覚障害	内部障害	知的障害	精神障害	その他	ない
訪問介護	2人	0人	0人	1人	0人	0人	2人	7人
訪問看護	1人	0人	0人	1人	0人	0人	0人	4人
訪問入浴介護	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人
通所介護	3人	0人	1人	1人	0人	0人	2人	4人
通所リハ	1人	1人	0人	0人	0人	0人	1人	1人
短期入所	2人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	1人
福祉用具	2人	2人	0人	1人	1人	0人	0人	5人
住宅改修	1人	2人	0人	0人	0人	0人	0人	4人
その他	1人	1人	1人	0人	0人	0人	0人	0人
合計	13人	6人	2人	4人	1人	0人	5人	26人

問28 介護・介助をしてきている人（複数回答）

n=137

夫・妻	息子	娘	嫁・婿	孫	自分の 兄弟・姉妹	親	介護 ヘルパー	その他
46%	28%	26%	7%	4%	6%	1%	17%	9%
63人	38人	36人	9人	5人	8人	1人	23人	12人

その人の年齢

n=132

20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～64歳	65～74歳	75～84歳	85歳以上
7%	9%	22%	20%	28%	13%	2%
9人	12人	29人	26人	37人	17人	2人

問29 介護・介助を必要ないとする理由は

n=192

介護を受ける必要 がないから (自立している)	要介護認定を申請 したが、自立判定 となったから	要介護認定の方法 がわからないから	介護を受けること が恥ずかしいから	その他
89%	1%	3%	2%	6%
171	1	5	3	12

【参考】介護を受ける必要がない（自立している）と回答した人の年代別状況

n=170

0～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80歳以上	合計
3人	22人	21人	36人	41人	28人	19人	170人
		64歳以下	65-74歳	75歳以上			
		27%	45%	28%			
		46人	77人	47人			

問30 将来、介助や介護が必要になったときに生活したい場所

n=227

現在の家に 住み続けたい	健聴者と一緒の 老人ホームなど の施設に入所し たい	今後、県内に 聴覚障害者向け の老人施設が 建設されれば 入所したい	子どもや親せき の家に移って 世話をして もらいたい	その他	分からない
46%	2%	34%	2%	1%	15%
105人	5人	78人	4人	2人	33人

【参考】一人または二人暮らしの人の希望は

n=167

	現在の家に 住み続けたい	健聴者と一緒 の老人ホーム などの施設に 入所したい	今後、県内に 聴覚障害者 向けの老人 施設が 建設されれば 入所したい	子どもや 親せきの家に 移って 世話をして もらいたい	その他	分からない	合計
一人	10%	1%	7%	0%	0%	2%	20%
	17人	1人	12人	0人	0人	3人	33人
二人	37%	2%	26%	1%	2%	14%	80%
	62人	3人	43人	1人	2人	23人	134人
合計	47%	2%	33%	1%	1%	1%	16%
	79人	4人	55人	1人	1人	26人	167人

【参考】現在の家に住み続けたい人と聴覚障害者向けの老人施設に入りたい人の年代別状況

n=182

	現在の家	聴覚障害者向け の老人施設	合計
～64歳	51%	49%	41人
	21人	20人	
65～69歳	53%	47%	79人
	42人	37人	
75～79歳	68%	32%	62人
	42人	20人	
合計	105人	77人	182人

【考察】現在の家に住み続けたい人と聴覚障害者向けの老人施設に入りたい人の地域別状況

n=182

地域	現在の家	聴覚障害者 向けの老人 施設	合計
大津	29人	21人	50人
湖東	16人	10人	26人
湖南	16人	16人	32人
甲賀	12人	10人	22人
湖西	4人	1人	5人
湖北	13人	8人	21人
東近江	15人	11人	26人
合計	105人	77人	182人

問31 県外の聴覚障害者向け老人ホームを知っている

n=220

はい	いいえ
67%	33%
148人	72人

問32 滋賀県聴覚障害者福祉協会の事業（複数回答）

n=214

	手話通訳・ 要約筆記派遣	生活相談	きこえの相談	センターの 講座や催し	びわこみみの 里	湖北みみの里
知っている	51%	57%	57%	41%	63%	64%
	109人	122人	121人	87人	135人	137人
利用している	39%	7%	4%	26%	20%	17%
	83人	16人	8人	56人	43人	37人

問33 情報を知る方法（複数回答）

n=231

	テレビ番組	手話や 字幕付きの テレビ番組	ラジオ	新聞	回覧板や広 報	インターネット (ホームペー ジなど)	会話や おしゃべり
一番良い方法	6%	41%	0%	8%	2%	3%	9%
	13人	94人	0人	18人	5人	8人	21人
その他の方法	39%	39%	2%	45%	31%	26%	73%
	90人	91人	4人	103人	72人	59人	168人
合計	103人	185人	4人	121人	77人	67人	189人

問33-1 会話やおしゃべりの相手（複数回答） n=189

家族	同じ聴覚 障害者	サークル の人	近所の人	地域の人 (民生委員 や自治会 の人)	身体障害 者相談員	役所の 職員や 専任 通訳者	聴覚 障害者 センター 職員	その他
66%	70%	42%	20%	11%	3%	28%	15%	10%
124人	132人	80人	37人	20人	6人	53人	29人	19人

【参考】年齢層

	家族	同じ聴覚 障害者	サークル の人	近所の人	地域の人 (民生委員 や自治会 の人)	身体障害 者相談員	役所の 職員や 専任 通訳者	聴覚 障害者 センター 職員	その他
64歳未満	22%	31%	15%	8%	4%	1%	9%	4%	7%
	30人	42人	21人	11人	5人	1人	13人	5人	9人
65～74歳	27%	23%	17%	7%	4%	1%	12%	5%	3%
	60人	52人	38人	16人	8人	3人	26人	12人	7人
75～79歳	24%	28%	12%	6%	5%	2%	10%	9%	3%
	21人	24人	10人	5人	4人	2人	9人	8人	3人
80歳以上	21%	23%	18%	8%	5%	10%	8%	7%	0%
	13人	14人	11人	5人	3人	6人	5人	4人	0人

問34 スマホやパソコンを使う

n=231

はい	いいえ
75%	25%
174人	57人

問34-1 スマホやパソコンの使い方（複数回答）

n=166

連絡	調べものや ニュースなどを見る	パソコンで 文書などを作る	自分から発信する (SNS、Twitter、 ホームページなど)	その他
90%	80%	41%	21%	5%
150人	133人	68人	35人	8人

【参考】年齢層

	連絡	調べものや ニュースなどを見る	パソコンで文書 などを作る	自分から発信する (SNS、ツイ ッター、ホーム ページなど)	その他
64歳未満	47人	50人	25人	15人	1人
	34%	36%	18%	11%	1%
65～74歳	62人	57人	30人	13人	6人
	37%	34%	18%	8%	4%
75～79歳	27人	18人	9人	6人	0人
	45%	30%	15%	10%	0%
80歳以上	14人	8人	4人	1人	1人
	50%	29%	14%	4%	4%

問35 活動について（複数回答）

n=229

	聴覚障害者 団体の活動	手話・要約 筆記 サークル	他の障害者 団体の活動 (身障連 など)	社会福祉 協議会や ボランティアの活 動	自治会や 地域の クラブなど	趣味・娯楽 の集まり・ サークル	その他
参加して いる	65%	48%	20%	13%	14%	28%	3%
	149人	109人	45人	30人	32人	64人	7人
参加して いない	27%	41%	58%	62%	59%	50%	7%
	62人	93人	132人	141人	135人	114人	15人

問36 活動に参加していない理由（複数回答）

n=173

一緒に参加 する仲間が いない	一人で行く のが不便・ 遠い	コミュニ ケーション ができない	聞こえに 不安がある	お金が かかる	家を留守に できない	他に やりたい事 がある	その他
27%	26%	36%	20%	12%	8%	25%	20%
46人	45人	63人	35人	20人	13人	43人	34人

問37 近所の人との付き合い（複数回答）

n=229

あいさつを する	相談する	おすそ分け をする お土産を 分ける	何か起きた ときに聞く 連絡して もらう	買い物を してもら う 買い物を 手伝う	一緒に 出かける	その他	特にな い
86%	12%	31%	34%	2%	7%	4%	12%
198人	27人	71人	79人	5人	16人	10人	28人

問38 相談相手（複数回答）

①お金のこと（銀行の手続き、支払いや請求など）

n=198

	家族・ 親戚	聴覚障害 者団体の 会員・ 友人	近所の人	相談員	設置 通訳者	役場の 職員	サークル 会員	ヘルパー	福祉施設 職員	その他
主な 相談相手	69%	4%	3%	2%	4%	2%	2%	0%	2%	8%
	137人	7人	6人	4人	8人	4人	3人	0人	3人	15人
他の 相談相手	6%	2%	0%	2%	5%	4%	1%	0%	4%	2%
	12人	4人	0人	4人	10人	8人	2人	0人	7人	3人
合計	149人	11人	6人	8人	18人	12人	5人	0人	10人	18人

②地域のこと（自治会や近所づきあい） n=180

	家族・ 親戚	聴覚障害 者団体の 会員・ 友人	近所の人	相談員	設置 通訳者	役場の 職員	サークル 会員	ヘルパー	福祉施設 職員	その他
主な 相談相手	43%	3%	13%	3%	4%	4%	4%	2%	1%	3%
	77人	6人	24人	5人	8人	7人	8人	3人	2人	6人
他の 相談相手	19%	9%	22%	0%	8%	4%	5%	0%	2%	2%
	34人	16人	40人	0人	14人	8人	9人	0人	4人	4人
合計	111人	22人	64人	5人	22人	15人	17人	3人	6人	10人

③健康や病気に関すること n=194

	家族・ 親戚	聴覚障害 者団体の 会員・ 友人	近所の人	相談員	設置 通訳者	役場の 職員	サークル 会員	ヘルパー	福祉施設 職員	ケア マネー ジャー	その他
主な 相談相手	52%	1%	1%	1%	13%	2%	1%	1%	5%	2%	6%
	100人	2人	1人	2人	25人	3人	2人	2人	9人	4人	12人
他の 相談相手	19%	8%	2%	5%	10%	7%	5%	0%	4%	3%	4%
	37人	15人	4人	9人	20人	14人	10人	0人	7人	5人	7人
合計	137人	17人	5人	11人	45人	17人	12人	2人	16人	9人	19人

④役所の手続きなど n=203

	家族・ 親戚	聴覚障害 者団体の 会員・ 友人	近所の人	相談員	設置 通訳者	役場の 職員	サークル 会員	ヘルパー	福祉施設 職員	その他
主な 相談相手	32%	4%	1%	2%	20%	18%	0%	0%	4%	4%
	65人	8人	2人	4人	40人	37人	1人	0人	8人	9人
他の 相談相手	20%	0%	1%	0%	16%	15%	1%	0%	5%	3%
	40人	0人	2人	0人	33人	30人	3人	0人	11人	6人
合計	105人	8人	4人	4人	73人	67人	4人	0人	19人	15人

⑤新聞やテレビの内容について n=181

	家族・ 親戚	聴覚障害 者団体の 会員・ 友人	近所の人	相談員	設置 通訳者	役場の 職員	サークル 会員	ヘルパー	福祉施設 職員	その他
主な 相談相手	51%	8%	1%	1%	4%	1%	4%	0%	3%	6%
	93人	14人	2人	2人	7人	2人	8人	0人	5人	11人
他の 相談相手	21%	18%	1%	2%	6%	3%	10%	0%	6%	2%
	38人	33人	2人	3人	10人	5人	19人	0人	10人	4人
合計	131人	47人	4人	5人	17人	7人	27人	0人	15人	15人

問39 今後、あなたや聴覚障害の仲間が安心して暮らすために滋賀県内で必要と思うこと
（複数回答） n=211

ア. 同じ仲間が集まりやすくする	90%	190人
同じ仲間でも働ける場や、職場で聞こえない人ができる仕事を増やす	54%	93人
同じ仲間が集まってすごせる場（サロン・短期入所施設・小規模作業所）	46%	97人
同じ仲間と一緒に暮らせる施設（グループホームや老人ホームなど）	44%	113人

イ. 同じ仲間が安心して暮らす「しくみ」をつくる	92%	195人
大勢の人が使う施設（たとえば駅・病院）にわかりやすい案内を増やす	41%	87人
災害や事故が起きたときに助けが求められる（たとえば24時間頼める手話通訳・要約筆記・盲ろう者ガイドヘルパー）しくみをつくる	75%	158人
急な連絡（避難情報、近所や職場の人の入院や死亡など）や、日ごろの暮らしに役立つ情報が受け取れるしくみをつくる	53%	111人
聞こえない人たち専門の相談機関をつくる	37%	78人
暮らしや福祉・医療の相談ができる場をつくる	42%	89人
引きこもりがちな人を連れ出してくれる支援	22%	47人
聞こえや補聴器の相談ができる場をつくる	24%	51人
ウ. 聴覚障害の人と話が通じる人材（手話のできるホームヘルパーなど）を養成する	38%	80人
エ. その他		
NET119通報に繋げることができました。災害や事故など即時スマホメールで対応できるので助かります。		
アイドラゴン、パトライト、フラッシュベル、補聴器、補聴器付きめがねとか詳しく『カタログ』通信誌をたくさん発行して欲しいです。いつでも欲しい時は注文できるようにして欲しいです。どこでもこういうカタログ誌を置いて欲しいです。		
ろう協のメンバーと共に会話できるようになってほしい。 ろう協の行事に参加したい←介助者がいて欲しい。		
わからない		
医師、看護師、警察官、救命救急師など公共で働く人々が手話及びそれに準ずるコミ手段を身につけ(1)-②の緊急時の体制が整えられるまで対応できるようにしていただく		
音声を文字化するシステムをどこでも設置してもらいたい		
携帯等で相手の言葉を読み取れるような機器の開発をどんどんして欲しい。		
健聴者もろうあ者も共に楽しめる施設があればうれしいです。		
湖南省 甲賀市 ろうあ者だけほっとサロンの活動にも積極的に参加しています。		
高齢となった聴覚障害者の交通手段について改善してほしい 移動時、買い物時のヘルパーなど容易に利用できる環境整備など 現状も制度はあると思いますが、もう少し利用できる環境の改善を進めてほしい。		
私は中途失聴者ですので手話は達者ではありません、 手話でお話しされても、全く通じません。「うん、うん」とわかったような返事をしてもわかっていません。書いてもらう方がいです。		
手話ができないため、こちらの言っていることが通じていないので理解ができず話にならない。本人の言いたい事もたくさんあると思うが言えない。		
手話ができなくても筆談対応、理解拡大にPRが必要		
手話ができるヘルパー、老人ホームが欲しい		
手話の出来る人が増えて欲しい		
手話通訳者や通訳介助者も増えて欲しい		
触手話ができるヘルパーを要請して欲しい		
人工内耳装用者のネットワークがあればいいと思う。（現行の友の会は入会者が少ない）		
草津市地域に街角スピーカーホンが設置してあるが、私は聞こえません。街角に文字表示ディスプレイ設置したらいいなー スマートフォンに例外的緊急情報警報メールを配信して欲しい。		
送迎バス		
聴覚障害者の老人ホーム		
送迎バス		
同じ仲間はなし 寂しいです 遠いいなかに暮らしている		
盲ろう通訳・介助者の人材を増やすこと		

巻末資料 2

滋賀県における高齢の聴覚障害者のニーズ調査 [調査票]

問7 あなたが生活するための収入は次のどれが多いですか。多い順に1, 2, 3を記入してください

- ア. () 自分の給与
イ. () 自分の障害年金
ウ. () 自分以外の家族の給与
エ. () 自分以外の家族の年金・障害年金
オ. () 自分や家族の生活保護
カ. () その他 ()

問7-1 あなた自身は現在、収入がありますか

- ア. 自分の仕事があり、収入を得ている
イ. 自分の障害年金がある
ウ. 自分や家族が生活保護を受けている
エ. 収入は無い

問8 あなたが仕事で収入を得ている場合、あてはまるものに○をしてください

- ①あなたの身分は
ア. 正規雇用 イ. 非正規雇用 (週30時間以上)
ウ. 非正規雇用 (週30時間未満)
②それ以外のお仕事の場合は次のどれですか
ア. 農林漁業 イ. 自営業 ウ. その他 ()

問9 あなた(家族を除く)の昨年(1月から12月)の年収は次のどれですか

- ア. 0~59万円
イ. 60~119万円
ウ. 120~199万円
エ. 200万円~279万円
オ. 280万円以上

問10 あなたの収入は、生活に足りていますか

- ア. 足りない イ. 少し足りない ウ. 足りている エ. ゆとりがある

問11 あなたが卒業した学校(退学も含めて)について教えてください

- ア. 聾話学校 (小・中・高)
イ. 地域の学校 (小・中・高・大)
ウ. その他 ()

問 12 あなたが現在暮らしているところは次のどれですか

- ア. 戸建て ⇒それは次のどれですか。①～③から選んでください
①自分のもの ②借りている ③その他
- イ. マンション ⇒それは次のどれですか。①～③から選んでください
①自分のもの ②借りている ③その他
- ウ. 県営または市営住宅
- エ. 施設に入所
- オ. その他 ()

問 13 あなたが聴覚障害になったのは何歳ごろですか

- ア. 生まれたときから
- イ. 1～6歳ごろ
- ウ. 7～15歳ごろ
- エ. 16～20歳ごろ
- オ. 21～40歳ごろ
- カ. 40～60歳ごろ
- キ. 60歳以上

問 14 あなたの身体障害者手帳は何級ですか

- ア. 1級 イ. 2級 ウ. 3級 エ. 4級 オ. 5級 カ. 6級
- キ. 手帳は持っていない

問 15 あなたは聴覚以外の障害がありますか

- ア. ある ⇒①言語障害 ②肢体不自由 ③視覚障害 ④内部障害
⑤知的障害 ⑥精神障害 ⑦その他
- イ. ない

問 16 あなたは日中、どのように過ごしていますか

- ア. 家にいることが多い
- イ. 仕事をしている
- ウ. 障害者支援事業所などに通っている
- エ. 介護保険のデイサービスやデイケアなどに通っている
- オ. 団体活動、地域活動、ボランティア活動等をしている
- カ. 入院中もしくはは病院に通院している
- キ. その他 ()

問 17 あなたは一人ひとりで出かけることができますか

- ア. 一人で出かけられる
- イ. 少しすこ困るが、一人で出かけられる
- ウ. 一人では難しい。付き添いつきそいが必要ひつよう
- エ. 出かけようと思わないおも

問 18 あなたは日常にちじょうの買い物かいものにどのような方法ほうほうで行かれますか

よく使う方法つかに◎ 他にもあれば○をつけてください

- ア. 徒歩とほ
- イ. 自転車じてんしゃ
- ウ. バイク
- エ. 公共交通機関こうきょうこうつうきかん (バス・電車でんしゃ)
- オ. タクシー
- カ. 自分で運転する自家用車じぶん うんてん じかようしゃ
- キ. 家族が運転する自家用車かぞく
- ク. 知人が運転する車へ同乗ちじん くるま どうじょう
- ケ. ボランティアの車
- コ. 送迎バスそうげい
- サ. 生活協同組合などの配達せいかつきょうどうくみあい はいたつ
- シ. 移動販売いどうはんばい
- ス. その他 ()

問 19 あなたが日常生活にちじょうで使っているコミュニケーション手段しゅだんは何なんですか。

あてはまるものに○をしてください (いくつでも)。そのうち、最もよく使う

コミュニケーション手段しゅだんに◎をつけてください

- ア. 手話しゅわ (触手話)
- イ. 補聴器ほちょうき
- ウ. 筆談ひつだん
- エ. 発語はつご
- オ. 読話どくわ
- カ. 人工内耳じんこうないじ
- キ. 指文字ゆびもじ
- ク. キュードスピーチ
- ケ. 絵え
- コ. 身ぶりみ
- サ. その他 ()

問 20 補装具や日常生活用具などの福祉機器や情報機器についておたずねします。
「知っている」「使っている」ものに○をしてください

機器の名前	知っている	使っている
補聴器		
ファクス		
アイドラゴン (テレビに字幕を付ける)		
パトライトやフラッシュベル (光る装置)		
シルバーホン (電話の音を大きくする)		
安全つえ		
点字器や点字ディスプレイ		

上記以外で、実際に利用しているものがあれば記入して下さい

()

問 21 あなたの健康状態はいかがですか

- ア. 健康である イ. まあまあ健康である ウ. あまり健康ではない
エ. 健康ではない

問 22 あなたは現在、病院や医院 (診療所・クリニック) に通院していますか

- ア. はい イ. いいえ



問 22-1 どのくらい通院していますか

- ア. 週 1 回以上 イ. 月 2~3 回 ウ. 月 1 回 エ. 2 か月に 1 回
オ. 3 か月に 1 回くらい

問 22-2 あなたはいつもどのように通院していますか。1 つ選んでください

- ア. 一人で行く
イ. 家族に連れて行ってもらう
ウ. 友人や近所の人(ひと)が連れていってくれる
エ. 手話通訳者・要約筆記者と一緒に(いっしょ)に行く
オ. 通訳・介助者と一緒に行く
カ. その他 ()

問 23 あなたが病気の時に困ったことはありますか (いくつでも)

- ア. 自分で病院に行けない
- イ. 自分で連絡ができない
- ウ. 病院 (受付や診察も含める) で自分の病気のことをうまく伝えられない
- エ. 医師の説明がわからない
- オ. 薬の飲み方がわからない・間違える
- カ. 手話通訳・要約筆記が頼めない
- キ. 困ったことはない
- ク. その他 ()

問 24 あなたは今の生活に誰かの助け (介護や介助) が必要ですか

- ア. 介護・介助が必要
- イ. 介護・介助は必要ない

問 25 問 24 で「助け (介護や介助) が必要」と回答した方にお聞きします。

介護・介助が必要な理由を次から選んで○をしてください (いくつでも)

- ア. 脳卒中 (脳出血・脳梗塞等)
- イ. 心臓病
- ウ. がん (悪性新生物)
- エ. 関節 (リウマチ等)
- オ. 認知症
- カ. 転倒・骨折
- キ. その他 ()

問 26 あなたは介護保険や介護サービスのことを知っていますか。あてはまるものに○をしてください

- ア. 知っている ⇒ ①介護サービスを利用している (問 27 にお進みください)
②利用していない (問 28 にお進みください)
- イ. 知らない

問 27 介護サービスを利用している人におたずねします。あなたの要介護度は次のどれですか

- ア. ①要支援 1 ②要支援 2
③要介護 1 ④要介護 2 ⑤要介護 3 ⑥要介護 4 ⑦要介護 5
- イ. わからない

問 27-1 あなたが利用している（利用した）介護サービスはどれですか

- ア. 訪問介護（ホームヘルプサービス）
- イ. 訪問看護
- ウ. 訪問入浴介護
- エ. 通所介護（デイサービス）
- オ. 通所リハビリテーションサービス（デイケア）
- カ. 短期入所生活介護
- キ. 福祉用具の貸与
- ク. 住宅改修費の支給
- ケ. その他

問 28 あなたを介護・介助をしてきている人がいる場合、どなたですか。次の中から選んで○をしてください（いくつでも）

- ア ①夫・妻 ②息子 ③娘 ④嫁・婿 ⑤孫 ⑥自分の兄弟・姉妹
⑦親 ⑧介護ヘルパー ⑨その他（ ）

イ. ア. で①～⑦を選んだ方にお聞きします。介護・介助をしている人の満年齢は次のどれですか

- ①20～29 歳 ②30～39 歳 ③40～49 歳 ④50～64 歳
⑤65～74 歳 ⑥75～84 歳 ⑦85 歳以上

問 29 「介護・介助は必要ない」または「介護サービスを受けていない」と答えた方にお聞きします。その理由を1つ、次の中から選んでください

- ア. 介護を受ける必要がないから（自立している）
- イ. 要介護認定を申請したが、自立判定となったから
- ウ. 要介護認定の方法がわからないから
- エ. 介護を受けることが恥ずかしいから
- オ. その他（ ）

問 30 あなたはご自身が弱くなった時に、どこで生活したいですか。1つ選んで○をしてください

- ア. 現在の家に住み続けたい
- イ. 健聴者と一緒の老人ホームなどの施設に入所したい
- ウ. 今後、県内に聴覚障害者向けの老人施設が建設されれば入所したい
- エ. 子どもや親せきの家に移って世話をしてもらいたい
- オ. その他
- カ. 分からない

問 31 あなたは県外に聴覚障害者向けの老人ホームがあることを知っていますか
ア. はい イ. いいえ

(参考)

福岡県の田尻苑、広島県のあすらや荘、高知県の静幸苑、
兵庫県の淡路ふくろうの郷、大阪府のあすくの里、京都府のいこいの村・梅の
木寮、和歌山県のきのくにの手、埼玉県のななふく苑、北海道のやすらぎ荘)

問 32 下記は滋賀県聴覚障害者福祉協会の事業です。

「知っている」「利用している」ものに○をしてください

	知っている	利用している
1) 滋賀県立聴覚障害者センター		
①手話通訳・要約筆記派遣		
②生活相談		
③きこえの相談		
④センターの講座や催し		
2) びわこみみの里		
3) 湖北みみの里		

問 33 あなたが情報を知るのにいちばん良いものに◎をしてください。

ほかにもあれば○をしてください

- ①テレビ番組
- ②手話や字幕付きのテレビ番組
- ③ラジオ
- ④新聞
- ⑤回覧板や広報
- ⑥インターネット (ホームページなど)
- ⑦会話やおしゃべり

⇒⑦の会話やおしゃべりの相手はどんな人ですか

- ア. 家族
- イ. 同じ聴覚障害者
- ウ. サークルの人
- エ. 近所の人
- オ. 地域の人 (民生委員や自治会の人)
- カ. 身体障害者相談員
- キ. 役所の職員や専任通訳者
- ク. 聴覚障害者センター職員
- ケ. その他()

問 37 あなたは近所きんじよの人とどのようなつきあいをしていますか。あてはまるものに
○をつけてください (いくつでも)

- ア. あいさつをする
- イ. 相談そうだんする
- ウ. おすそ分けわをする、お土産みやげを分ける
- エ. 何かなに起きたときに聞く、連絡れんらくしてもらう
- オ. 買い物かいものをしてもらう、買い物を手伝てつだう
- カ. 一緒いっしょに出かける
- キ. その他 ()
- ク. 特とくにない

問 38 あなたは相談そうだんしたいことがあるとき、どんな人に相談しますか。①～⑤のそれぞれで主に相談する相手に◎、他にもあれば○をしてください。

相談したい内容など	相談する相手
① お金 <small>かね</small> のこと (銀行 <small>ぎんこう</small> の手続き <small>てつづ</small> 、 支払 <small>しはら</small> いや請求 <small>せいきゅう</small> など)	ア. 家族・親戚 <small>かぞく しんせき</small> イ. 聴覚障害者団体の会員・友人 <small>ちやうかくしやうがいしやだんたい かいいん ゆうじん</small> ウ. 近所 <small>きんじよ</small> の人 <small>ひと</small> エ. 相談員 <small>そうだんいん</small> オ. 設置通訳者 <small>せつちつうやくしや</small> カ. 役場の職員 <small>やくば しょくいん</small> キ. サークル会員 <small>かいいん</small> ク. ヘルパー ケ. 福祉施設職員 <small>ふくししせつしよくいん</small> コ. その他 ()
② 地域 <small>ちいま</small> のこと (自治会 <small>じちかい</small> や近所 <small>きんじよ</small> づきあ い)	ア. 家族・親戚 <small>かぞく しんせき</small> イ. 聴覚障害者団体の会員・友人 <small>ちやうかくしやうがいしやだんたい かいいん ゆうじん</small> ウ. 近所 <small>きんじよ</small> の人 <small>ひと</small> エ. 相談員 <small>そうだんいん</small> オ. 設置通訳者 <small>せつちつうやくしや</small> カ. 役場の職員 <small>やくば しょくいん</small> キ. サークル会員 <small>かいいん</small> ク. ヘルパー ケ. 福祉施設職員 <small>ふくししせつしよくいん</small> コ. その他 ()
③ 健康 <small>けんこう</small> や病気 <small>びようき</small> に関する <small>かん</small> こと	ア. 家族・親戚 <small>かぞく しんせき</small> イ. 聴覚障害者団体の会員・友人 <small>ちやうかくしやうがいしやだんたい かいいん ゆうじん</small> ウ. 近所 <small>きんじよ</small> の人 <small>ひと</small> エ. 相談員 <small>そうだんいん</small> オ. 設置通訳者 <small>せつちつうやくしや</small> カ. 役場の職員 <small>やくば しょくいん</small> キ. サークル会員 <small>かいいん</small> ク. ヘルパー ケ. 福祉施設職員 <small>ふくししせつしよくいん</small> コ. ケアマネージャー サ. その他 ()
④ 役所 <small>やくしよ</small> の手続き <small>てつづ</small> など	ア. 家族・親戚 <small>かぞく しんせき</small> イ. 聴覚障害者団体の会員・友人 <small>ちやうかくしやうがいしやだんたい かいいん ゆうじん</small> ウ. 近所 <small>きんじよ</small> の人 <small>ひと</small> エ. 相談員 <small>そうだんいん</small> オ. 設置通訳者 <small>せつちつうやくしや</small> カ. 役場の職員 <small>やくば しょくいん</small> キ. サークル会員 <small>かいいん</small> ク. ヘルパー ケ. 福祉施設職員 <small>ふくししせつしよくいん</small> コ. その他 ()
⑤ 新聞 <small>しんぶん</small> やテレビ <small>たいゐ</small> の内容 <small>ないよう</small> について	ア. 家族・親戚 <small>かぞく しんせき</small> イ. 聴覚障害者団体の会員・友人 <small>ちやうかくしやうがいしやだんたい かいいん ゆうじん</small> ウ. 近所 <small>きんじよ</small> の人 <small>ひと</small> エ. 相談員 <small>そうだんいん</small> オ. 設置通訳者 <small>せつちつうやくしや</small> カ. 役場の職員 <small>やくば しょくいん</small> キ. サークル会員 <small>かいいん</small> ク. ヘルパー ケ. 福祉施設職員 <small>ふくししせつしよくいん</small> コ. その他 ()

問 39 今後、あなたや聴覚障害の仲間が安心して暮らすために滋賀県内で必要と思うことがあれば○をつけてください（いくつでも）

ア. 同じ仲間が集まりやすくする

- ① 同じ仲間ではたらく場や、職場で聞こえない人ができる仕事を増やす
- ② 同じ仲間が集まってすごせる場（サロン・短期入所施設・小規模作業所）
- ③ 同じ仲間と一緒に暮らせる施設（グループホームや老人ホームなど）

イ. 同じ仲間が安心して暮らす「しくみ」をつくる

- ① 大勢の人が使う施設（たとえば駅・病院）にわかりやすい案内を増やす
- ② 災害や事故が起きたときに助けが求められる（たとえば 24時間頼める手話通訳・要約筆記・盲ろう者ガイドヘルパー）しくみをつくる
- ③ 急な連絡（避難情報、近所や職場の人の入院や死亡など）や、日ごろの暮らしに役立つ情報が受け取れるしくみをつくる
- ④ 聞こえない人たち専門の相談機関をつくる
- ⑤ 暮らしや福祉・医療の相談ができる場をつくる
- ⑥ 引きこもりがちの人を連れ出してくれる支援
- ⑦ 聞こえや補聴器の相談ができる場をつくる

ウ. 聴覚障害の人と話を通じる人材（手話のできるホームヘルパーなど）を養成する

エ. その他（具体的に）

[]

問 40 あなたが日常生活で困っていること、心配なこと、希望などを自由にお書きください

ご協力ありがとうございました

滋賀県における高齢の聴覚障害者のニーズ調査報告書

2021年（令和3年）7月31日 発行

企画・編集：高齢聴覚障害者のニーズ調査委員会

発行：社会福祉法人 滋賀県聴覚障害者福祉協会

〒525-0032 滋賀県草津市大路2丁目 11-33

TEL 077-561-6111 FAX 077-565-6101

印刷：株式会社 春日

本報告書は公益財団法人ダイトロン福祉財団 障害者福祉助成金の贈呈を受け作成しました。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製（コピー）することは、著作者および発行者の権利の侵害になりますので、その場合はあらかじめ社会福祉法人滋賀県聴覚障害者福祉協会あてに許諾を求めて下さい。

